

アドベンチャーノベルス
ADVENTURE NOVELS

ウルティマII

The Revenge of the Enchantress

In this book, you can become the hero and go through the adventures yourself or just sit back like a movie director and make a film of your own. The thrilling adventures you will encounter, the interesting episodes you will see on the way, the mysterious enigma you will be trying to fathom, all will depend on you, just you, with your judgement, flashes, abundant imagination and a little bit of luck!

著者　本橋信宏
原案　L.ブリティッシュ

Ultima II

designed by Lord British



ADVENTURE NOVELS

“フィクション+ゲームの手法”これがアドベンチャーノベルス。
ゴールへと導かれるストーリーはもちろん1本じゃない。この本の中でなら、主人公になりきっての冒険もよし、映画監督を気取ってストーリー作りを楽しむもよし――どんなスリリングな冒険に遭遇できるか？　どんなおもしろいエピソードに寄り道するか？　すべてはあなたの判断とひらめき、それにたくさんのイマジネーションとほんの少しのラッキー次第！

COVER ILLUSTRATION／佐藤仁彦
COVER DESIGN／THREE CORD

アドベンチャーノベルス



ウルティマⅡ

ULTIMA Ⅱ

本橋　信宏　著

JICC出版局

Adventure Novels

"ULTIMA II"

NOBUHIRO MOTOHASHI

Character and Story Base Licenser

© LORD BRITISH/ORIGIN SYSTEMS INC.

Published by JICC Publishing Division

With the fall of the diabolical Mondain, a time of peace and wonder began. But, these years were few, for unbeknownst to the fair peoples of BRITANNIA. Mondain, in his days of power, had an apprentice. Minax has come of age. Far more powerful than her mentor, she has holed up in the time of legends and from there, her shadow grows. Thou art the legendary hero of old, and 'tis thy duty and quest to vanquish this hellspawn foe. Go now and face thy destiny, the future and past await thee. May thou succeed, for the world is in thy hands.

Lord British

大魔王モンデインは死に、不思議なほど平和な時が訪れた。だが、それも、そう長くは続かなかった。ブリタニアの良民が知らぬうちに、モンデインの弟子ミナクスの時代が始まったからだ。

ミナクスは、師であるモンデイン以上の威力で伝説の時代を制し、そのときからミナクスの影が姿を現し始めたのだった。

そなたは、昔の伝説上の英雄なのだ。そしてこの地獄の世に生み落とされし敵を探し出し、打ち倒すのは、そなたの運命なのだ。行け！そして、自分の運命に直面せよ。過去と未来とが、そなたを待ち受けているであろう。そなたの成功を祈る……この世はすべてそなた次第だ。

ロード・ブリティッシュ

はじめに

本書は、一九八二年、アメリカのシェラ・オンライン社より発売された、パソコン用ゲームソフト「ウルティマII」を基にしたアドベンチャーノベルスです。パソコンゲームの楽しさに読み物の面白さをプラスした、新しい形のエンターテイメントとなっています。

パソコン用ゲームソフト「ウルティマII」は、パソコン・ロールプレイングゲームとして超人気の「ウルティマ・シリーズ」の二作目で、その前作「ウルティマ（一九八〇年、アメリカ、カルフォルニア・パシフィック社より発売）」の『ダークサイドを支配する邪神、モンデインの猛威により、悪霊や盗賊が跳梁（ちょうりょう）ばっこし、暗黒の時代を迎えていた世界に、一人の勇者によりモンデインが打倒されたことにより、平和な日々が取り戻された』というストーリーの後を受けた『モンデインの死後約千年続いた平和の時が、復讐に燃えたモンデインの弟子、ミナクスの君臨により終りを告げた世界において、いかに一人の勇者がミナクスを打倒し、再び平和を取り戻すか』といった内容のものです。美しいグラフィック、そして、広大なゲームワールド、多種多彩なキャラクター、多様なイベントと、前作同様のうま味に加え、ストーリーにSF的色

彩が更に強くなったことと、前作では若干弱かったシナリオの論理性が補強されたことにより、屋外探索・単独冒険形式のロールプレイングゲームの超一流としての評価を博しました。

さて、本書、アドベンチャーノベルス「ウルティマII」は、原作のパソコン用ゲームソフト同様、既刊「ウルティマI」のストーリーの後を受けた『モンデインの死後千年、ミナクスが君臨した世界』の物語となっています。このペーパー化に際しては、原著作者、ロード・ブリティッシュ（本名、リチャード・ガリエット）氏、著作権管理者、オリジン・システムズ社長、ロバート・ガリエット氏の協力により、原作より抽出した主要イベントに読み物としての味付けを施したものと、ニューヨークの地下鉄に乗っていた主人公が時空の歪(ゆが)みに紛れ込んでいくオープニング、原作にはないミナクスの謎等の若干のオリジナル・ストーリーとから、新たにプロットを作成し、アドベンチャーノベルスとして、ロード・ブリティッシュ氏描くところの「ウルティマ」の世界、その魅力を堪能(たんのう)いただけるものをと考えました。

豊かな想像力を駆使すれば、きっとファンタスティックな旅、スリリングな冒険を楽しんでいただけることでしょう。

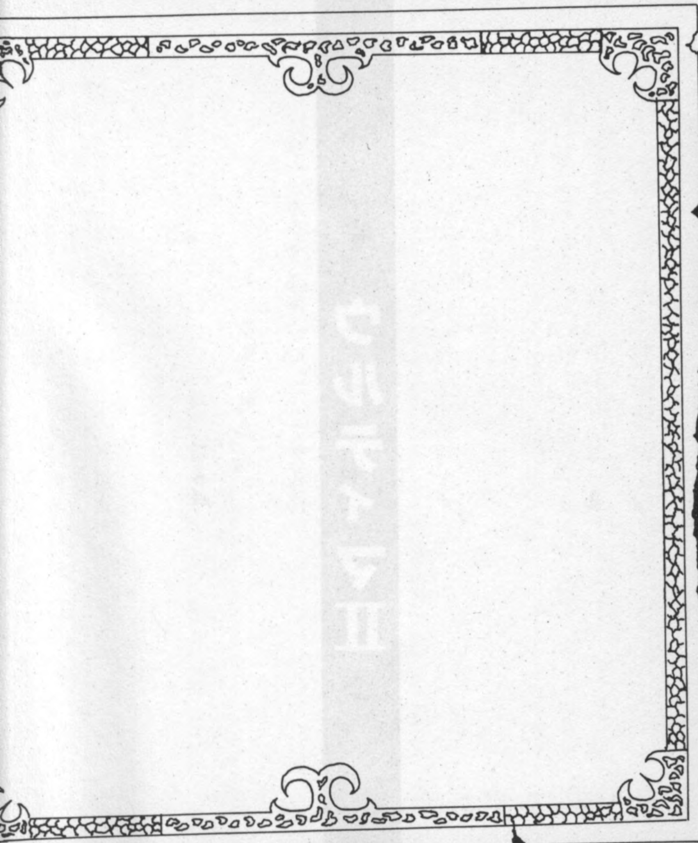
アドベンチャーノベルス編集部

本書の読み方

本書はプロローグよりはじめて、各シーンごとの文末の指示に従って読み進めて下さい。本書においては、主人公の能力を示す数値とダイスの目による戦闘システム等、偶然によりストーリー展開がなされるといった手法はとっておりません。主人公の属性と経験、それに得ている情報をもとに、そのおかれた情況を判断し、選択を行うことがストーリーを展開するすべてとなっています。選択をあやまると、志半ばで主人公が非業の死を遂げてしまったり、ミナクスの謎に迫れなかったりということにもなります。どうか慎重に読み進めて下さい。また、ストーリーの進行に伴い、主人公が手にするアイテム、得る情報は、その後になって重要な意味を持つものがたくさんあります。シオリのメモを活用するなどして下さい。

なお、本書は、既刊「ウルティマI」の続編となっていますが、原作のパソコンゲームが「II」の方からでもプレイできる様に、「ウルティマI」をまだ読まれてない方も、読んでいただける内容になっています。ただ、より「ウルティマ」の世界を理解し、お楽しみいただくには既刊「ウルティマI」の御一読もおすすめいたします。

ウルティマⅡ





獅子が大暗空で勝利の咆哮を成した時
大魔王モンデインの唸りは止みぬ。
至福千年王国が続くやも
人心三たび狐盗の態に陥る時
天空に死の塵風が乱立す。
モンデインの悪心ミナクスに移り
下界は時と空間の錯綜に陥る。
西暦二一一二年ミナクスは
地上に腐醜と狂気を対峙させ
嘲笑す。
ミナクスを討たぬ限り
地上は永久に大暗夜となりぬ。

プロローグ

1

ニューヨークの地下鉄は犯罪の温床だなんて、わけ知り顔の大人たちが話しているけど俺にとっちゃ唯一ボンヤリできる安息の場だ。今夜もこの車両には俺とアル中の太った自動車修理工らしき男が一人。昨日もこの地下鉄で十九歳のブロンドの商売女が首を締められてカネをかっぱらわれた。そのせいか、いつもより乗客は少ない。俺は昼間のセントラルパークでのハンバーガー売りでくたくたに疲れた体を横たえる。

「カルル！　だてにてめえにダッツンのライトバン貸してるんじゃねえぞ！　車とバーガー材料費だけでもうてめえには三千ドル貸してるんだ。ブロンド娘ばかりに目がいって……。てめえは何やっても喰えねえ野郎だ」

十七の俺にはバーガー売りも大事だが、遊びも大事だ。ところが、飲んだくれの親父じゃ何も俺にしてくれない。カネ？　とんでもない。あればアルコールに消えちまう。呆れたおふくろは十一も下の男と夜逃げしちまうし……。ワールド・トレード・センターの二つのビルがまだ朝日で銀色に縁どられている頃、俺はいつもハンバーガーを車一杯に積んでやってくる。あのビルが朝の光の中に浮かぶ姿はちょっとしたもんだ。だけど、夜の彼方にシルエットを晒す頃にはもう俺はボロボロ。



ああ、いつも地下鉄で俺は鉛になっちまった足をソファにのせ、うたたねするのが唯一の楽しみになっちまった。目の前には読み捨てのニューヨークタイムズが車内に舞っている。

〈中東の原油を巡り三つ邑の紛争　ソ連米国一触即発の危機〉

そういえば俺の嫌いなレーガンがようやく大統領を辞めたと喜んでいたら、とんでもなかった。ソ連とアメリカがまた水爆実験再開だ。ここのところ放射能が異常探知されているとかラジオのニュースでも言っていたな。やばい時代になったもんだ。

ニューヨークタイムズがまた俺の目に映る……。

〈ハワイ州発　十二月七日未明　真珠湾上空で日本機と米空軍機ニアミス　操縦士「ゼロファイターだった！」　亡霊攻撃？　ミステリーに地元騒然〉

三日前にもカスター将軍の部隊がサンフランシスコ近くでいきなり現れて消えたとか、オレゴンの農家が一家で行方不明になり、二週間後にひょっこり戻って来た時は「リンカーンが大統領戦に出馬するんで応援してきた」とか、わけのわからない事をくっちゃべり、奇人扱いを受けているといったニュースもあったっけ。

なにがなんだかわからないが……。世の中、だんだん変な方に行っちゃってるみたいだぜ。上も下も狂ってきたんだろうね。水爆実験のせいかな。いやいや、今の俺には明日のハンバーガーの売り上げの方が大事だ。そう、食っていかなきゃならないからね。

⇩ 19 へ

2 慌てて俺もエクトゥスの走って行く方へ逃げ込む。生きるも死ぬもエクトゥスと一緒だ。一人になるのが何よりも怖い。エクトゥスがデビルたちを誘い込んだ方向から眼も眩む閃光が見え怒声が聞こえる。デビルよりも孤独が怖い。
「待ってくれ！　エクトゥス。俺も行く！」
閃光と怒声のする方向へと駆けていく。

⇩ 238へ

3 『道化の町』は今まで見た事がない大きな建物と市場と人々で賑わっていた。ドワーフもホビットもエルフも皆雑然と道を歩いている。異民族が皆共存して生活している町らしい。
道の両端にはじゅうたんを敷いた市がぎっしりと並んでいる。陽も傾きかけてきた頃、俺は宿を求めて町中をさまよい歩く。すると『オリスカニー亭』という古びた木製の看板が眼についた。……オリスカニー……。
おお、そうだった、俺が捜し求めていた『天界の扉』のことを知っているかもしれないオリスカニーなる人物の名だ。とすると、この居酒屋は彼が経営しているのか……。
——ついているぞ。
幸運を神に感謝しながら居酒屋の扉を押す。店内は辛うじて目先が確認できるといった暗さで、何物かが潜んでいそうで、いやでも緊張してくる。手近のテーブルに手探りで座り、ウェ


ORISUKANI

イターが来るのを待つ。やって来たのは男ではなく、女だ。

⇩89へ

4

「ばあちゃん、お客さん連れてきたよ」

「おお、中へお入り」

どうやらこの少年は占い師のばあさんの客引きをやっているらしい。フォルクスと名乗る占い師のばあさんは、悪魔や地獄風景の描かれたカードをテーブルに並べ何事かを占っている。

「ジグムントじいちゃんからあなたの元へ行くようにと教えられてやって来ました。カルルと申すものです」

「ああ、おまえさんかい。ジグムントから聞いておるよ。あたしの所で占いの修業を積ませて一人前の占い師に育てるようにと言われておるんじゃ」

「う、占い師なんて、俺自信ないし……。俺は魔法使いだよ。それに今はジグムントじいちゃんの行方を追いたいんだ」

「占い師はいやなのか？」

「いやじゃないけど……」

「そうか。今はじいさんの方が気掛かりのようだな。よかろう、これから先おまえがどんな生き方をするのかまあ占ってやろう」

そう言うとフォルクスは不気味なカードをゆっくりと手に取り、右と左に分ける。
「さあ、好きな方を選べ」

●俺は迷わず右のカードを選んだ……⇩26へ

●俺は迷わず左のカードを選んだ……⇩212へ

5

バラディンの街に住みついてもう何年にもなる……。

孫たちに囲まれて余生を過ごす毎日だが、時折ふと遠い昔を振り返り、懐しむ時がある。

「おじいちゃんは昔『天界の扉』を通ってこの国にやって来たんじゃよ。どうしてそんな事したのかって？　うん、誰もが若い頃一度は何かにぶつかって行きたくなる、そんな熱病に動かされてじゃった。今も後悔してるかって？　いいや。確かにここは神々の国なんかじゃなかったが、それよりもこうして幸せな毎日でこれたのも考えようによっちゃあ本当の神々の国なのかもしれない。幸福とはその人自身の心の中にあるんじゃよ。ようやくそう思えるまでには長い年月がかかったがのう……」

END

6

赤い服の老人は微笑をたたえ、揉(も)み手をしている。何か知っているかもしれない。もう少しこの老人と話してみよう。

⇩87へ

7 二人は太陽が十回昇り、月が十回昇った頃、バラディンの街に辿り着いた。賑やかな通りには市が立ち並び、行き交う人々でごった返している。神々の国というよりも、ここはただの栄えている街にしか映らない。買い物をする中年夫人は着ているものは毛皮一枚といった大昔の服だが、驚いたことに俺が元いた世界から持ってきた貨幣と同じ物が使われている。不思議だ。ここは俺のいた世界なのだろうか。『天界の扉』を通して死ぬ思いでやって来た事が何やら馬鹿らしく思えてくる。

⇩ 27へ

8「だけども……」
「何言ってるのよ。二人はもう離れられないのよ」
ナンシーはひしと俺に抱きついてくる。
「でもね、ナンシー、俺には……」

⇩ 143へ

9 よく恩師から聞いたものだ。敵が大勢いる時は敵の大将を狙えと。大将をやっつければ、あとの雑魚は皆戦意喪失して逃げて行く。だから俺は侯の言い付けをここで実行しようとしたのだ。
「アルディーア、俺と勝負しろ。偉そうな事言っていても実力の方はどんなもんかな」

「何を……。よおし、貴様の望み通り受けてやろう」
「アルディーア様。こんな小僧は我々で十分でございます」
「黙っておれ！」
アルディーアは怒りの表情を露にし、こちらに向かってくる。俺は身の軽さを武器にした得意の幻惑術であちこちに移動し、アルディーアの目を混乱させる。面食らったアルディーアは剣を握ったまま立ち往生する。そこにすかさず魔統剣がアルディーアの首めがけて襲い掛かる。
「やるな、小僧」
アルディーアは両手で剣を握り替えると瞬間移動する俺の本体めがけて切り掛かってくる。もう目が慣れたとみえ、攻撃はだんだん正確になっていく。体にあちこちから降ってくるアルディーアの剣による傷が生じる。
「生意気な口がきけるのも、もうこれまでだ！」
アルディーアの剣がうなりをあげて降り掛かってくる。声にならない悲鳴を発し、俺は魔統剣でこれを受ける。目も眩む火花が散り、二人は倒れ込む。アルディーアは倒れたまま、剣を握り締めているが、剣は真ん中からまっぷたつに折れている。魔統剣はなんの損傷もない。さすがは魔統剣だ。これで俺の腕がもっと上だったら……。

⇩ 142 へ

10

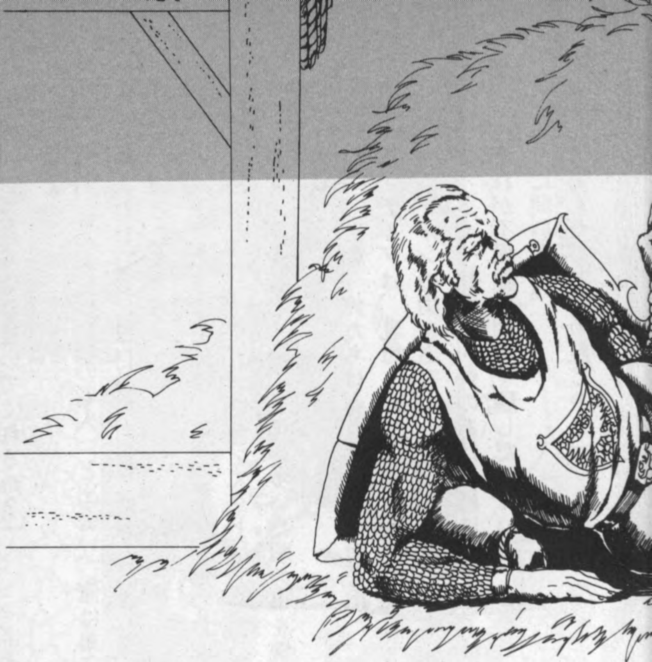
オリスカニーは静かに語り始めた。
「かつてわしがロード・ブリティッシュ様の城に道化として勤めていた頃じゃった。一人の英雄が『天界の扉』を越え、神々の地へ赴いて厚遇されたという話をよく聞いたものじゃった。この話の真偽は定かではないが、若かったわしらはいつもその伝説めいた話をして暇を潰していた。扉の向こうにある未知の場所は神々の座とも言われていたのう」
オリスカニーは遠い過去の思い出をたぐるように話を続ける。
「その神々の座はどこにあるんですか」
「……」
「教えてください」
「まあ待て。神々の座に行くには『天界の扉』を見つけなければならん」
「その『天界の扉』は一体……」
「……。年に一度、クスチュンデルンデ山に光が降臨するという。人々は皆その光の中に身を投げ、神々の座を目指すというが、実際にはまだ誰もそこから帰って来た者はいない。神々の座に永遠に留まっているのかそれとも……」

⇩ 223へ



11

「カルル……」
遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。
「カルル」
老人が優しく俺の肩を揺する。馬小屋の干草の中で、俺は老オーギュストに揺り起こされた。
まだ騎士になれない十五歳の俺は、老オーギュストのお供をしながら騎士の修業を積んでいるところだ。七十になろうとしている老オーギュストはさすがに寄る年波に勝てず、この小屋で一昨日から疲れた体を休めている。高熱を発したためにおれが二晩徹夜の看護をしたのだが、つい眠ってしまった。寝る子は育つと言うやつだ。
「すまんな、起こしてしまって……。カルル、



そのうち、おまえに言っておこうと思っておったんじゃが、もう言ってもいいだろう。というよりも今話しておかなければ、わしももう体力も気力も幕を閉じる時期に来ているような気がしてるんでな」

「オーギュスト侯！　何を言ってるんですか。侯とこうして諸国を巡り修業と見聞を広めてまいりましたが、まだわたしは侯には武芸も乗馬も知恵も、そして体力さえ、かなわぬではございませんか。そんな侯が弱気でどうしますか！　お元気をお出しください！」

「カルル、ありがとう。妻も子もなく、ただおまえだけがわしの支えであり、全てじゃった。カルル、今日までつくしてくれたおまえに、わしからその土地と城を譲りたいと思うのじゃ。どうだ、わしが亡くなった後も、あ

の地と城を守り抜いてくれるか？」

⇩ 36 へ

12

あの日、「隅の老人」と出会い、俺は弟子になる事を勧められた。『天界の扉』の向こうへ再び旅立つには自分の力量ではもう限界だった。若すぎる俺にそれを教えてくれたのがあの「隅の老人」だった。

二十一になった俺は、「隅の老人」の元であらゆる占いを学び、人々の相談にのってやっている毎日だ。エイリアンやモンスターが出没する日が続くが、俺は束の間の平和を味わっている。神々の国を探し求め、彷徨（さまよ）い歩いた頃の事を懐かしみながら――。

END

13

翌朝、俺たちはバラデインの街を出た。

マチルダは、乳母として城に仕えていたモルギアの元へ俺を連れて行こうというのであった。バラデインの街を出てから二日目、緑濃い森に囲まれた小村に着く。俺を慕う妙な猟師ゲルトルードも一緒だ。一軒のあばら屋にモルギアは住んでいた。小屋の中には高価な調度品が並び、それが不思議な調和を醸（かも）しだしている。モルギアは老女だった。年老いた乳母はおれに不信そうに問い正す。

「あんた、どこの誰じゃ？」



●戦士だったら……………………⇩207へ
●僧侶だったら……………………⇩21へ
●魔法使い・泥棒だったら……………………⇩244へ

14

「これからンテクケッジェ星への御旅行をご希望の方、小型ロケットバスが用意してございますので、三番口まで――」

女性のアナウンスが流れる。

巻き添えをだしてはいけない。小型ロケットバスの操縦席に忍び込み、うたたねをしていた機長の頭を短刀の柄で一撃し、しばらくの間眠ってもらう。小型ロケットバスは自動操縦だからあとはオニール教授からもらったIDブレスのシリアルナンバーを操縦席のコンピューターにインプットするだけだ。

⇩275へ

15

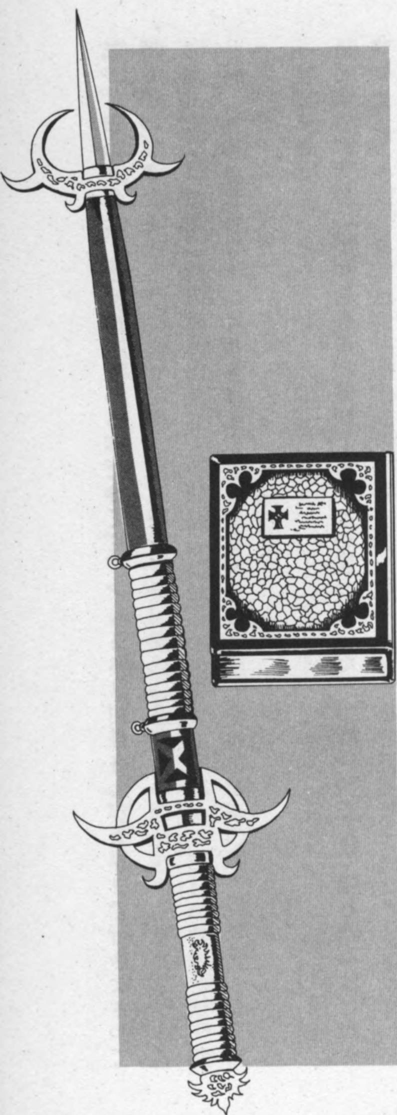
「おお、僧侶さんか。早く埋葬品に厄払いしてくれ」

俺を地元の僧侶と勘違いした村人が話しかける。

「は、はい」

俺は埋葬品の前で天昇の祈りを捧げる。埋葬品をよく見ると、中に黒い表紙の厚い本がある。

何気なく手にとってみるとそれは宗教についての比較論が書かれたものだった。様々な宗教の世界観が予言という形で書かれている。村長は俺と同じ宗教家だったのだろうか。
「村長さんは僧侶だったのですか？」
俺の問いに村人は衝撃的な答えをした。
「ヴァルトネリ村長は七十年もこの村の長として御勤めなさった御方じゃ。その昔『天界の扉』からやってきた〝とかおっしゃってた。この村に水道とかいう便利な飲み水を敷いてくれたのもこの人



じゃ。おめえさん、手に持っている本だって、ヴァルトネリ村長さんが天界まで行きなさって持ち帰ってきたもんじゃ」

体中に震えが起こった。

「い、今なんて……おっしゃいました」

「天界じゃよ、天界」

「ま、まさか」

「その本に天界の事がなんだか書いてあるとか言っていたが、怖いってんで誰も読みはしねえよ」

震えはますます激しくなる。

「おめえさんの足の下に転がっている剣もほれ、シルクロードから持ってきたとかいう緑鉱石でできた魔統剣とかいう奴じゃ。こんなもん、いつの物なのか皆目見当がつかねえ」

「この本を戴けないでしょうか」

「ああ、いいとも。僧侶さんにはいつもお世話になっとるからのう。形見分けじゃ。ついでに魔統剣も持って行きなされ」

黒い表紙の本と魔統剣をひったくるようにして俺はその場を去った。

⇩ 66 へ

16

「彼女は嫌がっているんだぜ。野郎がこんなに束になってやってきやがって、恥かしくはないのかよ！」

破れかぶれだ。歯をむき出して部下どもが襲いかかってくる。魔統剣が彼らの剣と火花を散らす。エスメラルダを背中に置き、彼女を奪い去ろうとする男どもから守る。身を巧みに左右に動かして幻惑術で敵の目を混乱させ、魔統剣で首を突く。男が大量の血を勢いよく噴出させ、くたばっていく。一人二人倒し、三人めの男と剣を合わせている時、後ろから回ってきたもう一人の部下の剣が俺の右手を打つ。強固な手甲を付けていなかったら、そのまま切り落とされていたところだ。しびれた右手から剣が落ちる。命の次に大事な魔統剣を拾おうとした俺に、残った部下たちが剣を振り降ろそうとする。

絶体絶命だ！

⇩ 189へ

17

どうしてもジグムント老人とともに旅に出たかった。それまで俺の周りの世界といえば樹齢一億年の大木に囲まれた山々と、その麓を流れるケスルチビギュヌス川しかなかった。確かに大木に朝日がさす頃、樹が銀色に光り輝く光景に俺の心を打つものがあったが……。十五歳のエルフにとって、他の世界は極めて魅力的なものに感じられたのだ。

「どうしても連れて行かないなら、俺はエルフをやめて一生森の中で浮浪者生活してやる。ドワーフやホビットから施しを貰って生きて行くんだ」
「そんなみっともない真似はよすんじゃ。誇り高きエルフは魔法で自然界に貢献し、自然とともに生きて行く。他人から餌をあさるなどとはもってのほかじゃ」
「だったらジグムントじいちゃん、一緒に連れてってよ」
あきれた顔で老人は、
「仕方がない。よかろう、わしと旅をするか……」
「やった！」
「そのかわり、旅はきついぞ」
翌日目覚めた俺は体中に喜びをみなぎらせ、ジグムント老のベッドへ飛んで行った。ところが肝心のジグムント老がいない。老人の代わりに一枚の紙片が置かれている。
〈わしの後を追うな。もし修業の旅に出たいのなら、リンダと言う町に住むボルクスという者に会いに行くがよい〉
途方に暮れた俺は……。

●急いでジグムント老の後を追う……………………⇩ **225** へ

●ジグムント老の置き手紙に書かれていたリンダという町に興味をそそられる ⇩ **28** へ

18

影の人物は素早く短刀を抜き、風のように切りつけてくる。俺も短刀を抜き、応戦するが、相手の攻撃をただ受ける一方だ。二度三度、刃と刃がぶつかりあう。

「なんじゃ!?」

眠りについていた領主が、この戦いで起きてしまった。顎まで生えた髭が怒りで震えている。

「くせもの！　出合え！　出合え！」

領主の声を聞いて駆けつけた家来たちが、手に手に槍や斧を持ち殺到する。

「せっかくの仕事を……」

いまいましそうに舌打ちした影の人物は、身をかわして消えていく。もたもたしていた俺に口々に怒りの声を発した家来どもが槍や斧を叩き込んでくる。

身の軽さだけが売りものの俺は、すんでのところで攻撃をかわし、部屋の中を逃げ回る。

「こいつを捕らえろ！　絶対に逃がすな！　最悪の場合は殺しても構わん！」

眠りを妨げられた領主は赤い目を吊り上げ、家来たちに命じる。冗談じゃない。こんな所でくたばってたまるか。俺は影の人物と同様、窓から逃げようとするが、間一髪のところで後ろから襟首をつかまれ、強引に後ろへ引き戻される。

⇩ 202へ

19

突然近くで若い女の悲鳴が聞こえてくる。車内暴力というよりも車内殺人は当たり前のニューヨークの地下鉄だ。またか、といった表情で乗客はそっぽを向いている。

悲鳴の主は同級生だったアメリア（AMELIA）じゃないか。

ブロンドの長い髪が自慢でいつも授業中に手ですいていたっけ。俺は途中で学校ともおさらばしてしまったので、彼女とはもう一年半は会っていないが、大人の女を感じさせる彼女はあのころから俺のあこがれだった。それにしても今夜の彼女は一段とセクシーだ。あれじゃあ確かにちょっかいも出したくなるだろうな。暴漢は身長二メートル近くある白人だ。

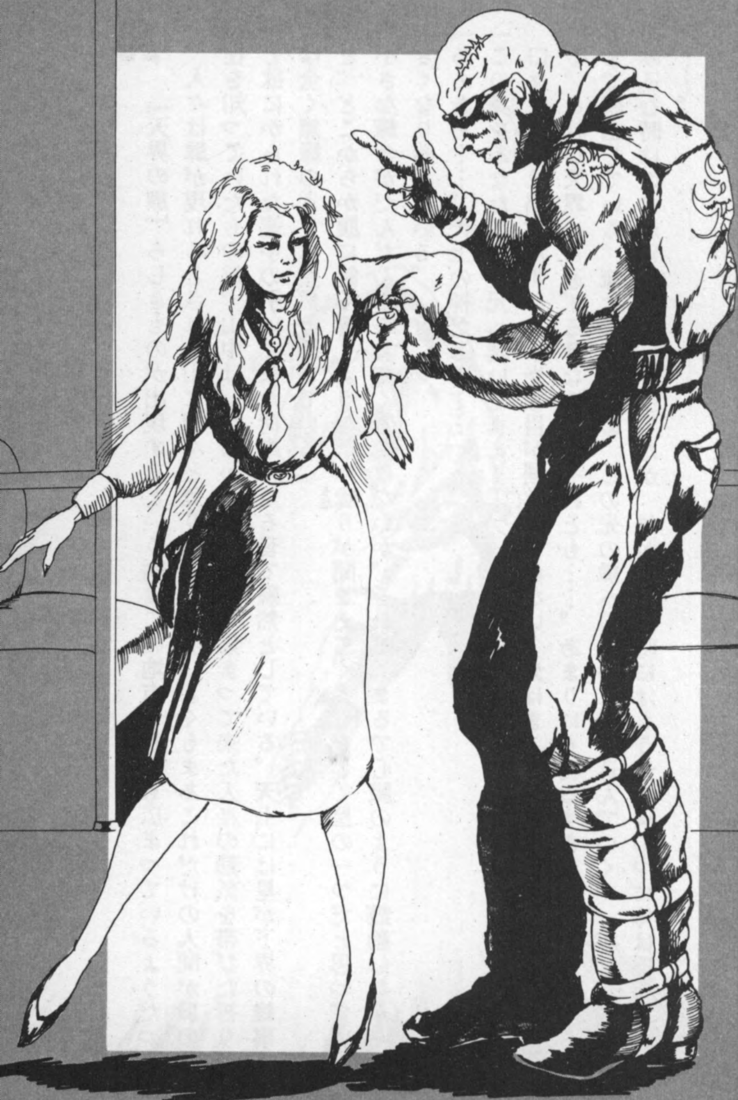
俺は――

●そのままニューヨークタイムズに眼を落としている…………⇩ 33 へ

●暴漢のそばに行き、「弱い者をいじめて面白いか。ポリスを呼ぶぞ」と言う⇩ 221 へ

●次の駅が近づくと暴漢の後ろに近寄り、思いっきり蹴とばして外に逃げる⇩ 102 へ

●「俺が相手になってやる」と、殴りかかっていく…………⇩ 41 へ



20

『天界の扉』らしきものが出現するという話はこの地方一帯にも広まっているようだった。人々は扉が現れるとされる山に続々と登り始めている。よくもまあこれだけの人間が扉の存在を知っていたものだ。山中はいつしか闇に包まれ、集まって来た人々の熱気を帯びた祈り声と欲にかられた連中の引いて来た荷車の走る音で騒然としている。天上には星が下界の雑事とは全く無縁のように整然と輝いている。

と、どこからか腹に鈍く響くような低い唸(うな)りが聞こえてくる。そして星の一つだと思っていた小さな輝きがだんだん膨らんでくるではないか。それは、まるで心臓のように鼓動しながら大きくなり始めている。

「ああああ……。天上の神だああ……」

「この身をあなたさまの元へ誘いたまえー!」

口々に人々は唱えだす。もう光で目が開けてられない。光はまるで生き物のように鼓動している。これが天界へと通ずる扉なのか、それとも……。あまりにも明るすぎるために失神する者まで続出している。俺は覚悟を決め、この光の扉へ第一番に乗り込んでいく。一歩前へ足を踏み込む時はさすがにためらいが生じたが、気がついた時にはもう光の渦の中に体は浮いていた……。

⇩ 62 へ



21

俺は正直に身の上話をした。そして、神々の国が果たしてどこにあるのかを老女に尋ねてみた。今までの波乱に富んだ俺の日々が老女の心を打ったのか、元乳母は俺の話が終わると、別人のように俺を遇してくれた。

「モルギアさん、どうなんですか。本当に、神々の国はこの世に存在するんですか⁉」

必死になって問う俺に、老女は、

「扉があるとは以前からこの耳に入っていたが、詳しい事はよくわからない。しかし……」

「しかし⁉」

「あんたはこの辺りに伝わる伝説でこういうのをご存じかな」

そういうとモルギアは低い声で不気味な詩を語った。

獅子が大暗空で勝利の咆哮(ほうこう)を成した時
大魔王モンデインの唸(うな)りは止みぬ。
至福千年王国が続くやも
人心三たび狐盗(ことう)の態に陥る時
天空に死の塵風(じんぷう)が乱立す。
モンデインの悪心ミナクスに移り

21

下界は時と空間の錯綜に陥る。
西暦二一一二年ミナクスは
地上に腐醜と狂気を対峙させ
・・
哮笑す。
ミナクスを討たぬ限り
地上は永久に大暗夜となりぬ。

「扉の向こうへ行った者は誰一人として帰って来なかった。ミナクスとかいう化け物の起こした恐ろしい仕業という話がもっぱらじゃ。扉とはまさしくミナクスの悪魔の入り口……。おまえさんのいう『天界の扉』とかいうものも、その扉の一種じゃろうよ……」

「では神々の国というのは……」

「あるわけなかろう」

モルギアの話にしばらく返す言葉が見つからなかった。

「嘆くな、カルル殿。噂によると、エックスとかいう街に住むクレリック・アントスという人物がその扉の向こうから帰ったきたただ一人の生き証人という話」

俺はクレリック・アントスの住むエックスの街まで今すぐ出掛ける支度を始めた。⇩ 96へ

22

「あんた、幾つになるんだい」
「二十四。ロックやるにはこれからが勝負の年よ」
明るいナンシーとの会話にしばらくの間忘れかけていた心の平穏が蘇(よみがえ)ってきた。
と、その時だった。
「ナンシー・マフォンナだな。麻薬不法所持及び密売容疑で逮捕する！」
いきなりドアを開け、二人の男が乱入してきた。ナンシーは悲鳴と罵声を二人に浴びせるが、体格のがっちりした男に突き飛ばされ、床に倒れ込む。男は部屋のあちこちを捜索している。
「とにかく署の方まで来てもらおうか」
ナンシーは二人に外へ連れ出される。

●状況がよく把握できない俺は**しばらく事の成り行きを見守る**……⇩79へ
●ナンシーを助けるために俺は**後を追って行く**……⇩161へ

23

オーギュスト侯の剣について

●**持っている**……⇩54へ
●**持っていない**……⇩199へ

24

ゼノビルの言葉通り俺は連中の一員となり、それ以後待遇はがらりと変わった。船内の一等室を与えられた俺は、船内の移動も全くの自由となる。そんなある日、俺はたまたま通りかかった部屋から低い声が聞こえてくるのを聞いてしまった。

⇩ 70へ







25

「カルル、カルル…」

どこかで俺を呼ぶ声が聞こえる。エクトゥスが俺の肩をそっと揺すり、

「あの山を今晩中に越えなければならない。小川のほとりでパンを食べていたら二人とも眠ってしまったようだな」と話しかける。

盲目の青年僧侶エクトゥスはいつも俺を励ましてくれる兄貴分だ。それに比べ、俺は十五歳になったはいいが、未だにテルミドーラ寺院の厳粛な礼拝でいつもあくびをして司教様からおこごとばかり頂戴(ちょうだい)するできそこない僧侶だ。だけれど、十五になってようやくダークグレイの衣を着る事を許された時は、さすがの俺も厳かな気持ちに包まれたものだ。

俺には両親がいない。エクトゥスの話によ



ると、まだ俺が赤ん坊の頃テルミドーラ寺院の門前に捨てられていたという。そんなわけで俺にとってエクトゥスは父がわり母がわりになってくれてたわけだ。俺の記憶の中で一番古いものは、石に囲まれた薄暗い礼拝堂とその四角い窓に切り取られた蒼い空の色。そして、なぜかとても懐しい気持ちになるあの朝日に映し出された銀色に光り輝く礼拝堂。
今俺とエクトゥスの二人は、年に一度の諸国四十七箇所巡礼の旅にでている。一人前の僧侶の着る誇り高きダークグレイの衣を身にまとい、わずかばかりのパンと路銀を詰めた麻袋を肩に背負い、苦業の旅が続く。
エクトゥスは道々、俺に僧侶の生きるべき道を教えてくれるのだが、なかなか難解で俺にはちと理解できない。だが、エクトゥスの

言う「人間もドワーフもエルフもホビットも皆平等であり、差別してはならない」という話だけは素直に納得できる。俺たち人間と連中との間にしばしば憎しみ合うケースもあるが、われわれ僧侶はいつも慈悲と博愛の心でこうした悲劇をなくしていかなければならないと思う。

⇩ 290 へ

26

右のカードを選んだ俺は、フォルクスがじっとカードを透視しているのをかたずを飲んで見守る。やがてフォルクスはカードから目を離し、

「おぬしは『天界の扉』をくぐり、この世に真の幸福をもたらさなければならぬ」と告げる。

「その『天界の扉』は一体どこにあるんですか？」

「南東へ行け。ずっとずっと南東へ……」

そう言うと老婆はふうっと深く息を吐くと椅子に座ったまま眠り込む。

「ばあちゃんはすぐ寝ちゃうんだから。これで当分起きないな」

少年がこぼす。南東へ行けば、『天界の扉』を探し求めているジグムントじいちゃんに会えるかもしれない。ようし、南東へ行ってみよう。南東へ……。

⇩ 210 へ

27

赤いとんがり帽子を被った男がしきりに台の上で声を張り上げている。



「買った！」「売った！」

そんな声が周りから聞こえてくる。台の上ではボロをまとっただけの若い男が売られていた。どうやら奴隷市のようだ。

人々の間から、ため息とも歓声ともつかぬ声が湧き起こった。長い髪に緑の瞳をした美しい少女だ。

同じようにボロ一枚まとっただけではあったが、それがかえって彼女の美しさを引き立たせていた。

さすがに彼女の値は高く、セリは金貨二十枚から始まる。

たちまち辺りから「二十五枚！」「二十八枚！」の声が発せられる。その間、緑の瞳の少女は悲しそうに顔を伏せて、泣いている。俺と同じ年齢のような彼女がたまらなくかわいそうになってきた。

俺が彼女をセリ落とし、自由の身にさせてやる。

●**「三十一枚だ！」俺は思わず大声を出す**……⇩**139**へ

●**「四十枚だ！」俺は思わず大声を出す**……⇩**182**へ

●だが、今の自分にはセリ勝つほどの金貨がない。俺は何か**他の手で彼女を救い出す事を考えた**……⇩**229**へ

●自分よりももっと彼女を幸せにしてくれる買い手がいるかもしれない。**今の自分にはそう願うしか成すすべがない**……………………………⇩ 5 へ

28

リンダ——この町に何があると言うのだ。そしてそこに住むボルクスなる人物とは……。ひょっとしたら俺を撒くジグムント老の策（これも偽造指示術というれっきとした魔術）かもしれない。

心の中に一抹の不安を抱きながら、行き交う通行人にリンダと言う名の町の所在を尋ねてまわるが、知る人はない。街道からは徐々に人影が消えて行く。

昼間も怪しげな獣がうろつき回っているという噂だ。一人前の魔法を使えるわけでもない俺は少々弱気になってくる。

⇩ 227 へ

29

トウモロコシ畑のようだ。行けども行けども緑が続く——。

ここは果たして神々の国なのだろうか。俺には単なる果てしなく広がる農地にしか見えない。神とトウモロコシとではあまりにも違いすぎる……。

⇩ 277 へ



30

「カルル、カルル……」
遠くから俺を呼ぶ声が聞こえる。どうやら洞窟の暑さが俺を眠りの世界へと誘ってくれたようだ。祖父のジグムントが旅支度をしている。そうだ、ジグムントの魔法に使用する薬草を裏山まで採りに行ってきてから、そのまま寝てしまったのだ。でもジグムントが旅の用意をしているのは何故なのか？
「カルル……。おまえは昨日で幾つになったのかの？」
「うん、十五になった」
「そうか、もうすぐおまえもわしのように魔法がこなしきれるようになるじゃろうて」
「本当!?」
「ああ……。おまえはその上、女が一目見た



らたちまち惚れてしまうような美貌を持っている。男の子にしておくのがもったいないほどじゃ」
「けっ、俺はおじいちゃんみたいな魔法使いになるんだぜ。女なんて……」
「わしらはエルフと呼ばれる種族で、魔法を使う事で生活の糧を得ている。町の占い師や祈祷師、雨乞いといった職業がわしらの飯の種じゃ。ところがなあ、こんなわしらは人間と最も似た外観をしていながら、魔法を使うというだけで世間から白い目で見られているんじゃ」
「だからおじいちゃんもこんな洞窟にいるんだね」
「ああ……。人間にはない才能を持つわしらは恐ろしい存在に見えるんじゃろうて」

ジグムントは寂しそうに薬草を手に取り、火に焙り乾燥させる。
「だが不思議なもので、優しそうな顔を持つわしらに人間の女たちは密かな好意を持っている。特にカルルよ。おまえは春風に浮かれてとぶ蝶でさえ、おまえを見ればたちまち恋の虜になってしまうほどの美貌を持ち合わせているんじゃ」
ジグムントの話はどうも信じられない。第一俺は今まで人間の住む町まで出掛けた事がないのだから……。

⇩ 132 へ

31

「エルマ。おにいちゃんはどうしても向こうに行ってみたいんだ。これがひょっとして天界へと通ずる扉なのかもしれない。パパとママが消えた所かもしれないんだ」
「でも、死んじゃったらどうするのよ……」
「大丈夫、エルマの魔統剣があるし」
悲しそうな顔をしたエルマは、何を思ったか、小さな胸の所にしまってあったピンク色の素焼きを手渡す。
「これをあげる」



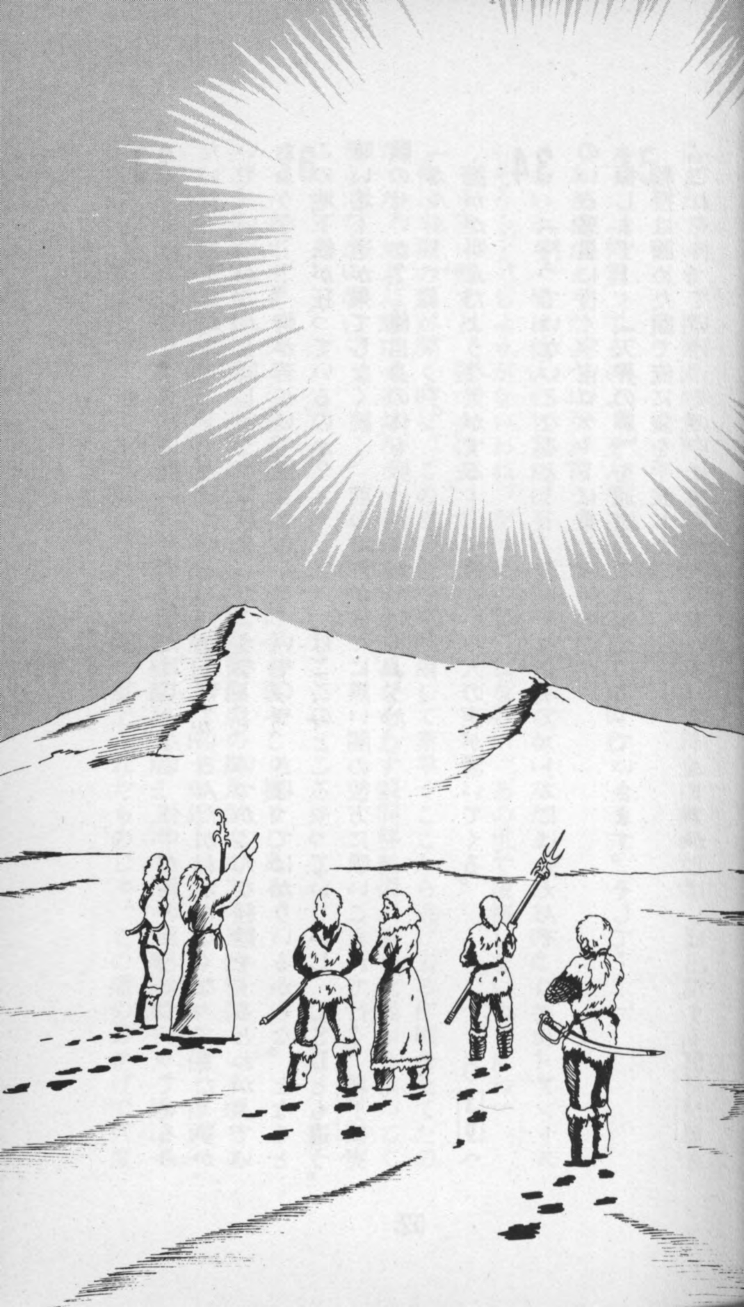
「なんだい？」
「オカリナ。御守りの代わりなの」
そのオカリナはまだエルマの体温を宿してほの温かかった。目の前には遠くの山々が水飴のように歪み、木々が海藻のようにゆらゆらと揺れている。
「これがひょっとすると天界へと通ずる扉なのだろうか……？」
不安そうに俺の手を握り締めるエルマの頬にキスすると、俺は空間の歪む方へと進んで行く。体が引きちぎられるかもしれない。
ためらいが生じるのを耐え、そのまま進んで行く。さすがに両目は固く閉じたままだ。軽いめまいがする……。体が宙を浮遊しているようだ。

⇩ 131 へ

32

森は雪で一面覆われていた。付近の村人たちが徐々に集まりだしている。
「もうすぐじゃ。見ろ、光がでかくなってきた」
古老が興奮気味に光の方向を指している。
若者たちがその光の向こう側へと飛び込もうとするが、掛け声だけで誰も飛び込もうとはしない。

⇩ 105 へ



33

それにしても、やけに眠い。今夜は足だけじゃない、体中が鉛の風呂につかっているみたいだ。地下鉄がスピードを上げているんだか下げているんだかわからなくなってきた。夢か。いや、いつかこれと同じような体験をしたような……、いつかこんな経験をするとわかっていたような……。胸が苦しい。働きすぎか？　いやいや、さぼってばかりいるからな。となるとこの地下鉄が狂っているのか？　マリファナはここのところやっていないし、LSDとも違う。暗い地下道が果てしなく続く。前の車両が徐々に黒い闇の彼方に吸いこまれて行く。地下核実験のせいか？　俺自身の体も吸い込まれていくようだ。

「カルル！」

誰かが叫んだような気がする——。遠くから人の声が湧いてくる。

⇩ 30 へ

34

「持っていないとなると……。クレリック・アントスには会えんぞ。つまり、アントスのいる惑星に行く宇宙ロケットに乗れないのだ」

「探します！　『天界の扉』を通過して最後まで追っていきます。そして……」

教授は諦めた顔で俺に袋を手渡した。

「これを持っていけ。その中に地図が入っている。タイムドアがしばしば出現する箇所が書き

込まれている。携帯用の食料一カ月分が入っている。料金は無料だ」

⇩ 148 へ

35

「何言ってるのよ。そんなに疑うもんじゃないわ」
あきれかえったように女が言う。
「いいから。俺は他人の甘言にはそうやすやすと乗らないんだよ、おあいにくさま！」
「そう……。しょうがないわね。だったら勝手になさい。あの世で後悔しないようにね」
そう言い残すと、謎の女は去っていった。
俺は牢獄の扉が開く時に、この身の軽さを利用して素早くここから逃げ去る作戦をたてたのだった。たぶん成功するだろう。敵からうまく身をかわす瞬間移動術が俺を危機から救ってくれるにちがいない。

⇩ 111 へ

36

老オーギュストの息が浅くなり、俺の手を弱々しく握りしめる。
「こう見えてもわしは二十七の時、ローマ教皇御臨席の騎馬試合で二年連続優勝という頃もあってな、その時戴（いただ）いたのが、ほら、その剣と盾じゃ。四十年以上もたっていながら歯こぼれ一つしとらんじゃろ。はるか遠きシルクロードの緑鉱石を鍛え上げで作った魔統剣じゃ。盾はイスタンブールよりカジュエルガ鉱からわしの元へ献上されたものじゃ。この盾のおかげで何度

戦のたびに助けられた事か……」
物心ついた時から俺はオーギュスト侯の元で育てられた。両親の記憶も定かでなく、オーギュスト侯が父であり母であった。俺をどこで貰いうけてきたのか侯は詳しくは語ってくれなかったが、俺はそれで満足だった。
今さら、おやじやおふくろなんて……。
「カルル……、よいか、騎士には様々な苦難が襲ってくる。それをうち破るのは、おまえのその真正面から突き進んでいこうとする勇気じゃ。ただ、野放図なだけの勇気では駄目じゃ。まだおまえには勇気を本当に試す時が来ていない。本当に試す時が来た時が、おまえの騎士としての真の実力が試される時じゃ。よいな、勇気とは何かをいつも心に問い正しながら、これから生きてゆけ……」
静かな寝息をたてながら老オーギュストは永遠の眠りに就いた。
静かな吐息は徐々に間をあけ、侯の魂は空に昇って行った。



俺は涙で曇る明け方、村人に老オーギュストの埋葬を手伝ってもらい、主人の形見となってしまった剣と盾を身につけ、城へ足を向けた。

⇩173へ

37

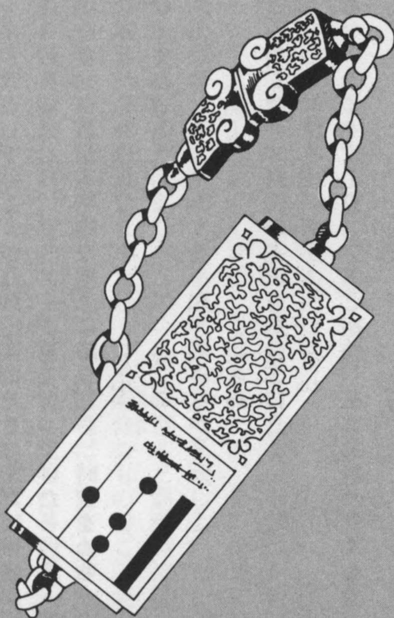
「よく来たな、カルルよ。『天界の扉』についてまた何か聞きだそうというのか。おまえもエライもんにとりつかれてしまったもんだな」

オニール教授と言っても今はコンビニエンス店の店長だが、彼が語る話とは——

「地上を支配していた大魔王モンデインがうち倒された後、その復讐に地上に降臨したのがその弟子のミナクスだった。モンデインはこの世界を力で征服しようとして破れ去ったが、ミナクスは女だ。カルルよ、おまえはまだ十五だから女の怖さと底深い神秘の能力が理解できないかもしれないが、ミナクスは力よりもっと恐ろしく厄介(やっかい)なものでこの世を征服しようと狙っていた。それは時間を自由にねじまげるタイムドアの出現だ。おまえが今まで『天界の扉』といって通ってきたものも実はこれだった……。ミナクスは空間の一部を一瞬にしてねじまげ、そこだけ時間をアナーキーにしてしまう。この空間にうまく乗れない者は、ちぎれ飛んでしまう。ビルの屋上と一階の両方にいられないのと同じ原理だ。おまえさんが何故うまく入りこめたかと言うと、それは捨て身で突入していったからだよ。ためらってしまうともう駄目だ。二つの時間にはおれないだろう。昔から『天界の扉』を通過して行方知れずになった者はほとんどが

この運命を辿（たど）っていった。カルル、だからおまえは勇気ある若者なんだ」
なんと言っていいか言葉が出てこない。
「今、世界はあちこちで時空の歪（ゆが）みが発生し、大昔生息していたエイリアンやデイモンやらが迷い込んで災難をまき散らしている。一九九〇年あたりはまだ牧歌的な現象だった。第二次大戦の頃の零戦（ゼロ）が迷い込んで来たり、カスター将軍と会ってきたという人物が戻って来たり。だが、一九九九年からミナクスが本格的に地上に降り立ち、時空をめちゃくちゃにしだした。この時空の歪みをなんとかしなければ……」
「破滅があるだけですね……」
「カルルよ。おまえはアントスという者を知っているか？」
「アントス？」
「そのアントスこそがミナクス打倒の方法を知っているという」
「どうすれば会えるんですか？」
「それが、わからないのじゃ。ＩＤブレスと指輪、そしてロザリオを持っていなければアント

スに会えないのだ」



IDブレス

※ロザリオと指輪を所持していますか?
●両方所持している……⇩234へ
●両方所持していない……⇩34へ

38

船上の人々はそれぞれ手に火を噴く武器を持ち、敵と戦っていたが一人また一人と炎に包まれ、炭と化していく。やがて誰一人として応戦する者はいなくなり、あたりは燃え上がる炎の音だけが聞こえてくる。黒い箱から発進した小さな箱から降りたった連中がこの船を占領してしまう。鈍く光る灰色の服が不気味に炎に映しだされる。

⇩80へ

39

ジャイアントやバーバリアンが金銭を狙って襲ってくる。昼も夜も連中は狂暴な性格をむき出しにして襲いかかってくる。正直な話、戦士になりたての俺は、いつ連中からうまく逃げおおせられるかと言う事で頭の中は一杯だ。それをなんとか逃げ出さないでいられるのは、老オーギュスト侯の慈愛に富んだ瞳がいつも脳裏に浮かぶからだ。イスタンブールのカジュエルガ鉱製の盾のせいで、ジャイアントのふるう大斧も悲鳴をあげつつなんとかかわして行くことができた……。一日目、二日目は何とか切りぬけた。道化の町まであとひと息だ。

⇩3へ

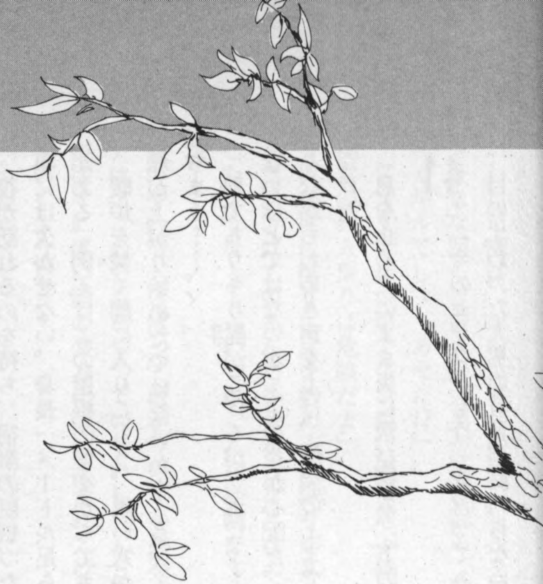


40

「カルル、カルル……」

オイデケチヌスの大木の枝をゆりかご代わりにして寝ていた俺を誰かが呼んだ気がしたのだが、どうやら気のせいか。今日でちょうど十五歳になるというのに、俺はホビット族のなかでもまだ満足な仕事すら与えられないでいる。もっともホビットはいつも下積みの仕事ばかりで、俺のような落ちこぼれは大抵泥棒か強盗に成り下がってしまう。すばしっこさだけが取り柄のホビットは結構この種の仕事が得意で、中には人間の収入を遙かに上回るホビットもいる。

俺も泥棒稼業の頂点を極めるために日夜修業（といってもあまり褒められたもんじゃないけど）に励んでいるのだ。いつもこのオイ



デケチヌスの木のてっぺんから金をしこたま貯めこんでいそうな奴を物色しているんだが、気が弱いせいか大きな稼ぎをしたためしがない。

風にゆられた枝がいつもハンモッグ代わりとなって俺を夢の中に引きずりこんでいく。遠くからこの風に揺れるオイデケチヌスを展望すると、朝日を散らしながら俺に今日一日しっかりがんばれと言ってくれているような気がして、何故か気が休まるのだ。

ところで今日は、久しぶりに大物がやって来る。隣村にどこぞの領主が宿泊するらしいのだ。当然領主ともなれば、あり余る財宝を抱えこんでいるに違いない。夜を待ち、そいつをかっさらう。十五の初仕事として最高ではないか。

オイデケチヌスの樹にしばしの別れを告げ、隣村へ潜り込む。目指す相手は村一番の宿屋に泊まるはずだ。

夜が訪れるのを待ち、宿屋の屋根づたいに侵入する。体の軽さと手先の器用さはこの手の仕事には欠かせない。身長一メートル足らずの俺には、わずかなすき間からでも忍び込める自信がある。例えばこの屋根の煙突からでさえ。

暖炉を焚く前に入りこもう。黒い穴から潜りこんでいく。とその時、黒い底からもうもうと煙が上がり始めたではないか！　急げ！　早くしないと下からの灼熱でバーベキューになっちまう……。

熱でちりちり髭がこげるが、ホビットの髭は熱や寒さから身を守るためにあるので耐えられないほどではないが、下の炎が心配だ。十五歳の誕生日に焼け死ぬなんて……。煤だらけになりながらわめき声を上げ、煙突の下まで辿りつく。炎は上がっているが、躊躇しては死を待つだけだ。

息を止めそのまま炎に飛び込み、下の室内に転がりこんだ。

⇩214へ

41

「今のセリフ、もう一度言ってみな」

目のすわった大男の言葉が終わらないうちに風を切るように拳が飛んで来る。鼻先で危うく

かわした俺は、そのままの姿勢で右足を思いっきり相手の腹にめりこませる。黄土色の内容物を吐きながら、白人の大男が転げ回る。

「カルルでしょ、あなた⁉」

アメリアが小声で言うが、俺は地下鉄が止まると反対側の車両に乗り移る。

「女の一人乗りは危険だよ」

再び席に座り、息を静める。眠りがまたやって来たようだ。地下鉄がスピードを上げているんだか下げているんだか分からなくなってきた。夢か。いや、いつかこれと同じような体験をしたような……、いつかこんな経験をするとわかっていたような……。胸が苦しい。働きすぎか？

いやいや、さぼってばかりいるからな。となるとこの地下鉄が狂っているのか？　マリファナはここのところやっていないし、ＬＳＤとも違う。暗い地下道が果てしなく続く。前の車両が徐々に黒い闇の彼方に吸いこまれて行く。地下核実験のせいか？　俺自身の体も吸い込まれていくようだ。

「カルル！」

誰かが叫んだような気がする。遠くから人の声が湧いてくる。

⇩ 11 へ

42

意識を失っていたのかそれとも死んでしまったのか。思考力は目覚めてくるが体がどこにあるのか皆目見当がつかなかった。だんだん白い視界が確認できてくる。目の前は広く白い世界で遠近感が全くつかめない。

⇩ 125 へ



43

反乱はまだ太陽が水平線から顔を出さない時に発生した。五十名ほどの反乱軍がいきなりゼノビルのいる船室へ襲い掛かった。この時代に武器としてよく使用されている火炎放射銃がとめどなく部屋にぶちこまれる。ところがいくら経っても悲鳴すら聞こえないので不信に思った反乱兵士が炎の渦巻く部屋の中に突入した。

⇩ 282 へ



44

俺はためらう事なく北北西に走り出し、氷柱が立ち並ぶ最初の地点から四十四番目の氷柱を探し続けた。
「これだ！」この氷柱を壊せば、ミナクスを永久に封印できるのだ。
「ミナクス、おまえの最期だ!!」
満身の力を込め、魔統剣で氷柱をぶった切った。刃先がめりこみ、氷が崩れ落ちて行く。
「ヴJ！シフH＋Gオンセ＊…ツチッ？パッサ！！」
ミナクスの叫び声が氷の森に響き渡る。
氷柱があちこちで崩れ出し、巨大なクレバスがぽっかりと黒い亀裂を現し始める。五人の女、いやミナクスがその亀裂に体をもっていかれそうになり必死で抵抗しているが、徐々に暗い底に吸い込まれていく……。
やがて轟音(ごうおん)をたてて閉じていく——。
それまで空を舞っていた怪鳥や大昔のモンスターどもの姿が消えていく。時空の歪(ゆが)みが消えていく。正常な世界に戻っていくのだ——。

⇩ 194 へ



45

俺はナンシーを思いながらホテル・カリフォルニアまで行く。そこが彼女との最後の別れの場になるだろう。どうせなら思い出深いホテル・カリフォルニアで別れたい。

⇩ 191 へ

46

「残るはあいつだけだ。早くとどめをさせ！」

灰色の怪人たちの最後の攻撃が始まった。髪が焼け、嫌な臭いがする。狂ったような熱さだ。目の前の炭化した死体のようになってしまうのか。あ、つ、い……。

DEAD END

47

俺は心残りの表情を浮かべる少女の手を取り、灌木の中を走る。すると後方からギルクリストの怒鳴り声が聞こえてくる。どうやら俺たちを追って来たようだ。

「残った連中はいつかまた助けに来るさ。だから今は、逃げるんだ！」

小さく頷いた少女の手をしっかりと握り直し、二人は走る。ギルクリストの手下どもからなんとか逃れた二人は、肩で息をしながらしばらく草むらに倒れ込む。

⇩ 106 へ

48

「あんた、幾つ？」

「十五……」




「じゃああたしの弟と同じね。」
「じゃ、あんたは？」
「あたしは二十四。ロックの世界じゃこれからよ。おばんなんて言ってられない」
「ロック？」
「よっぽど田舎から来たようね。あたしたち、知らない？」
「……」
「ナンシー・マフォンナ。あたしが今超売れっ子寸前のナンシーよ。そして連中がバックバンドのトルバドール」
「トルバドールって、吟遊詩人？」
「吟遊詩人ですって。一九九〇年だっていうのにまるで中世みたいな言い方ね。」
「何？　一九九〇年だって？」
「そうよ。変な奴ね」
マリーは焦点の定まらない目で俺の方を悪戯っぽく覗いている。

⇩ 81 へ

49

どれほど経っただろうか。臆病な俺はもうデビルたちの来襲がないと確信するまでエクトゥスのそばまで駆けつける事すらできなかった。恐る恐る、森の中へ入っていくとそこには

先程のデビルたちの死体があちこちに散らばっている。
　エクトゥスが肩で大きく呼吸をしながら、微かに俺に手を振っているではないか。
「カ、ル、ル……。ど、どうやら私の、最期が、き、来たらしい……」
「エクトゥス……」
「天界の、と、扉を解明できなかったことだけが、残念だが……あ、あとはカルル……君が私の遺志を継いで『天界の扉』を……求めて、あ歩き続けるんだ」
「死んじゃ駄目だあ！」
「死ぬのは怖くない。いや、む、むしろ神の元へと近づけるんだからな、感謝を……」
　エクトゥスはそのまま静かに目を閉じ、神の元へと旅立って行った。

⇩ 93 へ

50

　不安は二年ぶりに見た城を前にすると現実のものとなった。強風に吹かれ、無残にも焼け落ちた城が俺の帰りを待っていた。黒くすすけた石組みが風で土埃(つちぼこり)をあげている。馬から降り、焼け残った柱や泥にまみれた銀の食器を踏み越え、城内へ入る。外と同じ無残な姿がここにもあった。
　老オーギュストの愛した三万冊にものぼる古書も黒い炭と化していた。錆(さ)びた暖炉の横には焼け死んだ鼠が平たくなってむくろをさらしている。この地には生あるものは存在しないのだ

ろうか。風が破れた窓から悲しい音をたてて入りこむ。
昔は多くの招待客の誇らしげな顔を照らした天井のシャンデリアも、風に揺れながら冷たく見下ろしている。

⇩ 164 へ

51

影の人物も同様に身構える。じりじりとどちらからともなく接近していく。明らかに相手の短刀の方がよく切れそうだ。しかも構えが堂に入っている。ためらうといきなり相手の短刀が向かってくる。二度三度、刃と刃がぶつかりあう。

「なんじゃ!?」

眠りについていた領主がこの戦いで起きてしまった。顎(あご)まで生えた髭(ひげ)が怒りで震えている。

「くせもの！　出合え！　出合え！」

領主の声を聞いて駆けつけた家来たちが手に手に槍や斧を持ち殺到してくる。

⇩ 165 へ

52

雑用係としてなんとか俺は生き伸びる事ができた。特に調理場仕事が多かったが、食料をちょろまかせたので屈辱感はさほどなかった。監禁されている船室から調理場に通う毎日が続いたが、割合自由に船内を歩き回る事ができた。そんなある日、何者かが通路の脇の部屋で低い声で話しているのを聞いてしまった。

⇩ 70 へ

53

「そうよね、カルル」
安堵の色を浮かべたゼノビルは、全員を引き揚げさせた。おれはゼノビルの信頼を失うことなく、事件後も今まで通りの自由な生活を続けることができた。

⇩162へ

54

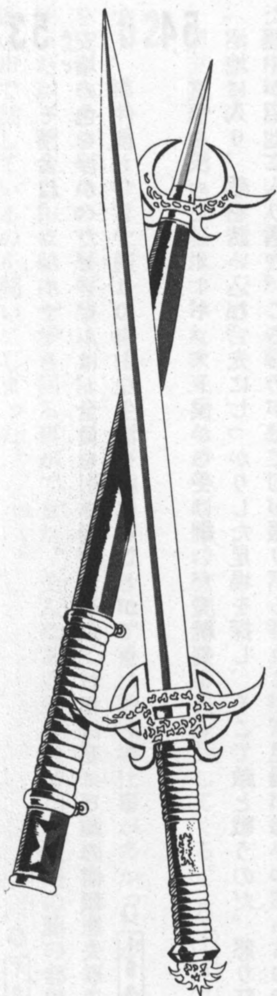
覚悟を決めた。オーギュスト侯から受け継いだ魔統剣を抜く。
沼地に入り、敵を誘い込む。先にしっかりした足場を探し、そこで敵と戦うのだ。怒り狂った連中が沼地に入り込む。こちらめがけて刀が振り下ろされるが、足場がぬかっているので思うように刀が振れないでいる。そこにこちらが魔統剣をうなりをあげて振り下ろす。血しぶきが沼地を赤く染める。俺の足元に灌木が横たわっているのでそれをつたい、敵をうまく誘い込む。連中のなかには足を取られ泥の中に尻もちをつく者もいる。そこに俺の無慈悲な魔統剣が突きささる。二人になった追っ手は罵声を残し、逃げて行く。
沼地から引き揚げると少女が飛びついて俺の無事を喜んでくれる。他の人々は感謝の言葉を言い残すと我先にと逃げて行き、二人だけが残された。

⇩106へ

55

「お若いの……。この道筋はぶっそうじゃ。悪い事は言わん、護身用に俺から武器を買

ってい け。 安くしとくぞ」
行商人らしき中年の男がいきなり横に腰を下ろして押し売りを始める。
「別にいらないよ。見てわかるように俺はエルフだ。いざという時には魔法があるしね」
「だったらなおさらだ。この世にはまだおまえさん程度の魔術ではどうにもならない災難が、降って湧く事だってあるんじゃ。どうだ、この魔統剣は」
行商人の言い分もあながち間違っているわけでもない。確かにそう魔術が得意な俺でもない。
「この剣はシルクロードよりはるばる運ばれた緑鉱石でできた頑強な刀じゃ。まずこれ以上強固な刀はないいじゃろう」



行商人の巧みな言葉に負け、とうとう魔統剣を買わされるはめになってしまった。

⇩130へ

56

老婆はコックリと頷く(うなず)と水晶玉をゆっくりと撫で(な)始める。老婆の右手が徐々に速く水晶玉をなでて行くと、

「オオオオ……。一人の戦士がおぬしに大きな力を授けてくれるじゃろう」とつぶやく。

⇩63へ

57

備忘録の最後の文章には、「天界の扉のある場所が判明した——」と書かれている。その扉のある場所は『道化の町』という町のオリスカニーなる人物が知っているとも書かれている。

●『道化の町』へ行き、オリスカニーという人物を捜す ⇩133へ

●このまま譲り受けた領地へ帰る ⇩151へ

58

洞窟の入り口に入ってみる。うまくすればしばらくの間住居用として使えるかもしれないからだ。暗い中を覗く(のぞ)と、いきなり男の声がする。

「ナンダ、オマエハ!?」

鹿革をまとった髭（ひげ）だらけの男が石の斧を手に持ち、警戒しながら近寄って来る。
「すみません、……。旅の者なんです」
「ドコカラキタ？」
「それが、自分でもよくわかっていないんです」
「テンカラフッテキタトデモイウノカ」
「そうかもしれない……」
「グエッ、マサカオマエ、イヤ、アナタサマハ……テンニイタ、カミサマ？」
「ひょっとするとここは神々の国？」
「オオ……！　アナタサマハ、カミノシシャ！」
そう言うと男は俺の前にひれ伏し、両手を合わせ拝みだした。どうやら単純な人物のようだ。

⇩ 291 へ

59

不思議な出来事はまだあった。沖合にとてつもなく大きな海竜のような物が出現したのだった。それは海の上を泳ぎ、後方には推進するためにか、大きな羽根のようなものが回転していて、ボオオウと低く重い音を時折発しながらこちらにやって来る。その怪物体からまた今度は海上を猛スピードで走る小さな物体が発射されこちらへやって来る。

⇩ 181 へ

60

ゲルトルードと約束していた宿に到着する。まだ震えている少女に、体の汚れを洗い落とさせる。ゲルトルードから買った毛皮を彼女に着せてやる。最初は不安そうにしていた少女も徐々に口をきくようになった。

⇩ 266へ

61

「だけども……」

「何言ってるのよ。二人はもう離れられないのよ」

ナンシーはひしと俺に抱きついてくる。

「でもね、ナンシー、俺には……」

⇩ 206へ

62

空の彼方をぼんやりと見ていると、黒い点が次第にこちらへ向かい大きくなってくる。それは何か大きな怪鳥のような物だった。故郷に生息していた怪鳥ヌイヌエテクナにしては飛び方が変だ、それにグオオンという音は初めて聞いた。低空になるとその怪鳥の中に人影が見えるような気がする。頭上を幾度も旋回し、その怪鳥は去っていった。一体ここはどこ？　いつの時代なのか。

⇩ 59へ

63

それで老婆の占いは終わりだった。

「さあ、時間がないんじゃ。帰った帰った」

叩き出されるようにして俺は外へ出て行く。よし、南東へ行ってみよう。

⇩ 210 へ

64

「それは、数字の零（ZERO）ですよ」

「よくわかった。わしはあんたをみくびりすぎていたようじゃ」

老人は扉の出現場所を指し示した。俺は扉に向かって行く。次なる世界は一体、いかなる姿をしておれの前に現われるのだ？

⇩ 86 へ

65

ロード・ブリティッシュの門の前には、王への陳情請願に訪れる市民たちで毎日長い行列ができるほどであった。ようやく一晩待たされてロード・ブリティッシュに会えることとなった。

まるで鏡のような大理石でできている床、金がちりばめられた太い柱、見上げても上が見えない高い天井、そしてそこから垂れる七色に光るシルクのカーテン。見る物全てが贅沢にできていた。目の前の台座にロード・ブリティッシュは座っているようだが、薄いカーテンに遮ら



れその顔は見えない。やがて香りがたちこめロード・ブリティッシュの前のカーテンがゆっくりと開かれる。王のおでましのようだ。伝説の王だけにさも威厳たっぷりの大柄な人物だと思っていたが、目の前に現れた男は小柄で腹の突き出たどこにでもいそうな中年男だ。

※ところで現在俺は……

●一人（戦士）……………………⇩ 187 へ
●二人づれの泥棒……………………⇩ 180 へ

66

天界の秘密がこの本の中に……。人影のいなくなった所で黒表紙の本を開いてみる。ところが、中に書かれている文字は今まで一度も見た事のないものだ。失望感に包まれるが、ふと最後のページを開くと、故ヴァルトネリの書いたものと思われる字が……。

「神々の座とは一体……天の柱にて待つべし」

村の人々に会うたびに尋ねてみるが誰も知らない。かれこれ二十人程に尋ねただろうか。村のはずれの小道で乞食(こじき)をしている老人にまで尋ねてみたのだ。すると意外にも……。

「ああ。神々の座、なあ……。ここからほれ、微かに見えるじゃろう。あの山じゃよ。あそこに神々の座があるという。じいさまが言っていただよ」

「ありがとう」

銀貨十枚を手に握らせてやると、乞食は「ギャッ」と叫び、土下座を何度も繰り返す。銀貨十枚あれば半年は暮らせるはずだ。
　どうやら俺はエクトゥスの遺志をしっかりと受け継がなければならなくなってきたようだ。見えざる何かが俺を『天界の扉』へと向かわせているに違いない。

⇩ 20 へ

67

　一路故郷へ。
　胸は二年ぶりの懐かしきふるさとへの思いで膨れあがる。馬をとばし続けるが、肝心の馬が水を欲しがるので、途中の農家で水を貰(もら)うことにする。平和な表情の中年農夫が話かける。
「おたくは戦士ドワーフの者じゃな」
「そうです。今は主人を亡くし、故郷へ戻るしがない身ですが……」
「ひょっとすると、ガルフマードラあたりの出か？」
「そうですが……」
「……そうか」
「なにかあったのですか？」
「うう……む。あそこは、もう行かんほうがええ」
「まさか野蛮なバーバリアン族か、あのうすらでかいだけのジャイアン人たちが襲ってきたの

では……」
「いや。もっと、恐ろしいことが……。とにかくお若いの、お気をつけなされ」
たらふく水を飲み込んだ愛馬に鞭をあて、俺は老オーギュストの故郷、そして俺のふるさとへと飛ばす。馬は水を飲みすぎた事を後悔しているようだ。

⇩ 129 へ

68

奇跡は何も起こらなかった。冷たい外気に晒されたロザリオはただ冷たく光り輝くだけだった。俺はたちまちバルロンの鋭い嘴に体ごとくわえられ、氷壁に叩きつけられる。おのれ、ミナクス……南極が俺の死に場所になるとは……。

DEAD END

69

反乱はまだ太陽が水平線から顔を出さない時に発生した。五十名程の反乱軍がいきなりゼノビルのいる船室へ襲い掛かった。この時代に武器としてよく使用されている火炎放射銃がとめどなく部屋にぶちこまれる。騒ぎが収まるのを待ち、上甲板にあるゴムボートにかけよる。

⇩ 216 へ

70

「あんなガキにいつまでもへいこらしてられっかよ。いいか、明日が決行の日だぞ。待ちに待った反乱は」

どうやらゼノビルの片腕として信頼を得ていたシャークのようだった。

●彼女に反乱計画を教えてやろう…………………⇩231へ

●この反乱に乗じて逃亡しよう…………………⇩147へ

71

セリが終わった。少女は脂ぎった顔の人買い商人に引っ張られて行った。俺は街はずれの門のそばに隠れ、人買い商人が来るのを待った。しばらくすると好色そうな顔をした商人と、紐で縛られた少女がやって来る。

俺は二人の前に歩んで行った。

「おお……。迷える汝。そなたには死の影が……」

人買い商人の前で深刻そうな顔で俺は両手を合わせる。

「な、何!? ほ、本当か！」

「ああ。ちょうど良い。祈禱してしんぜよう」

「ありがたい！ だが、料金は取るのか？」

頭を横に振ると、人買い商人は喜々として俺の前にひざまずく。

でかい頭の真上から、俺は思いっきり大石を降り下ろした。

⇩60へ

72

「た、助けて！」
恥も外聞もなく悲鳴をあげる。
「カルル！　大丈夫か!?」
「だ、駄目だ。こ、怖い！」
「待っていろ、カルル、どんな事があっても挫けるんじゃないぞ。神はいつも私たちを見てらっしゃるんだ。私があちらの森に走るから、おまえは逆の方向へ走れ」
「エクトゥス！」
「じゃあな」
そう言い残すとエクトゥスは両手を上げ、デビルたちを誘い込み、森の中に消えて行く。
その後を無数のデビルたちが襲いかかる。ああ……エクトゥスが自らを犠牲にしてデビルたちを引き付けているのだ。
「エクトゥス！」

●エクトゥスの言うとおりにし、一時隠れて様子を見守る……………⇩ 203 へ
●エクトゥスの後を追う……………………………………⇩ 2 へ

73

「観光旅行の際は是非オーガスト観光へ！」
低い背の男が揉み手しながら俺に話しかける。
「お客さんはここ初めてでしょ。いや、わかってまんがな。宿は？　何、まだ？　だったら私に案内させてください」
男に案内されてやって来たのはホテル・カリフォルニアという大きな煉瓦造りの宿だった。
「じゃ、お金」
案内料を請求するので持っていた金貨を一枚与える。男はどこのものだかわからないと最初は渋っていたが、まじまじと金貨を見ていると、
「これは凄い金だ」と言って、後ろも見ずに逃げて行く。
ホテル・カリフォルニアに入ると、
「ホテル・カリフォルニアへようこそ」
赤い服を着込んだ老人が丁寧に頭を下げてくる。
優しそうな老人だ。この人なら神々の国についていろいろ教えてくれるかもしれない。

⇩ 87へ

74

群衆が出ていった後の建物は異様に静まり返っていた。一体何が起きたというのだ。外へ出るとナンシーたちの乗った例のキャディラックとかいう奴にでくわした。急発進してこの場から去って行こうとしている。俺の姿を見たナンシーが何か叫んでいるがキャディラックはフルスピードで逃げて行く。

一枚の紙をナンシーは投げてよこした。

「ホテル・カリフォルニアで待っている。食事をおごるわ」

●腹が減っているので俺はそのままホテル・カリフォルニアへと向かう……⇩281へ

●いつまでもナンシーの後ばかりくっついているのもだらしがない。**俺はあてもなく歩いて行く**……⇩82へ

75

「どうかしました?」

栗色の髪をした女が心配そうに俺の顔を覗(のぞ)き込む。

「ああ……。大丈夫です」

「もしよかったら相談に乗るわ。私はこの地で天体占いをしているイザベル(ISABEL)というおばさんよ」



「まだ若いじゃないの。おばさんだなんてイザベルさん、一つだけ相談に乗ってくれないか？」
「ええ。いいわ」
「クレリック・アントスに会うには一体どうしたらいい？」
「まあ、クレリック様!? 早く言ってよ、私はアントス様の天体占いを二度してさしあげた事もあるのよ。すぐ案内できてよ。でもクレリック様に何の用事？」
イザベルの案内で、今度は堂々と城に入場できた。

⇩ 219 へ

76

まだこの稼業に自信の持てない俺はゼノビルの誘いにも自信が持てなかったが、彼女の甘い香りと囁き(ささや)に、ふらふらとペアを組む事を承諾してしまった。
「あんた、そうと決まったら、もうこれからはプロ同士としてきちっと仕事をしてもらうからね、いいかい」
「ああ、うん……」

⇩ 121 へ

77

俺はやはり寺院に戻る決心をした。まだ自分には寺院以外の世界は不慣れで余りにも知らない事が多すぎる。それにエクトゥスの遺志を受け継ぐ自信が今の自分にはなかった。空にいるエクトゥスには悪いが、俺が成人して立派な大人になったら、今度こそ『天界の扉』を探

し求めに行こう。そう心に誓い、エクトゥスの形見だった教団の銀のミニチュア剣を握りしめながら帰途を急ぐ。

⇩ 211 へ

78

起き上がると、ロバを引いた老人がいた。白い髭が胸まで伸び、皺だらけの顔が年輪を表している。粗末な布一枚をまとった恰好は今まで見たことがない。どうやらここは俺の知らない土地のようだ。神々の座とはほど遠い場所に来てしまったようだ。

「あの……、ここは神々の座とかいう所ではないでしょうか」

「何言っておる。溺れて頭がおかしくなっちまったか」

やはりここは地球のどこかに違いないが、今まで俺のいた時代とは明らかに違う。

「おまえ、今仕事してるのか?」

「いや……」

「だったら俺と一緒に来い。手下を探していたところだ」

●この老人とともに行動しない事には俺は何もできない。まずここがどこなのか、そして本当の神々の座とはどこなのか調べないことには……。

「是非、一緒に仕事を手伝わせてください」……………………⇩ 150 へ

●誘いはどうやら犯罪につながりそうな気がする。こんな老人に頼るよりも自分で行動したほうが手っ取り早い。

「これからやらなくちゃならない事があるんで、お手伝いはできません」 ⇩267へ

79

ナンシーが連れ去られるのを見ていた俺は、一行が消えると恐る恐る部屋から顔を覗かせる。階下には赤い妙な服を着込んだ男が木のようにつっ立っている。 ⇩197へ

80

「まだ生きてる奴がいる！」

ついに発見されてしまった。

「この船の案内役として一時間ほど生き伸びさせてやろう」

俺は灰色の連中の前に連れていかれた。マスクをはずした連中がおれの方を睨む。

※泥棒稼業に使う小道具について

●所持している ……………… ⇩109へ

●所持していない ……………… ⇩205へ

81

「今夜の公演チケットあげるわ。変わった坊や」




「ナンシーはこのがきに御執心（ごしゅうしん）のようだぜ」
「おいおい！　また化け物の登場だぜ！」
上を見ると紫色の長い尾をなびかせた巨大な鳥が五羽、気味の悪い声を上げながら上空を舞っている。
「そういや、ニューヨークにはおととい、大昔のティラノザウルスっていう恐竜が現れて大騒ぎだったたっていうぜ」
「世紀末なのね！」
「生きてるうちが花。パッといこう。パァッと!!」
「マリファナ、まだあるかい!?」
板に糸を張った楽器から奇妙な音を出しながら、男たちが高笑いする。
●**俺はその公演とやらに行ってみようと思う。**もしかしたら神々の国に通ずる場所かも知れないから……………………⇩274へ
●公演は行ってみたかったが、それよりも神々の国に関して情報を得る事の方が大切だ。**「いいや、遠慮しとくよ」**……………………⇩198へ

82

行くあてもなく歩いていると、知らぬ間に俺はホテルカリフォルニアに着いていた。

⇩273へ

83

「カルル、行かないで！」

見ると、涙をためてナンシーが飛び道具を両手で握り締めていた。
「行っちゃいや。行っちゃいやよ。お願い、わたしと一緒にいて」
老人の飛血で真っ赤に染まったナンシーが抱きついてくる。たまらなくなり、俺は彼女を強く抱き締める。煙と血の匂いがたち込める中、二人はくちづけを交わす。
遠くで人々の何か叫ぶ声が聞こえる。こちらに向かってやって来る。
「カルル……。もっと強く」
彼女を抱きとめてやる以外今は何もしてやれなかった。
「ずっと一緒さ。どこにいようと、何があろうと……」

END

84

「マチルダ姫と結婚する事が今決定しましたぞ」
「ケ、ケッコン!?」

突拍子もないモルギアの言葉に俺は半分驚き半分嬉しく思った。当のマチルダは頬を染め俺に御免なさいといった顔をしている。
「その出来事を早く聞かせて……」
場をとりつくろうようにして老婆をせかした。

⇩ 134 へ

85

「そう……。仕方がないけど……」
ゼノビルはそう言い残すとその場から去っていった。途中一度だけ振り向いたが彼女の瞳は濡れていた。
「この男を処刑しなさい」
そ、そんな！ せっかく君と知り合えたというのに……！
火炎が狂ったように俺の周りを包み、死が舞い降りて来た。

DEAD END

86

老人の部屋へ入る際、俺は……。

●ノックした……………………………… ⇩ 141 へ
●ノックしない………………………… ⇩ 287 へ

87

俺の突然の質問に、この赤い服の老人は、
「お客様のおっしゃる事は、多分こちらに今泊まってらっしゃる御老人がよく知っていらっしゃいますよ」と言う。その老人の宿泊している部屋は二階の一番奥にあった。

⇩241へ

88

わけのわからぬまま群衆に交じって逃げて行く。いつの間にか奇妙な建物の前に出ていた。
「ホテル・カリフォルニアへようこそ」
赤い服を着た男が丁寧に頭を下げる。

⇩273へ

89

「いらっしゃい……。ここは初めてのようね」
「ああ」
見たところ二十歳位のようだが、暗闇に慣れた両目に映る彼女は長い栗色の髪に神秘的なブラウンの瞳をした、男心を刺激する魅力的な女だ。特にツンと突き出た胸の膨らみにおれの眼はくぎづけになってしまう。
「飲み物は何にする？」

「ガシモルテルチュチイ」

「あなた、まだ二十歳未満でしょう。ガシモルテルチュチイはアルコール分八十パーセントよ。おとなしくミルクでも飲んでなさい」

「とにかくガシモルテルチュチイだ」

彼女は呆れたような微笑を残し、カウンターにおれの注文したやつを作りに行く。ここで彼女にオリスカニーの事について尋ねてみよう。しばらくしてやって来た彼女に大人びた口調でオリスカニーなる人物について聞いてみた。

「あら、オリスカニーってわたしのおとうさんよ。あなた父に何か用で来たわけ?」

「まあね」

「だったらいいわ。お店がはねた後でわたしがおとうさんのいる所へ案内してあげる。でも珍しいわね。こんな若くてチャーミングな男の子がうちみたいなお店にやって来るなんて」

俺の頬はうっすらと赤く染まる。

「わたしはエスメラルダ。あなたは?」

「カルル……」

一口ずつまるで毒薬のようにガシモルテルチュチイを飲み終える頃、エスメラルダがエプロンをはずしながらやって来た。

「おまちどうさま。さあ、案内するわ」

⇩235へ

90

老婆は食い入るように水晶玉を見つめていたが、やがて口を開き、
「ジグムント老はもうこの世にはおらん。扉を通り向こうへ行ってしまっているようじゃ」
と告げた。

⇩128へ

91

俺は『道化の町』という名を会う人ごとに聞いて歩いた。そしてそのたびに、人は首を横に振るだけであった。
『天界の扉』を探し求めて七十八日め、ある寒村に辿りついた。顎髭を腰まで伸ばした村の古老が俺の問いに静かに頷いた。
「それは、ここから男の足で三日かかる場所にあるはずじゃ。ただし、若いの、一人で行くでない。あらゆる災難がおぬしに襲いかかってくるぞ。今までにもそうじゃな四十人近くは行方知れずじゃ。もっともここ三十年程は誰も行っていないようじゃが……」
「そこに是非とも行ってみたいんだ。というよりも行くことは俺の義務なんだよ」
「よしたほうがいい。六十三年前にもわしの息子が行きよったが、戻ってはこんかった……」
「ありがとう。おじいさんは物知りだね」

「……、百九十一年も生きておればなあ……」
「百九十一……!?」
体格だが筋肉質の上に強靱なので戦士として仕える者が多い。そのため、戦場に駆け付ける機会は圧倒的にドワーフ族が多くなるので、どうしても戦死者が増え、平均寿命が短かくなってしまう。だからこの古老のように百九十一歳まで生き伸びる男は滅多にいないのだ。

百九十一歳の古老は俺たちドワーフ族の中でもそういるわけではない。ドワーフ族は小柄な

●古巣の古城へと戻っていった……⇩168へ
●そのまま『道化の町』へと向かう……⇩236へ

92

「わかった……」
情けないが仕方がない。すると相手は急に低い声で笑い出した。
「わ、笑うな……」
それだけ言うのが精一杯だった。今はもう宝物よりもいかにしてこの場を無事に逃れるかで頭は一杯だ。
「あんたは幾つなの?」
「お、俺か……。十五だ」

「そう」
謎の人物は小さく頷くと腰に付いていた小さな黒い袋を投げ渡した。おっかなびっくりそれを受け取る。袋を開けてみると、中には万能鍵開け器やワイヤーロープといったプロの泥棒が使う七つ道具が入っていた。
「俺にくれるのか？」
「ふふふふ」
影の人物が被っていた黒い覆面を脱ぎ捨てると、長い黒髪が踊った。
「お、女……？」
若い女はほほ笑むと、俺を手招きする。

⇩ 172 へ

93

エクトゥスの遺体は森のそばのケスルチビギュヌス川で火葬にし、せせらぎに灰を撒き、流した。これから俺は一体何から始めたらいいのだろうか。ようやく十五歳になった俺にはいささか厄介な事ではあった。
エクトゥスの死がまだ俺に重くのしかかる。彼の遺志を継いで『天界の扉』を探し求める旅にでようか、しかし俺にはテルミドーラ寺院の多くの信者を神の道に善導する重要な仕事、いや神の使命が待っている。

●とりあえず今は寺院に戻る……⇩77へ
●エクトゥスの遺志を継いで『天界の扉』を探しに行く……⇩154へ

94

船室は狭く、ここに二十人以上の人間が閉じ込められていた。

「君もさらわれてきた口かい？　船乗りかい」

オニールと名乗る初老の紳士が語りかけてくる。

「僕はマサチューセッツ工科大学で理論物理学を教えている者だが、先程から気になっていたんだが、ひょっとして君は時空の歪(ゆが)みから迷い込んで来たんじゃないかい？」

「天界の扉から来たんです」

「そうそう、ずっと昔、まだ中世の頃は、そう言ってたらしいけれど。モンディンが打ち倒されてからしばらくの間地上には平穏な日々が続いていたんだ。しかし、ミナクスが現れてからというもの……」

勢いよくドアが開き、海賊の一人が入って来る。

※所持品について
●泥棒稼業に使う小道具を所持している……⇩124へ
●黒い本かオカリナを所持している……⇩136へ

●形見の剣を所持している……⇩265へ
●左記の物いずれも所持していない……⇩107へ

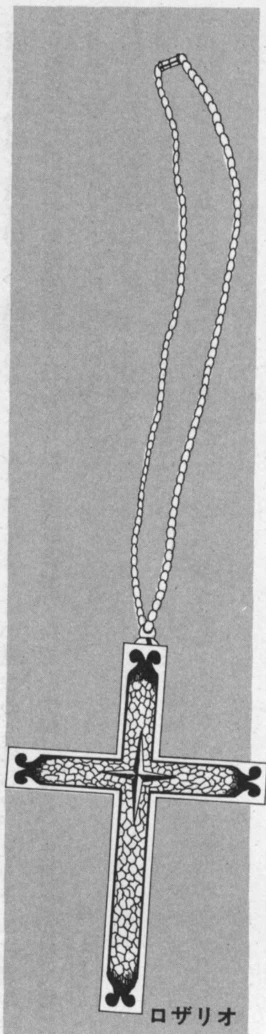
95

街道は古くからあるものだった。行き交う人々の姿も見えない。俺は東へと飛んで行く。

⇩169へ

96

翌朝、朝もやの中、エックスの街に向かい出発した。マチルダは最後のお別れの際、「このロザリオをあげる。これを御守りにして」と、俺に握らせた。



俺は思い出を振り切り、猟師のゲルトルードとともに小屋をあとにした。エックスに向かい歩く事四日、ようやく目的地のエックスに到達するが、ただの山村である。ところが林で寝ていると、ゲルトルードの叫び声が聞こえる。

⇩127へ

97

「御老人、私はカルルと申す者でございます。実は……」
「わかっておる。『天界の扉』じゃろう」
「知ってらっしゃるのですか!?」
「今世界で巻き起こっている不思議な現象もこの『天界の扉』がもたらしたものじゃ」
「神々の国へと通ずるはずじゃ……」
「カルルとやら。こんな詩を知っておるか?」

獅子が大暗空で勝利の咆哮を成した時
大魔王モンデインの唸りは止みぬ。
至福千年王国が続くやも
人心三たび狐盗の態に陥る時
天空に死の塵風が乱立す。

モンデインの悪心ミナクスに移り
下界は時と空間の錯綜に陥る。
西暦二一一二年ミナクスは
地上に腐醜と狂気を対峙させ
・・
哮笑す。
ミナクスを討たぬ限り
地上は永久に大暗夜となりぬ。

「カルルよ。『天界の扉』とは時空をねじまげるある恐ろしい力の事じゃよ。そしてその扉をどこまでも追い求めようとする者は皆非業の最期を遂げた。過去のエイリアンがこの地上に復活したのも皆このせいじゃ。だが、この扉を自由に操る者、ミナクスというバケモノを退治した者こそ真の至福千年王国の主になれるという」
「扉を通じて何回でも行ってみせます。御老人、それで、今度はいつどこに扉が現れるんでしょう!?」
「おぬしは真の勇者なのか、それともただの馬鹿なのか……よし、わしのこの指輪をそなたにやろう。御守り代わりじゃ」

97

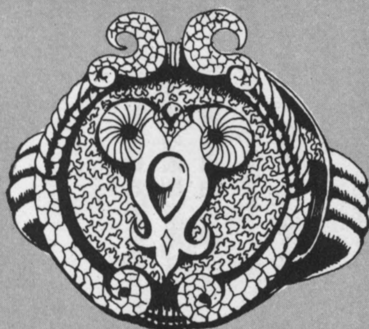
「ご老人、ありがとう」

⇩ 253 へ

98

そうだった。あのコインは母親のゼノビルが時間停止術として使っていたっけ。昔、俺が彼女と忍び込んだロード・ブリティッシュ城の光景が懐しく思い出された。

⇩ 101 へ


指輪

99

テルミヌスの一人息子テルニールが杖をつきながらこちらにやって来る。
「これはこれは、カルルじゃねえか。立派になったのう……」
久しぶりの出会いに、俺は剣を中段に捧げ、剣友礼の儀をおくった。老オーギュスト侯から領土と位とを授かった栄誉を話すと、二人は手放しで喜んでくれた。
「この荒れた地をもう一度昔の栄えある国にするにはカルル、いやカルル将軍しかいねえ」
「そうじゃ、カルル将軍、あんたしかいねえ」
勇者の呼び名で俺は再び頬がゆるんでくる。だが、荒廃したこの領土を盛りかえすには俺の力では到底不可能だろう。
「テルミヌスさん。俺一人じゃ悪魔どもからこの地を守り抜くのは無理だ。」
「心配すんな、カルル、いやカルル将軍。ロード・ブリティッシュに救いの手をさしのべてもらうんじゃゃ。あの方ならカルル将軍の最も親愛なる味方となってくれるじゃろう」
テルミヌスの提案に息子のテルニールが違う提案を出す。
「いいや、親父。水晶球占いでその名を地界空界に知らしめたヒキターンスに先の事を占ってもらってじゃ、これからの統治の仕方と悪魔との戦い方を決めればええんじゃ」
「馬鹿こくな。ヒキターンスはありゃドワーフ族とは月とスッポンの情けねえエルフ族の野郎

じゃ。エルフといやあ女みてえな格好しやがって、魔法でうまくこの世を生きて行こうとする弱虫野郎の連中じゃねえか。あんなペテン野郎の占いなんて！」
「親父は古い。今やエルフのなかでもヒキターンスの占いは天下一、毎週金曜日の占い日には奴に占ってもらおうと十キロも長蛇の列ができるっちゅうじゃねえか」
「水晶で一体何がわかるっちゅうんじゃ。なあカルル将軍、悪い事は言わねえ。今すぐロード・ブリティッシュのもとへ行くがええ。」
「いいや、水晶占いだ。ブリリアントなヒキターンスに会ってこい。きっとこれからの進むべき道を示唆してくれるにちげえねえ」
伝説のカリスマ、ロード・ブリティッシュか、はたまた流行の水晶占いか、単細胞の俺にはどちらも最高の存在に思えてくる。一体俺の未来、いや領民の未来はどちらに頼ればいいのだろうか。

●ロード・ブリティシュに会いに行く……⇩ 185へ
●占い師ヒキターンスに会いに行く……⇩ 245へ

100

宝物殿は分厚い鋼鉄の扉の中にあった。護衛兵が扉の前に立ち、我々一行を中に案内する。ゼノビルはそっと胸の膨らみの中から例のコインを取り出すと、指で空中にはじく。

100



コインは宙で数回転すると同時に粉々に砕け散る。それはまるで夢の中で起こった出来事のようにゆっくりとしかも鮮明に網膜に映った。コインの砕けた跡にしばらくの間視線がくぎづけになり、そこに吸い込まれそうな錯覚に陥る。どれだけ経っただろうか。誰かが俺の肩を揺すっているのに気がついた。ゼノビルだった。

ゼノビルが顎で指す方を見るとそこには同じように砕けたコインをじっと凝視したまま動かないでいる護衛兵たちがいた。

「さ、急ぐのよ」

ゼノビルにせかされ、俺は懐にしまっておいた袋を取り出し、手当たり次第に詰め込みだした。袋が一杯にならないうちに外が騒がしくなってくる。

「残念だわ。さ、逃げましょう」

二人は袋をかつぎ、外に飛び出す。刀を振り回す兵士たちを袋でなぎたおし、逃げて行く。

追っ手は徐々に増えていく。

⇩ 251 へ

101

「ホホ、ホホホホホ！」

空から女の笑い声がこだましてくる。

「カルルよ、よく来たね。私の眠りを妨げに来たのかい？」

「おまえがミナクスか!?」
「おまえは私を討ちに来たのだろうが、生憎だねえ。いいかい、おまえは悲劇的な結末を迎えることになるんだよ」

⇩ 232 へ

102

アメリアには会って話がしたかったけれど、あいつ、俺の事忘れているだろうな。
怒り狂った大男が追い掛けてくるが、足には自信のある俺は反対車両にわけもなく飛び乗り、逃げて行く。
再び席に座り、息を鎮める。眠りがまたやって来たようだ。地下鉄がスピードを上げているんだか下げているんだかわからなくなってきた。夢か。いや、いつかこれと同じような体験をしたような……、いつかこんな経験をするとわかっていたような……。胸が苦しい。働きすぎか？　いやいや、さぼってばかりいるからな。となるとこの地下鉄が狂っているのか？　マリファナはここのところやっていないし、LSDとも違う。暗い地下道が果てしなく続く。前の車両が徐々に黒い闇の彼方に吸いこまれて行く。地下核実験のせいか？　俺自身の体も吸い込まれていくようだ。
「カルル！」
誰かが叫んだような気がする――。遠くから人の声が湧いてくる。

⇩ 40 へ

103

「きみの名前は?」
「そりゃそうさ。だってこう見えても僧侶なんだからね。エルマ。パパとママがいきなり消えちゃったの。あたしの知らない間に……」
「いきなり? ひょっとして、『天界の扉』と言っていなかったかな、周りの人たちは」
「なあに、天界って?」
「いや、俺にもよくわからないんだが、何かしら天界へ通じる道という話……」
「神様のいる所なの? あたし、パンの神様なら知っているよ」
「パンって、牧神の事かい?」
「そうよ。おにいちゃん、よく知っているわね」
「エルマ、俺をその牧神の所へ連れていってくれないか。僧侶として是非見ておきたいんだ」
「うん、いいよ。おにいちゃん悪い人じゃなさそうだし……。そうだ、これ、あげる。こどものあたしじゃちょっと重たいの」
そう言うとエルマは腰の大きな剣をくれた。
「パパの形見よ。魔統剣って言うんだって」
エルマは俺の前を蝶のようにひらひらと舞いながら案内していく。

⇩ 170 へ



104

出血が俺の意識を失わせかける。
「カルル……」
周囲を見渡すとデビルたちの死骸の中にエクトゥスが倒れて俺を呼んでいる。デビルの攻撃を一身に受けたエクトゥスは微かに呼吸をするのが精一杯だ。
「カルル、こっちへ来るなと言ったのに……」
俺は感謝を込めてエクトゥスの手を固く握る。
「カ、ル、ル……。ど、どうやら私の、最期が、き来たらしい。」
「エクトゥス」
「天界の、と、扉が解明できなかったのだけが残念だが……ああとはカルル、君が私の意志を継いで『天界の扉』を、求めて、あ歩き続けるんだ……」
「死んじゃ駄目だあ！」
「死ぬのは怖くない。いや、む、むしろ神のもとへと近づけるんだからな。感謝を……」
エクトゥスはそのまま静かに目を閉じ、神のもとへと旅立って行った。

⇩ 93 へ

105

「この光が『天界の扉』なんでしょうか？」
俺の問いに古老はただ頷(うなず)くだけだ。
よし、扉の向こうに通ずる神々の座に行く最高のチャンスだ。生きて帰れるかわからないがこれを逃してはまた一年待たなければならない。運命の神に祈りながら、光の中へと身を投げ込む。

⇩131へ

106

「ありがとう。わたしマチルダ（MATILDA）というの。あなたは？」
「カルル」
先程まで気がつかなかったが、マチルダと名乗る少女は男の心を引き付けるような緑の瞳をしていた。これほど美しい瞳があっただろうか。汚れきった体は垢(あか)だらけだけれど、今はそれすら気にならなかった。
「君はどうしてあんな奴の小屋に……」
「奴隷商人に拾われたのよ。もう少しでわたしも売られるところだった」
「両親は？」
「死んじゃったわ……。デビルに襲われて」
「そうだったの」



「マチルチル城って知っている？」
「いや。きみはそのお城にいたのか？」
「そう。王女だからというんでギルクリストはわたしを高く売りつける気でいたの」
「王女……！　そうだったの……。苦労してきたんだね」
「ううん……。今まで何も苦労してこなかったから、これも神様がわたしに与えてくださった試練だと思うの。そしてあなたがわたしを助けてくれた事も神様の……」
思わず頬が赤くなってしまった俺は慌てて質問する。
「ここは一体なんていう所なの？」
「わたしってお城以外出た事なかったから……」
「そうか……」
「でもバラデインっていう街はこの近くだと思うわ。そこなら知っているけど」
とりあえずその街に行ってみるか。

⇩ 159 へ

107

海賊の男に連れられて来た所は調理場だった。
「これを朝までに剝いておけ」
ざるに山と積まれたじゃがいもを、俺はひたすら剝くはめになった。

⇩ 228へ

108

気がつくと、見た事もない部屋にいた。異様なくらい柔らかい寝床に寝ているではないか。
横には一人の女が心配そうにこちらを見つめている。
「ここは……?」




1990



「覚えてないのね。あなたは道に倒れていたのよ」
「……。ここは神々の国？」
「何ねぼけているのよ。わたしはナンシー（NANCY）。あなたは？」
「俺は、カルル」
「まだ若そうね」
「十五だ」
「そう、うちの弟と同じだわ」
「あんたは一体何をやってるんだい」
「知らないの？　ナンシー・マフォンナ、今売れっ子寸前のロック・シンガーを」
「……」
「連中がバックバンドのトルバドール」
壁に張ってある絵のようなものに映っている女のように髪を伸ばした男たちを指す。
「トルバドールって、吟遊詩人？」
「吟遊詩人ですって。今は一九九〇年なのに、まるで中世の人か何かみたい。」
「そうか、今は一九九〇年か……。」
「まあ、ロック・シンガーも吟遊詩人の部類に入るかしら。変な人？」

ナンシーは焦点の定まらない目で俺の方を悪戯っぽく覗いている。

⇩ 22 へ

109

みんな若そうだ。その連中の顔を何気なく見ると、どこかで見たような顔の少女がいる。
ゼノビルではないか!? いや、待て、彼女ととうの前に別れたはず。
「何じろじろ見てるんだよ。この男をほうりこんでおけ！」
声までゼノビルにそっくりではないか。

⇩ 230 へ

110

ナンシーの一行が公演する場所は、ニュー・サン・アントニオ・シティーホールという名の大きな建物だった。十代を中心に若者たちが列を作り、公演が始まるのを待っている。これはひょっとすると神々の国に通ずるイベントが行われるのではないだろうか。期待に押しやられ、おれは列に加わり、中に入って行く。内部は椅子が至る所に並び、興奮した面ちの若者が盛んに手拍子を打っている。三十分もすると、いきなり幕が開き、大音響がする。

⇩ 208 へ

111

――翌朝。小鳥たちがさえずり始める頃、重い扉が動きだした。
「さあ、こそどろめ、最期が来たぞ」

髭（ひげ）を生やした歩兵たちがやって来る。連中の足元の間をくぐって脱出しようとしたが、たちまち扉の外で盾を構えていた兵士にぶち当たって捕まってしまう。
「ちくしょう！」
「馬鹿か。おまえの絞首刑見たさに群衆が三千人も集まっているんだぞ。逃がしてたまるか」
恐怖で顔が引きつった俺は首を持たれたまま刑場へと引きずられて行く。
「たっ、たすけて！」
ようやく声が出るが、集まっている群衆の罵声に消されてしまう。
「さあ、皆よおく見ておくがよい。偉大なる領主さまの財宝を盗もうとした不届きな者の最期を！」
黒ずくめの死刑執行人が大声で叫ぶ。
――ま、まだ死にたくない。やり残した事だって沢山あるし、そ、それに女の子とだって付き合ってみたい。い、いやだ」
俺の顔に黒い頭巾がかぶせられ、あたりは闇の世界となる。首に太い荒縄が巻かれる。人の不幸を格好の娯楽としている悪魔のような小市民たちは、ますます喝采（かっさい）を上げる。
こんな連中の目の前で死ぬなんて……。くそっ。神よ、我に生きる機会を今一度与えたまえ！
気が徐々になくなってくる。あれが天国って奴か。

DEAD END

112

老婆はコックリと頷（うなず）くと水晶玉をゆっくりとなで始める。老婆の右手が徐々に速く水晶玉をなでていくと、
「オオオオ……。夜空に広がる星々がおぬしを待っている」とつぶやく。

⇩ 63へ

113

オリスカニーのいる家は貧しい藁（わら）ぶきの小屋だった。
彼は白髪の老人で、既に耳が遠く、こちらの話す事もなかなか聞き取れないようだった。エスメラルダが傍らに寄り添い、老人の耳元で俺の話しを優しく語りかける。彼女の助けでようやくこちらの話も分かってもらえる。
「カルルとか言ったな。わしに聞きたい事とはなんじゃな？　わしはこの町ができた頃からずっとここに住んでおる。町の人々に笑いをふりまく道化の務めをずうっとしてきた。王の中の王と言われるロード・ブリティッシュ様に仕えてきた由緒ある身じゃ」
『天界の扉』の話を聞くためにここまで苦労してやって来たのだ。老人の回顧につきあってはいられない。
「御老人、私の聞きたいのは『天界の扉』についてなんです」
老人のつぶやきが突然途切れた。しばらく沈黙が流れる。

⇩ 240へ

114

ミナクス、M・I・N・A・X……。ミナクスに関わりのある女たちの名前。その女たちの名前、アルファベットだな。最後の文字の数を合わせるのか……。何かだんだん謎が解けてきたぞ。もう一息だ。

●その数がわかったらその番号へ進むこと

●わからないときは…………………… **135へ**

115

「あなたの名は？」

「俺か……。ギルクリストだ」

「なんの仕事をしてるんですか？」

「もうすぐわかるって」

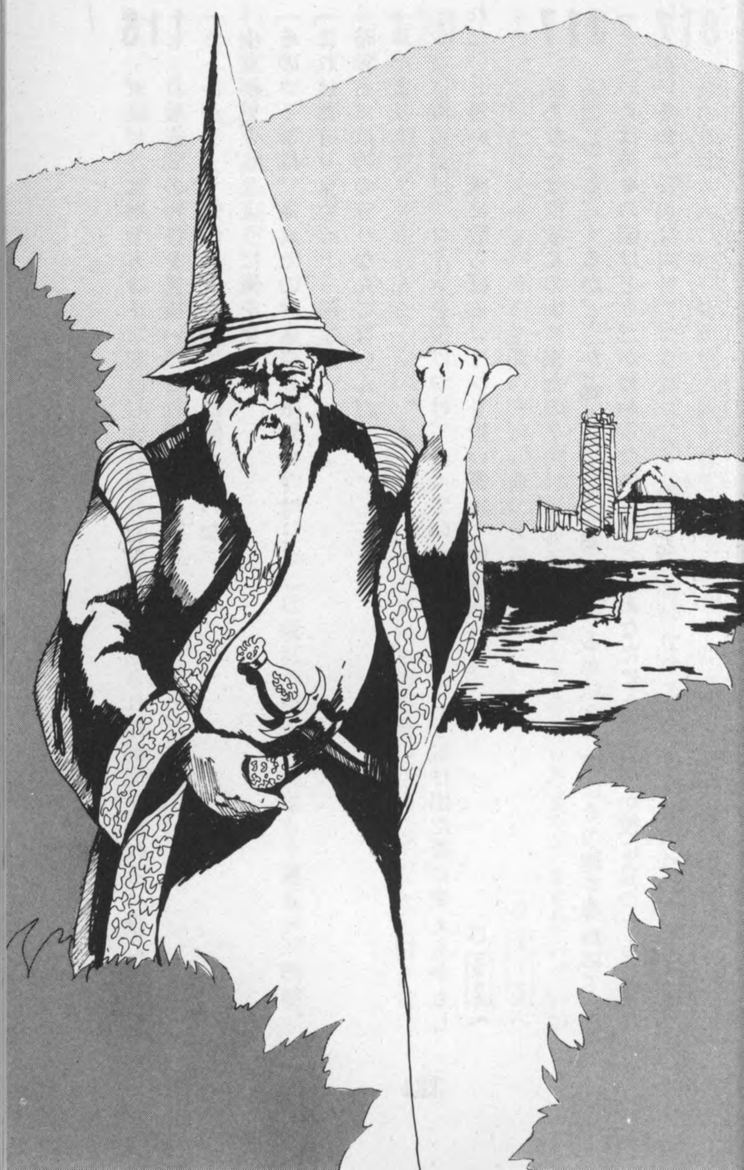
そう言うと、意味ありげにニヤリと笑う。

低い灌木(かんぼく)の茂みの間をぬうようにしながらギルクリストの家まで歩いて行く。しばらくすると沼地が一面に広がり、向こう側に粗末な藁(わら)ぶきの小屋がある。

「あれが俺の仕事場だよ」

小屋の中に案内された俺は、そこで恐ろしい光景に出くわした。

 **250へ**



116

ゼノビルはいつもコインをはじきながら俺たちの幽閉された部屋を訪れる。役に立ちそうな人間の特性を見抜いてそれぞれの部署でこき使うためだ。
「カルルか……。僧侶じゃ戦闘用には使えないな」
少女が見下したように俺を見る。
「そのコインは、あんたのマスコットかい？」
「これはお守りよ」
「略奪者には神の守りなんてないんだ……」
「おだまり！」
少女は俺めがけ、コインを投げつけ、去っていった。俺はここを脱け出た後に使えるかもしれないと思い、床に散らばるコインを拾い集め、懐に入れた。

⇩ 52 へ

117

「あなたは何故この街に来たの？」
「信じてもらえるかどうか。神々の国って知っているかい？　俺はその地を尋ねに……」
「そういえば神々の国はどうだかわからないけれど、あなたにとって何か役に立つかもしれない人がいるわ」

⇩ 13 へ

118 男たちは六人いた。皆灰色の服を着ている。その中の一人が銀色に輝く棒を取り出し、くまなく辺りに向けていたが、大きく頷(うなず)くと皆奇妙なマスクを脱ぎ始めた。⇩255へ

119 「食事はまだでしょ。ステーキおごるわ」
出てきたレア・ステーキとかいう肉はやけに火が通してあり、あまりうまくない。いつも食っていたウスギンバラの生肉の方が、俺には百倍うまい。⇩175へ

120 「た、助けて……!!」
この若さで死を迎えたくない。もっともっとうまいものも食いたいし、女とも付き合いたい。
「お、お許しください……領主様！」
「ホビットのコソドロが、何をいうか。いいか、わしは疲れたから今晩はもう寝るが、明朝、村の広場で公開処刑だ」
「そ、そんな！」
「ゴミは処分せんとな」
「お、お願いします！ もう二度といたしません！」

手足をバタつかせる俺は、家来に一撃を食らい、気を失う……。

⇩264へ

121

二人はこうしてロード・ブリティッシュの莫大な財宝を狙いに海を渡るためにロード・ブリティッシュの国からやって来る交易船に乗り込んだ。早速ゼノビルは〈商売〉を始める。一時間のうちに居眠りをしている乗客や女を口説いている船員から、サイフの中身をいただいている。もちろん連中の知らないうちにだ。神技だった。特にレザーに身を包んだ彼女の豊満なバストに好色そうな視線を投げかける副船長からサイフの中身と金の小剣をいただいた時などは、いつスッったのか俺にもわからなかった。

「どうしたらあんたのような凄い腕になれるんだい」

たまらずに質問すると、

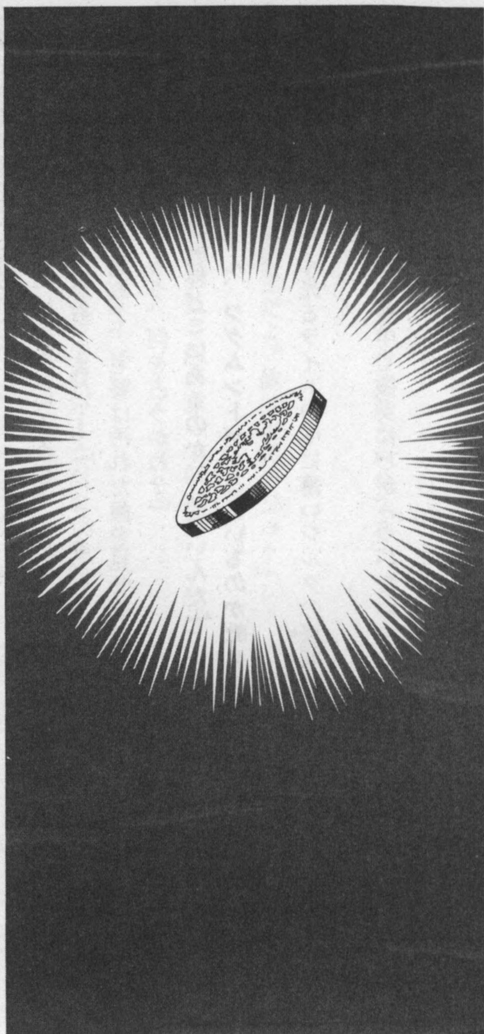
「これのおかげよ」と古びたコインを見せる。すり減って何が刻まれているんだかわからない妙なコインだ。さも欲しそうな顔をしていたのだろう。ゼノビルは俺にそのうちの五枚を分けてくれた。

「時を止めたかったら、これを投げてみなさい」

黒髪を潮風になびかせ、彼女は悪戯っぽく微笑んだ。

「そうか、時間を止めるコインなのか。これは何かのときに役に立ちそうだ。ゼノビル、礼を

言うよ」



⇩
204
へ

122

老婆は俺をにらむと、
「だが、魔術も満足に使えないようじゃ、小僧も駄目な男よのう」
「今は修業中の身だ。だから、まだ……」
いきまく俺を横目で見ると、老婆は汚れた歯を見せながら意味ありげに笑い、
「金貨五枚で占ってやろう。何を占うかね？」

●「『天界の扉』が一体どこにあるのか知りたいんだ」……………… ⇩ 237 へ

●「おれのじいちゃん、ジグムントがどこにいるのか教えてほしい」………… ⇩ 90 へ

123

ナンシーは妖（あや）しく光るライトの中に薄いシルクの寝間着（ねまき）をまとい、横たわっていた。
「カルル……」
体の奥が熱くなり、俺は夢中で彼女にしがみついていった。シルクの寝間着を脱がせようとすると……。
「ちょっと待って……」と言いながら、ナンシーは光を消した。
二人は抱擁し、くちづけを交わす。

⇩ 183 へ

124

海賊に連れていかれた先は大きな船室だった。分厚いドアを開け、中に連れられていく。
中にいたのは、あの少女だった。

⇩242へ

125

「気がついたようだな」
耳の遠くで人の声がする。
「あんた、よくあいつらの手から逃れられたなあ」
男は小柄で白衣を着ている。
「ここは?」
「エレメンテ空母の看護室だよ。俺は医師のジョー」
「クウボ?」
「あんたは例の海賊に襲われて海に漂っていたんだ。危なくフカの餌食(えじき)になるところだったんだぜ」
「どうして、ここは神々の国?」
「あんた、まだショックが抜けてないようだな。今日が何年何月かわかる? 二一一二年の…」
「二一一二年!?」
「最近時空の歪(ゆが)みで過去と現在がごちゃになっているけれども、あんたもひょっとして……。」


NAVE

その時だった。いきなり不気味な音がして、艦内は騒然となって……

⇩243へ

126

そういえば、あのオニール教授はどうしているだろう。全員この町で開放されて自由市民として生活しているというが……。

オニール教授こそ『天界の扉』について詳しい事実を知っている人だ。確か時空の歪みが今までの不思議な現象を巻き起こしていると言っていたが。

オニール教授を訪ねに町へ出た。

⇩37へ

127

「アアア……。アレ、アレ。ヒカリガ……!」

光の中にゲルトルードが吸い込まれていく。

「ウフフフ……」

どこからともなく女の声が聞こえる。

空間が歪み、ゲルトルードの体が一瞬にして五個にちぎれ飛ぶ。

「天界の……。これが神々の国へと通ずる扉か!?」

光の中に俺は覚悟を決め、飛び込んで行く。

※指輪とIDブレスについて

●両方とも持っていない ⇩ 108へ
●指輪は持っている ⇩ 42へ
●IDブレスは持っている ⇩ 108へ

128

「それだけか……？」
「ああ。時は常にうたかたのごとく流れて行く。上流で見た水も下流では既に前の水ではない。水は誰からも捕えられない。未来も同じ事よ」
占い師は消えていく。

⇩ 144へ

129

土埃舞う道を行くと、記憶に残る風景が徐々に視界に飛び込んでくる。だが、どこか以前と違う。緑に覆われたあの広大な畑が荒れ地に変わってしまっているではないか。強風に吹かれ、無残にも焼け落ちた城が俺の帰りを待っていた。老オーギュストの愛していた三万冊の古書が黒く炭化し、錆びた暖炉の横には焼け死んだ鼠が平たくなってむくろをさらしている。この地には生あるものは存在しないのだろうか。風が破れた空から悲しい音をたてて入り込む。昔は多くの招待客の誇らしげな顔を照らした天井のシャンデリアも、風に揺れながら見下ろしている。

⇩ 164へ

130

「この先はバルロンというとてつもない怪物が出没するからなあ。できる事なら行かん方がええんじゃが……」
「バルロン？」
「そう。どうしてもそっちに行く用事があるんかい？」
「うん」
「なぜじゃ」
「『天界の扉』を探し求めて俺のじいちゃんが旅立ってしまったんだ」
「ほほう。『天界の扉』か……。妙なものを探しに行ったんじゃな」
「知っているのかい!?」
「この先の道化の町にいるオリスカーニというおいぼれじじいがよく昔言っておった。変人扱いされて誰も相手にしていなかったが」
五日後に俺は道化の町に辿り着いた。

⇩ 3 へ

131

青い世界が目の前にあった。『天界の扉』の向こうは青い世界だったのか？
いや、この音は波の音。俺はいつの間にか大海に漂っている……。神々の地とは単なる海原の事だったのか。俺の隣にいた古老もいない。波に身を任せながら失望感と不安感に襲わ



れる。遠浅のためにあまり泳ぎに自信のない俺でもどうにか砂浜まで泳ぎきれた。息を荒げて、大の字になっていると、
「若いの、どうした？」と、声が聞こえる。

⇩ 78 へ

132

「わしももう年じゃ」
「年と言ったってまだ百九十八歳じゃないか」
「今まで使ってきた魔法がいささか強すぎた。その分寿命も縮むんじゃ」
「じゃあ、あと何年生きられるの？」
「そうじゃな、あと二年あるかないか」
「そ、そんな……いやだよ！」
「いいか、カルル。わしは今まで数えきれないほどの魔法を使ってきたが、どうしても摑めぬものがあった。わしはそれをこの眼で確認するまでは死ぬに死ねん」
「……な、なんだい？　おじいちゃん程の魔法使いが摑めないものって？」
「それは、『天界の扉』と言うんじゃ」
「天界の扉？」
「全ての生きとし生けるものが天分を十分に発揮し、至福千年王国の地へと通ずる扉」

「お、俺も連れて行っておくれよ。魔法が上達するかもしれないぞ」
「カルルよ、おまえはまだ若すぎる。『天界の扉』を探すにはもっと後、おまえの魔力が更に強くなってからでも遅くはない」
「いやだ！　一緒に行く！」
「生意気言うんじゃない。しっかりと修業を積まぬと、中途半端な魔法使いで終わってしまうぞ」

⇩ 17 へ

133

それまで城と領地を持ち、何一つ不自由なく暮らしていた老オーギュストが何故『天界の扉』を探し求め、諸国をさまよい歩いたのか。俺はすっかりこの謎に心が奪われてしまった。真の勇気ある騎士になるために自分を試す格好の題目ではないか。俺の考えは甘いのだろうか。いや、俺は『天界の扉』そしてその向こうにある何かを目指して歩く。老オーギュストの見果てぬ夢をついで……。

⇩ 220 へ

134

「あんたはこの辺りに伝わる伝説でこういうのをご存じかな」
そういうとモルギアは低く垂れ込める声で不気味な詩を語った。

獅子が大暗空で勝利の咆哮を成した時
大魔王モンデインの唸りは止みぬ。
至福千年王国が続くやも
人心三たび狐盗の態に陥る時
天空に死の塵風が乱立す。
モンデインの悪心ミナクスに移り
下界は時と空間の錯綜に陥る。
西暦二一一二年ミナクスは
地上に腐醜と狂気を対峙させ
嘲笑す。
ミナクスを討たぬ限り
地上は永久に大暗夜となりぬ。

⇩ 215 へ

135

「カルル、せっかくここまで来たというのに残念だったね。おまえをもて遊んでやったが、それももう終わりさ。死ぬがいい、カルル……」

「ああ、神様、お助けを……」
「ワハフファフアフホホホホ……」

DEAD END

136

海賊の男に連れられて暗い船室に叩き込まれた。
「仲間がくたばろうとしている。信心深い奴だったから最期のお祈りをやってほしい」
俺は即席のお祈りを死ぬ寸前の病人の枕元でしてやった。

⇩ 116 へ

137

「ゼノビル……」
少女は不思議そうな表情で見返して答えた。
「あなた、私を知っているの？」
「じゃあ、やっぱり君は……」
「ゼノビルってみんなは呼んでるわ」
「ゼノビル？」
「ママもゼノビル。私はその」
「子供か!? 信じられん。だって君、いや君の母さんは……」
「あんたも時空間の歪(ゆが)みでここに迷い込んできちゃったんじゃないの？ ここは二一一二年

よ」

俺は天界の扉を通り時間を飛越えてしまったというのか。だが瓜二つの少女が偶然ゼノビルという名になるだろうか。

⇩230へ

138

「やむをえん……」

男は服の中から黒く光る鋼鉄製の何かを取り出し、俺に向ける。槍と剣がこの世で一番怖い武器だ。こんなもんで参る俺ではない。男に飛びかかっていこうとすると……

きな臭いにおいが辺りにたちこめ、俺は地面にもんどりうって倒れてしまった。腹からとめどもなく血が噴き出し、土を濡らしていく。意識がだんだん遠ざかっていく。

もしかしたら、これが神々の国に行ける最後の……。

DEAD END

139

ところが周りからは、「三十七枚！」「四十枚！」の声が発せられ、とても俺の出る幕はなかった。これ以上持ち合わせはない。

●もっと彼女を幸せにしてくれる買手がいるかもしれない、そう自分に言い聞かせ、**広場を去って行く**……………………⇩5へ

●**こうなれば非常手段に訴えてでも彼女を救い出してみせる**……………⇩229へ

140

儀式が最高潮に達しかけた時だった。
突然金属音のようなものが鳴り響き、若者達は我先にと逃げていく。
「サイレンが鳴った！　来るぞ」
「どけどけ！」
化け物騒ぎはもう飽きたぜ！
恐慌状態だ。俺は……

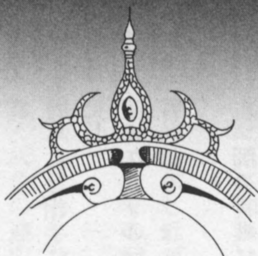
●群衆と一緒に脱出する。何かが起こったに違いない……⇩88へ

●ナンシーの元へ駆けて行き、何が起きたのか聞いてみようと思う……⇩184へ

●そのまま様子を見てみる。また例の扉が出現したかもしれないからだ……⇩74へ

141

老人の話によると、扉はこの街の南東に位置するハスイチュルン山の頂きにしばしば出現するという事だった。
待つこと二日、ついに扉が出現した。俺は目も眩む光の渦にまた俺はからだを投げ入れた——
——。
⇩278へ



142

「剣が……。剣が折れし時は戦いに破れし時」

アルディーアは無念そうな表情で俺をみつめ、

「小僧、今回は戦士の掟(おきて)により、俺の負けのようだ」

そう言い残すと去って行く。あとを部下たちが追う。

「あなた、大丈夫!?」

エスメラルダが駆け寄り、俺を抱きかかえる。

「さっきのアルコールが効き過ぎて、やられちゃうんじゃないかとヒヤヒヤしたわ……」
「俺が強かったんじゃない。こいつのおかげ」
魔統剣を握り、強運に感謝する。
「さあ、お父さんの所へ案内しなきゃ」

⇩ 113へ

143

俺は信じてもらえないかもしれないが、『天界の扉』を通じてこの地にやって来た事実を語った。
ナンシーは驚く様子もなく、その扉が今も起こっている謎の現象の一つではないか、と推測する。
「学者たちには相手にされてないけど、あなたとよく似た話をしているじいさんがいるわ」
「どこに⁉」
「ほら、あのホテル」
「ホテル・カリフォルニア！」

⇩ 191へ

144

占い師の言葉に俺はしばらく立ち尽くす。俺は『天界の扉』に行けるのだろうか。
「北北西に行くがよい」

占い師はそれだけ言うと俺を追い出してしまった。
俺は北北西に向かいひたすら歩き続けるのだ。

⇩ 256 へ

145

目的地へと近づくにつれ、その噂は徐々に真実みを帯びてきた。「扉」という単語がよく道行く人々の口から出てくるのだ。

⇩ 20 へ

146

隠れようとしたが慌てて階段を下りたために足を踏みはずし、下の床に激突し、わけもなく灰色の連中に捕まってしまう。

⇩ 80 へ

147

安全に逃げ切るにはどうしたらいいだろう。その足でオニール教授の元へ行き、反乱の際取るべき行動を尋ねる。教授は俺の師でもあるのだ。
「いつか来るとは思っていたが、こんなに早く来るとはな。カルル、組織というものは大きくなると必ず細胞分裂が起きるものなんじゃよ。前々から準備していた甲斐があった」

⇩ 69 へ

148

「カルル！　ここにいたのね！」
　ゼノビルが立っていた。
「お願いだ、俺はどうしても行かなければ……」
「どうしても……？」
「ああ、ミナクスを倒す。『天界の扉』を通ればきっと神々の国に辿(たど)り着けると思う。ミナクスさえ倒せば、きっと本当の至福千年王国に行けると思う……」
「重症ね、あなたの夢想病は」
「俺もそう思う」
「止めないわ」
「ゼノビル。それとも、俺と一緒に行ってくれるか？」
「駄目、私には行けないわけがあるの」
　ゼノビルの言葉が妙に気にかかった。
「それでは教授、そして……ゼノビル……」
　再び天界の扉へ……！　我が身を投じて……。


131へ

149

するとそこだけ時間が停止したように、今まで狂い続けていたバルロンの動きが止まった。不思議なコインだ。

●俺は、ゼノビルの母を知っている……⇩ 279へ

●俺は、ゼノビルの母を知らない……⇩ 98へ

150

老人は茶色の歯を見せて笑い、
「俺と一緒なら、おまえさんも結構いい稼ぎになるよ」と語る。
二人は海岸沿いに歩いて行く。

⇩ 115へ

151

老オーギュストとともに城を出てからもう二年が過ぎた。俺はまず老オーギュストの古城と領土をこの手で守るべく、故郷へと歩を進めた。
ところが、緑と小鳥がさえずる安息の地であった故郷も、今では見る影もなく変貌(へんぼう)していた。城へ伸びる土埃(つちぼこり)の舞い上がる道の両側の畑は、もう何年も耕した事がないと思うほど乾燥し、枯れた老木が散在していた。いやな予感がした。領土の大半を占める畑がこれほどまでに荒れ果てているとすると……。

⇩ 50へ

152

「おにいちゃん、さっきボルクスっていう人の事、聞いていたね。俺、知っているよ、その人……」

「坊主、本当かい？」

「うん、ただし小遣いくれなきゃやだぜ」

銅貨一枚をくれてやる。子供が連れて行ってくれた所は朽ち果てた一軒の家だった。銅板の表札には「占い師、フォルクス」と書かれている。

「おい、俺の捜しているのはフォルクスじゃなくてボルクスだぜ」

「ああ、この地方じゃフォルクスっていうんだ。兄ちゃんの所じゃなまってボルクスって言うんだよ。田舎だもんな」

確かにこの街の方が都会に違いないので言われるままにしておく。

⇩ 4 へ



153

セリが終わった。
少女は脂ぎった顔の人買い商人に引っ張られて行った。
俺は街はずれの門のそばに隠れ、人買い商人が来るのを待った。しばらくすると好色そうな顔をした商人と、縄で縛られた少女がやって来る。
俺は大石を両手に持ち、そっと後ろから商人に近寄った。鬼のような男に思いっきり打ち付けてやるのだ。両手を天までかざし降り下ろそうとするが、あまりにも重い石のために体がよろけてしまう。
「ひ　ひえっ！」
恐怖に引きつった顔で人買い商人が女を置き去りにして逃げて行く。俺は少女の縄をほどき、連れて逃げようとするが、騒ぎを聞いて駆けつけた街の守衛兵たちが手に手に槍を持って襲ってくる。
風を切り、槍は辺りに突きささる。俺の腹に突きささる。そのうちの数本が鈍い音をたてて少女の肉体にもめりこんでいく。それが最後に見た光景だった。腹に突きささった槍を抜こうとしながら徐々に意識が遠ざかっていく。
俺は今度こそ天に昇って行くのだろうか……。

DEAD　END

154

俺はやはりエクトゥスの遺志を受け継ぐ決心をした。
まだ自分には神々の集う地へと通ずる『天界の扉』を探しあてる自信はなかったが、エクトゥスは俺の師であり兄であり父であった。そのエクトゥスの遺志を継がずに生きるのは背徳でしかない。

⇩257へ

155

謎の女は無言のまま、格子をあっという間に切り落とし、ロープを投げ下ろす。
「さあ、早く」
ロープがこんなにありがたく思えたことはない。言葉にならない声を発し、ロープにしがみつき、窓から外へと飛び出す。……助かった！
周りを見ると武装した兵士たちが眠りこけている。
「睡眠用の黒煙をちょっと焚いたのよ」
黒ずくめの女が笑う。

⇩172へ

156

「いい、カルル。私たちと一緒に仕事をしないこと？　どうせあとわずかの時間しか地球には残っていないんだから。この海賊の中で私が一番偉いのよ」
「もし、いやだと言えば？」

「ふふふ……。わかっているくせに。このコイン、あげとくわ」
瞳が異様にギラついている。

⇩ 24 へ

157

男たちは六人いた。皆灰色の服を着ている。その中の一人が銀色に輝く棒を取り出し、くまなく辺りに向けていたが、大きく頷くと皆奇妙なマスクを脱ぎ始めた。
マスクを取った顔は汗で光っていた。体格はよかったが顔は皆童顔だ。十五歳前後だろうか。こちらをじっと見つめる連中に俺も負けずに睨み返してやる。一人一人の顔に視線を移していくと、少女の姿が目に入った。
「私が首領のゼノビル。覚えておいて損はないと思うわ」
「ゼノビルだって？」
「ゼノビルってのが私のママ。時空の歪みでこの世に来てしまったんだけど、もうママはこの世にはいないわ。」
「ところでここは一体？」
「二一一二年よ」
「……!!」

⇩ 230 へ



158

自分の取った選択を少々後悔した。沼地は思ったよりも泥が深く堆積し、足が取られて思うように動きがとれない。

⇩ 209 へ

159

二人は翌日バラディンの街に辿り着いた。賑やかな通りには市が立ち並び、行き交う人々でごった返している。神々の国と言うよりもここはただの栄えている街にしか映らない。買い物をする中年夫人は着ているものは毛皮一枚といった大昔のものだが、驚いたことに俺が元いた世界から持ってきた貨幣と同じ物が使われている。宿に着いて二人は久しぶりの安息を得る。

⇩ 272 へ

160

ロック・シンガーの彼女は、麻薬密売に手を染めていたというのだった。俺も小さい頃からシハナウデツリの葉やヅエフイタエルイの実は絶対に食べてはいけないと大人からきつく教えられたものだった。でも罰せられはしなかったのだが……。

「わたしがこんなになっちゃったのも、みんなあのせい……。エイリアン、あいつさえ来襲してこなかったら……」

「じゃあここにもエイリアンたちが……」

「そうよ。わたしの両親も弟も……」
「そう……。でもどこから」
「学者センセの話だと、最近過去の出来事がいきなり現在に降って湧いたりしているんだって言ってたわ。難しいのでよくわからないんだけど、時空が歪(ゆが)んで起きる現象だとか……」
「その時空の歪みによって、過去のエイリアンが襲って来たというわけか」
「そうね……。連中が現れる時は空一面が光り……」
「空一面が光り？　俺が『天界の扉』を通じてやって来た時と同じではないか——」
「ねえカルル、わたしとあなた、これからも一緒にいようね」
ナンシーは耳元でそっと囁(ささや)く。

※所持品について

●ロザリオを所持している。…………………… ⇩8へ

●ロザリオを所持していない。………………… ⇩61へ

161

両方から腕を取られた彼女はなおも必死に抵抗している。よっぽどでたらめな連中なのだろう。こいつらは彼女を一体どうしようというんだ。助けてもらったお礼もまだしていない。これが俺流のせめてものお礼だ。

「ナンシーを放せ！」
二人の男に後ろから組みついていく。格闘なら少々自信がある。
「よさないか。公務執行妨害になるぞ」
「何わけのわからない事ぬかしやがる！」
小柄な方をまず脚で蹴り上げ、大地にはいつくばらせる。二人目も……。

⇩ 138 へ

162

海賊船は五日後、とある港に着いた。世界中が過去の恐竜やモンスターに荒らし回されているとあってどこの都市もさびれる一方だったが、この港町はゼノビルが率いるグループにより繁栄していた。エイリアンやモンスターが来襲しても精鋭軍団の火炎銃攻撃でたちどころに撃退してしまうのだ。
ゼノビルと俺は不思議な因縁で結ばれたのか、どこか心を許しあうようなところがあり、買い物すら一緒だった。

⇩ 262 へ

163

光の中に入り込んだ瞬間、気を失った。どれだけたっただろうか。意識を取り戻した俺の目に映ったのは一面に広がる緑の畑だった。

⇩ 29 へ

164

廃墟のなかにたたずむ俺に風が冷たく突き刺す。ドワーフのなかでも戦闘嫌いの連中は農奴として農地耕作に従事しているのだが、その連中さえ今は見当たらない。老オーギュストの下僕だった他のドワーフたちも見当たらない。

しばしの休憩に喜んでいた愛馬に再び鞭(むち)をいれ、連中の姿をこの目で確認するために走る。身長一メートル足らずのホビットたちが生息する森に入り込む。俺たちドワーフ族と異なる点はその外見に似合わぬひ弱な体力である。だが弱者には弱者なりにそれを補うものがあるもので、草原を走るしま馬のように敵の動きを敏感に察知する能力がある。

洞窟からこわごわ顔を出した一人の若い男のホビットに、

「オーギュスト侯の配下の者たちはどこにいるかわかるか!?」と尋ねる。

「あんたは……？」

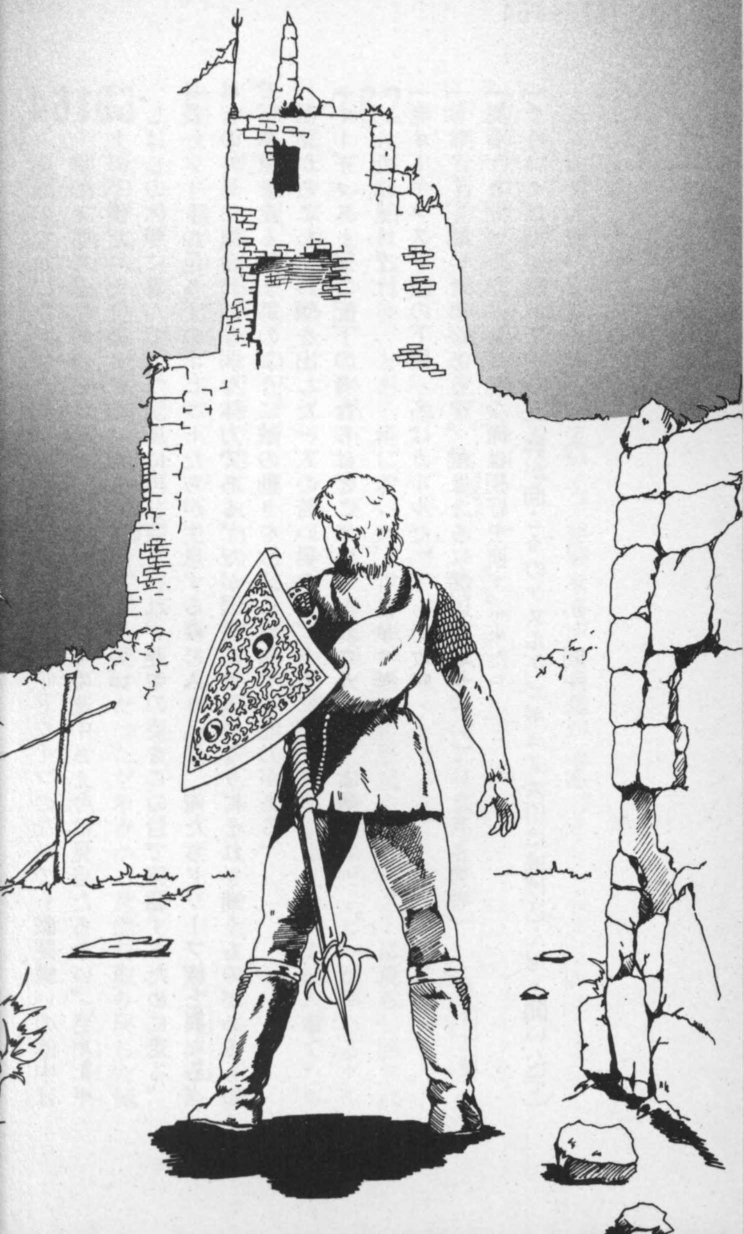
「老オーギュスト侯の下僕、名はカルルだ」

「おお……、聞いた事があるぞ。侯とともに諸国を巡り歩いていた若き勇者」

「勇者」と聞いただけた単純な俺は相好(そうごう)を崩す。

「そういえば城が焼けてから、一群が向こうのケスルチビギュヌス川に逃げ込んだと聞いたぞ」

「ケスルチビギュヌス川に？」



脳裏に昔の幼なじみの顔が浮かんでは消える。俺を叱りかわいがってくれたテルミヌス老人。川岸まで馬を飛ばす。頼む、誰か一人でもいいから生きていてくれ。あの城に屍をさらしていた鼠のような運命が俺の愛する人々に降りかかっているのだろうか。不安な心を抱いたまま川に近づくと、ボロをまとった髭だらけのドワーフたちが川で網を投げ、魚を捕っている。川岸には疲れきった表情の老人が川の流れをぼんやりとみつめている。懐しい顔だ。あれは確かにテルミヌス老人だ。

⇩ 226 へ

165

「せっかくの仕事を……」

いまいましそうに舌打ちした影の人物は、身をかわして窓の外へ消えていく。もたもたしていた俺に口々に怒りの声を発した家来どもが槍や斧を叩き込んでくる。

身の軽さだけが取り柄の俺は、すんでのところで攻撃をかわし、部屋の中を逃げ回る。

「こいつを捕らえろ！　絶対に逃がすな！　最悪の場合は殺しても構わん！」

眠りを妨げられた領主は赤い眼を吊り上げ、家来たちに命じる。冗談じゃない。こんな所でくたばってたまるか。

俺は影の人物と同様、窓から逃げようとするが、間一髪のところで後ろから襟首をつかまれ、強引に後ろへ引き戻される。

⇩ 202 へ

166

ロード・ブリティッシュの元へと長い旅は続いた。沖からロード・ブリティッシュの領地へ向かう船に乗り込み、ようやく目的地へ辿(たど)り着いた。

城下町はこれまで見た事もないほど大きなものだった。俺のいた城など比較にならない。城は天まで届くかと思われるほどの高さを誇り、その領土では活気溢(あふ)れる商いが行われている。

よし、このままロード・ブリティッシュの元へ行き、直訴してみよう。

⇩ 65 へ

167

街道は古くからあるものだった。行き交う人々の姿も見えない。

俺は西へと飛んで行く。

⇩ 246 へ

168

ドワーフ族最高の儀礼である剣を高くふりかざす剣上礼をもって俺は古老に答え、古巣の古城へと戻って行った。

⇩ 67 へ

169

すみかだった洞窟を出てから一週間が過ぎた。だが肝心のジグムント老人の姿は見えない。道行く人々にジグムントの事を尋ねる。だが彼を知る者はいない。諦めかけていた俺は、老木の根元へ腰を下ろし、これからの行く当てを考えていた。

⇩ 55 へ

170

山々に霧が立ち込めてきた。行く手に大きな谷間がうっすらとその姿を見せ始めている。何か起こりそうな、そんな第六感が体を走る。胸が苦しくなるようなそんな前兆だ。

「おにいちゃん、あれ、何!?」

視界に雲がかかったかと思うと急に日が差し込む。そして徐々に上から灰色のカーテンのような途方もなく大きな煙がうねうねと降りて来る。

「このまま行ってみよう。向こうに行けばどうにかなる」

「だめよ、きっと牧神がいかってらっしゃるんだわ！」

「構うもんか、さあ」

「駄目、行っちゃあ」

●エルマの言う通り、**事の成り行きを見守っていた方がよさそうだ** ……………⇩ 239へ

●エルマはそう言っているが、**俺は無視して進んで行く** ……………………⇩ 31へ

171

「た、助けて……」

隅で女の小さな声が聞こえる。振り返ると茶色の長い髪を振り乱した細い体の女が、俺の方を見て酸素不足の魚のように口を開けている。

「ここから…出して…。お願い…」
ほとんど裸に近い格好のその女は見たところまだ若そうだ。俺と同じくらいだろうか。闇の中に少女の白いふとももが浮かび上がり、俺を慌てさせる。
とにかくこの子の縄をほどいてやらなくては。ギルクリストが帰って来る間に……。
「私だけでなくみんなも……」
彼女の懇願に俺は周りの連中を見渡す。二十人はいるだろう。

●かわいそうだが少女だけを連れて逃げ出す ……………………⇩ 47へ

●少女とともにみんなの縄をほどき、呪われた小屋から逃げ出す。 …………⇩ 192へ

172

誘われるままに謎の女の後をついて行く。黒いレザーに包まれた体は、立派な大人の女のものだった。大きすぎるほど発達した乳房は泥棒稼業の際、邪魔になるだけだろうが、じっくりと鑑賞する分には最高だ。雲に隠れた月が顔を出すと、女の全身がよくわかってくる。黒く長い髪が風になびき、ほのかな大人の女の香りがする。
「十五だって？　生きていればうちの弟と同じ年頃ね……」
「あんたは俺と同様の泥棒稼業らしいね。名前は？」
「名前？　勝手に仲間はわたしのことをゼノビル（XENOVILLE）と呼んでいるけど」



「ゼノビルだって？　男みたいな名前じゃないか」
「笑わないで」
「この商売、女じゃ無理だよ。」
「ふふふ……。そのわたしに、のこのこついて来たのはどこのどいつよ」
「……！」
「まあ一人であの宿に乗り込んできたのはいい度胸していたと褒めておくわ。それであんたをここまで連れ出したのよ」
不思議な女だ。

⇩ 248 へ

173

馬はもういなかった。長い旅で金が尽きたためにとうの昔に売り払ったのだ。
朝日に身が洗われるようだ。侯の魂もこの光となって世界を照らしている。そういえばなぜか老オーギュストの古城が朝の光に映し出される姿を見るたびに心が落ち着くのだ。
老オーギュストが何故長い旅にでたのか、今こうして考えてみても理由が思い浮かばない。侯の残した遺品が羊の革袋の中で鳴っている。俺はゆっくりと足を運びながら侯の遺品を手に取ってみる。侯がいつも書き綴っていた備忘録があった。かすれた文字で書かれた文章が目にとまった。

⇩ 195 へ

174

セリが終わった。少女は脂ぎった顔の人買い商人に引っ張られて行った。
俺は街はずれの門のそばに隠れ、人買い商人が来るのを待った。しばらくすると好色そうな顔をした商人と、紐で縛られた少女がやって来る。
そこへそっと歩みより、俺は男の懐に手を入れ、瞬時に財布を抜き取った。商人は気がついていない。俺は財布を手に取り、
「これはおたくのかい？」と大声を上げる。
「き、貴様！　この泥棒野郎！」
人買い商人は彼女を繋ぎとめていた紐を放し、追い掛けて来る。その間、ゲルトルードが少女を連れてその場を去って行く。気がついた人買い商人は狂い死にしそうな顔をしながら辺りをはいつくばっている。

⇩ 60へ

175

ステーキを食う俺を先程からナンシーはじっと見ている。
「カルルって、タフなのね。坊やみたいなふりして……」
瞳が濡れている。これが女の誘惑というやつなのか。
「あとでわたしのいる部屋へ来て」

耳元で湿った声が聞こえる。

⇩ 123 へ

176

後ろからも火の手が上がり、何人かが炎に包まれて炭化していく。俺の背中にも火がつくが甲板を転がりながらなんとか消し止めるが、横にいた男は全身を炎に巻かれ、獣のように叫びを上げながら全身を硬直させていく。辛うじて肌の残った顔の上半分を覗くと先のジョーだという事がわかり、俺は声にならない叫びを上げる。

●一体何があったのだろうか。殺される事を覚悟しつつ俺は、**目の前に起こっている出来事の推移を見ている**…………⇩ 38 へ

●ジョーに助けてもらったその礼さえまだしていなかった。ジョーの弔い合戦をしてやる。**捨てられた武器を拾い、参戦していく**…………⇩ 286 へ

●とにかくここは危険だ。**下の船倉に身を隠す**…………⇩ 146 へ

177

「本当にあなた、知らなかったの？　嘘ついちゃ駄目よ」

ゼノビルは俺の目をじっと見つめる。

●**俺はたまらず本当の事を言ってしまう**…………⇩ 85 へ

●俺は「本当に知らないんだ」と**平気で嘘をつきとおす**…………⇩ 53 へ

178

「カルル……。問題は解けずとも……。おまえにはまだ道が残されている。ところで、部屋に入る際、おまえはノックしたか？」

●ノックした……………………⇩258へ

●ノックしない……………………⇩12へ

179

「ミナクスはどこにいる!?」

雪男スエヴァウエをひっつかまえ、剣を喉元（のどもと）に突き付け尋問する。

「シ、シラナイシラナイ……。シウシエリュイオソ……ンジ。ホントヨホント。ツクツイルイヲッカ」

平然としらをきる雪男の喉に魔統剣を深々と突き刺す。大量の血が勢いよく噴出し、辺りを赤く染め上げる。逃げようとする他の雪男を捕え、再び詰問する。

「さあ、見ただろう。本当の事言わないと」

「ワカッタワカッタ。チャセクグハフダ」

ミナクスはこの地より十キロ程離れたチグサデギュ山の氷穴に眠っているというのか。

「ありがとうよ。これは礼だ」

安堵（あんど）のため息を吐く雪男の後ろから魔統剣を柄まで首に突き刺し、礼をした。⇩254へ

180

ロード・ブリティッシュはどうやら俺の連れのゼノビルに気がいっているようである。

「して何を言いに来たのじゃ」

「はい。わたしどもはいつもロード・ブリティッシュ様の善政に心から感謝している一庶民でございます。これだけ繁栄した城下町、そして平和な生活……」

ロード・ブリティッシュはゼノビルのお世辞にもっともらしく頷(うなず)いている。

「本日はロード・ブリティッシュ様に心ばかりの献上品をお持ちいたしました」

「おお、そうかそうか。ご苦労なことじゃ」

献上品といってもゼノビルが船の中でしこたま頂戴(ちょうだい)した金銀だ。

「この者たちの持ってきた品を宝物殿に納めておけ」と配下の者に命じる。

「あの…、ロード・ブリティッシュ様、イスタンブール産の壊れやすいガラスの鳳凰鳥が含まれていますので、これは丁寧に運び込みませんと……。できる事ならわたしたちが責任を持って運びたいのですが」

「宝物殿は滅多な事では他人を入らせないんじゃ」

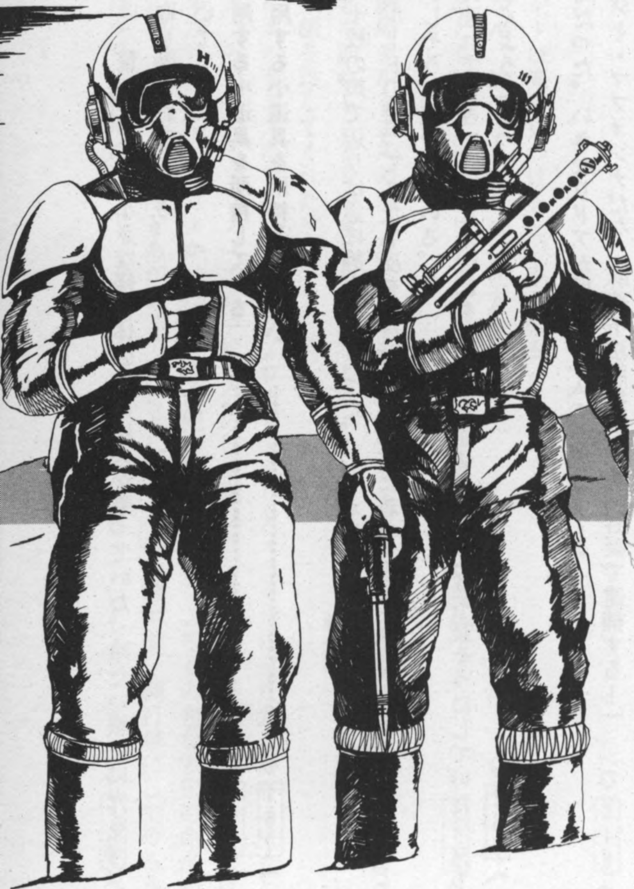
「……。それほど大事な宝物があるんですか？」

「ああ」

⇩ 247 へ

181

俺を捕えに来たのか⁉　神々の国ではなくここはどうやら悪魔に占領された死の国のようだ。砂丘を走り逃げようとするが、空腹と疲労で砂に空しくめりこむだけで、なかな



か前へ進まない。驚いたことに小さな怪物体の中には人が乗っていた。冷たい銀色に光る服を着た男たちに取り囲まれてしまう。

※所持品について

●泥棒に使用する小道具を所持している……⇩118へ

●泥棒に使用する小道具を所持していない……⇩157へ

182

金貨四十枚の声で辺りは急に静まりかえった。いちかばちかの博打(ばくち)に勝ったのだった。ゲルトルードの持ってきた毛皮を一枚買い、彼女に着せ、宿に連れて行く。周りの男どもはうらやましそうに俺を見ている。

少女を宿に連れて行き、からだの汚れを洗い落とさせる。最初は不安そうにしていた少女も徐々に口をきくようになった。

⇩266へ

183

その時だった。いきなりドアが開かれ二人の男が乱入してくる。

「ナンシー・マフォンナだな。麻薬不法所持及び密売容疑で逮捕する！」

男は部屋のあちらこちらを捜索している。慌(あわ)てて下着をはくが足がもつれて床にへたりこむ。

「とにかく署の方まで来てもらおうか」

もたもた服を着ているうちに、ナンシーは外へ連れ出される。
ホテルの人間に尋ねたら、「警察に連行された」と言う。
「ケイサツ？」

⇩ 218 へ

184

ナンシーは俺を見つけると、手を振る。
「カルル、逃げよう。今夜は仕方ないわ」
俺は一行とともにホテル・カリフォルニアという豪華な建物に向かう。

⇩ 119 へ

185

俺は結局テルミヌスの言ったように「王の中の王」と呼ばれるロード・ブリティッシュのもとを訪れることを決意した。老オーギュストも生前よく俺にロード・ブリティッシュの偉大な業績を話してくれた。
翌朝、俺はテルミヌスたちに別れを告げ、ロード・ブリティッシュに巡り会うために旅立って行った。きっとロード・ブリティッシュは自分のいや領民の苦況を救ってくれる。今まではただ自分の事だけ考えていればよかったが、今は俺の両肩には千、二千もの善なる民の命がかかっているのだ。もしまた悪魔どもが襲ってきたとしても、必ず連中を一網打尽にしてやろう。
今はまだ名ばかりの将軍だが……。

⇩ 166 へ

186

彼女と別れた俺はちんけな商売（つまりは小銭を狙った泥棒稼業だ）をしながら旅を続ける。ある日ふと旅人の噂話を聞いた。その旅人の噂話とは――何でもある地方の山深い谷間に一年に一度黄金が眠る『黄金郷』に通じる入り口が闇の彼方から現れるのだという。その黄金は〝あふれかえるほどの〟量だという。

そしてちょっと気になったのはその『黄金郷』に通じる入り口を『天界の扉』とかいう。よし、まずは『天界の扉』とやらを探しに出よう。ロード・ブリティッシュの財宝を諦めた俺はこのチャンスに飛びついた。『天界の扉』を見つければ財宝が手に入る。俺は途方もないものに巡り会えるに違いない。今度こそ、一人前の大泥棒になれるチャンスだ。自分一人の力で必ずやり遂げてみせる。

⇩ 145 へ

187

ロード・ブリティッシュは尊大な視線をこちらに投げつけたまま沈黙している。

「ロード・ブリティッシュ様、私は老オーギュスト侯より家督及び領地を治めるように申し渡されたカルルと申す者です。本日はロード・ブリティッシュ様に、私のこれからの」

俺の言葉を遮る（さえぎ）るようにロード・ブリティッシュは、

「家督相続など勝手にやれ。それよりも立派な戦士として生きて行くには常に戦いを忘れてはならんぞ」

186〜187

「はい」
「よしよし。そのおまえにちょうどうってつけの仕事がある。わしの領土にしばしば現れるモンスターどもがおってな。こいつらが作物を荒らし、最近では人間まで食ってしまう。こいつらをなんとか皆殺しにせんとこの地の戦士たちは懸命に戦っておるのじゃ」
「モンスターは皆手強い。連中を倒す方法は天界へ旅立ち、倒す方法を会得しなければ……」
「天界!?」
「知っておるのか?」
「ええ。名前だけは」
「もうすぐその天界へと通ずる扉がこの城の向こうの森に出現する。年に一回、今まで十数名の戦士が扉の向こうへと向かって行ったが……」
「行方知れずなんですね」
「そうじゃ。どうだ、おぬし、扉の向こうへ行って見る勇気は……」
いささか不安だったが、戦士が嘗められては話にならない。
「その森はどこにあるんですか?」
森が俺の最期の地となるかもしれない。

⇩ 256へ



188

高名な占い師にみてもらおうと言う客でいつも長い行列ができていた。俺はその列に加わり、九時間もの間待たされる。ようやく自分の番になった。汚れた布を上に広げただけの粗末な造りの中にその占い師がいた。どうやら老婆のようだ。ロウソクと水晶玉が老婆の座る前のテーブルにちょこんと置かれている。老婆の勧めに従い、今にも壊れそうな椅子に腰掛ける。

⇩284へ



189

と、その時、エスメラルダが転がるように俺の体の上に身を置き、「この子を殺さないで！」と叫ぶ。
アルディーアたちは諦めたのか、これ以上事を荒立てるのを好まなかったのか、とにかくこの場を去って行った。
た、助かった……。

⇩ 224 へ

190

影の物体の正体は一体何か？　ひょっとしたら俺と同業のホビットかもしれない。同病相憐れむじゃないが、俺はそのまま相手を見ていた。すると影はゆっくりと窓を指す。外へ出ろという意味か。正体不明のその人物の方がが俺より格が上のように思える。ここは奴の忠告に従ったほうが良さそうだ。足音をたてないように俺は外に飛び出す。全身黒装束の人物は外の闇の中だとますます見えづらい。

⇩ 252 へ

191

ナンシーの案内で俺は老人のいる部屋に入る。老人は部屋の奥で小柄な体を安楽椅子に埋め、こちらを見ていた。部屋の隅っこから動こうともしないこの不思議な老人を、俺は「隅の老人」と勝手に名付けた。

⇩ 97 へ

192

少女の哀願に、俺は懐から短剣を取り出し、他の因われ人の縄を切っていく。

「さあ、急いで！」

よろけながら一斉に走り出す。

「ギルグリストだわ！」

手下が四人追いかけてくる。

●俺は懐から再び短剣を取り出し、連中に向かって行く……⇩23へ

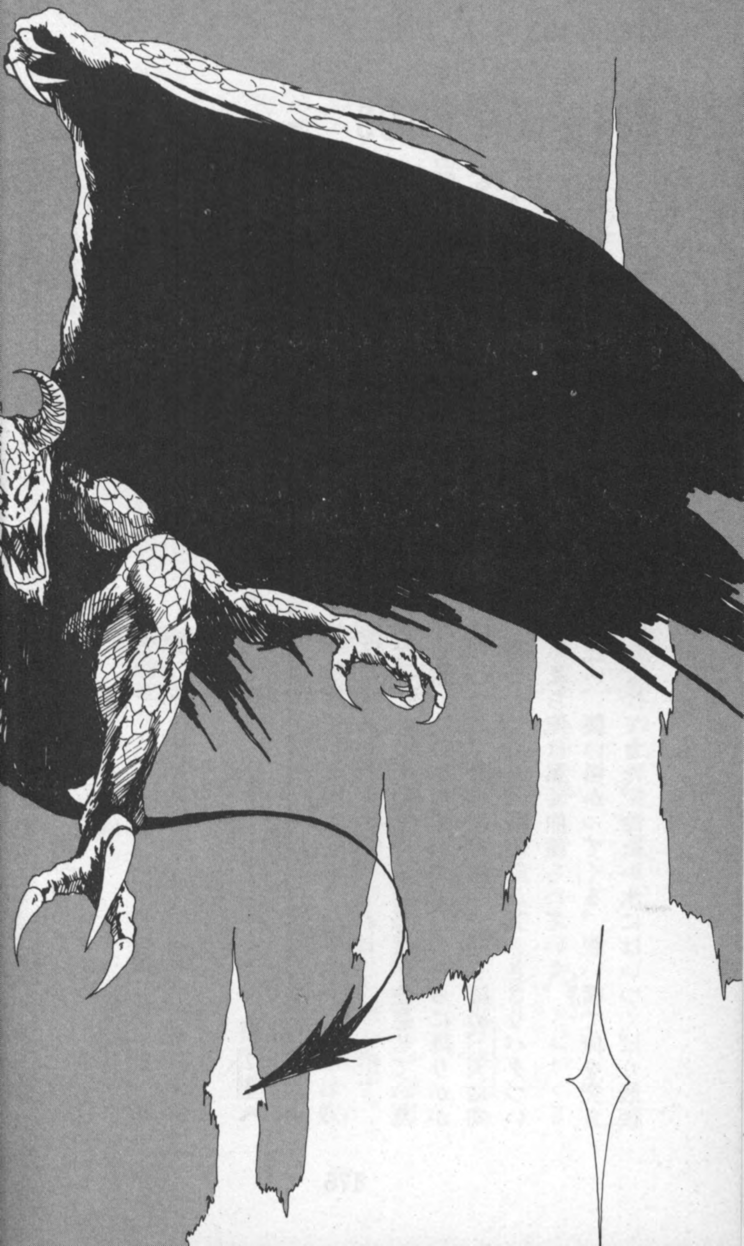
●沼の方向へと逃げて行く……⇩158へ

193

白い斜面を大きな影が覆う。低く唸る声。ミナクスか⁉　いや、これは……

大きな羽を広げたこうもりのような化け物だ。こいつも地上にまだ恐竜が生息していた頃に活動していた極めて狂暴な獣バルロンだ。赤く開いた口から牙が伸び、こちらに降りかかってくる。奴のはばたきで吹雪が起こり目が開けられない。魔統剣を両手で握り締め、天に向けて待つ。体全体に衝撃波が走り、異様な叫びが聞こえてくる。魔統剣が突きささりバタついているバルロンからおびただしい黒血が流れ、たちまち俺は黒く血塗られていく。

くたばったと思ったバルロンは先程よりも猛り狂い、襲い掛かってくる。鋭い嘴で俺を突き刺そうとし続ける。逃げ続けるがもう体力が限界になってきた。冷たい氷にはいつくばり最後



の抵抗をしようとするが、俺にはもう力が……。
目の前に狂ったバルロンがやって来る。
俺はふと、懐(ふところ)の懐しい品に手を触れた。これが御守りであれば助かるかもしれない。



●オカリナを取り出して、吹く……⇩285へ
●ロザリオを取り出し、天にかざす……⇩68へ
●魔統剣をバルロンの目に投げつける……⇩201へ
●コインを投げる……⇩149へ

194

深夜の地下鉄は人がまばらだ。長い長い、とてつもなく長い夢をみていた俺は隣の中年夫人の肩にもたれていたらしく、迷惑顔のおばさんが肩を上下にゆさぶっているのに気がつき、目を開ける。

「オーゴッド!」

大げさにおどけてみせ、ばばあの機嫌を悪くさせてやる。神よ。もしあんたがいるのなら、明日の売り上げは三十ドルを超えているはずだぜ。今夜は夢ん中で十年分も仕事をしてしまったようで……。神よ、願わくは——明日の売り上げを……。

END

195

老オーギュストは昔から古書収集が唯一の趣味だった。ヨーロッパ各地の伝承やら民俗やら戦話やら、いつも虫の食った古書をひっくり返し探究していた。この備忘録にもそんな古書から書き記したものが散乱していた。その古臭い記述の中でもよく出てくる文句が俺

の気を引いた。

『天界の扉』

「老オーギュストは、この『天界の扉』をやけに調べていたようだな……」

侯の綴った文章のなかに、〃天界の扉を探し求める旅〃という記述がある。

老オーギュストはこの『天界の扉』の謎を解き明かすために長い旅に出たのか。

⇩ 57 へ



196

意外にもそれは子供だ。緑色の可愛い狩猟服、片手には弓を持ち、か細い腰には体ほどもあろうかと思われる大きな剣をぶらさげて膨れ面をしながらこちらへやって来る。

「駄目じゃないの。ウバンチウレチグアが逃げちゃったじゃないのさ」
少年と思ったがどうやら十二歳くらいの少女のようだ。ショートカットがよく似合うりんごのような少女である。
「ごめんよ。まさか女の子がいたとは……」
「こっちは真剣なのよ。今日の食事にありつけるかどうか……」
「きみは猟師なのかい？」
「そう、パパもママもいないから自給自足の生活よ。おにいちゃんみたいにのんきじゃないのよ」
おちゃめな少女の出現で俺の心に忘れかけていた優しさが再び舞い戻ってきたようだ。彼女に持ち合わせのパンとミルクを与える。

⇩ 103 へ

197

「ああ、あの……、さっき二人の男が女の人を連れて出て行きませんでしたか？」
「はい、誠に遺憾なことながらあのお客様は麻薬を所持していましたので警察によって逮捕……」
「ケイサツ？」

●この男にナンシーが連れ去られた所を教えてもらい、**彼女を救いに行く。**それが俺の恩返しだ …………⇩218へ

●「もっと詳しく教えてくれないか。彼女は何をしたというんだ。ケイサツってどんな所なんだい？」

老人にいろいろ質問してみる …………⇩87へ

198

ナンシーは残念そうな顔をしたが、「それじゃあ、気が向いたら来てね」と耳元で囁いて、頬に唇をつけた。

赤くなった俺は、キャディラックと名乗る怪物から飛び出し、街に降り立った。

人の行き交う通りを歩いていると、誰かが後ろから肩を叩く。

⇩73へ

199

俺は自分の取った選択に少々後悔した。短剣をふりかざし、怒り狂った追っ手にぶつかって行く。

⇩209へ

200

ロケット発射場は砂漠の中央にあった。

巡回ロケットは宇宙旅行に行く団体客専用の乗り物だったが、今ではミナクスの仕業に



よって現れるモンスターたちの出現により危険が生じたため、客が大幅に減少している。
「巡回ロケット・スペースキャスト一一二便、発射」

⇩ 14 へ

201

目に当たった魔統剣は跳ね返され、俺の前に空しく落下した。俺はたちまちバルロンの鋭い嘴(くちばし)に体ごとくわえられ、氷壁に叩きつけられる。魔統剣も効き目がなかったか。まさかミナクスのいる南極が俺の死に場所になるとは……。

DEAD END

202

「貴様、よくもわしの眠りを邪魔してくれたな。目当ては財宝か？」
領主は家来たちにからだを床に押さえつけられた俺を憎々しげに見下ろし、
「こういう不埒(ふらち)なホビットは即刻死刑にしろ」
と家来に命じる。

⇩ 120 へ

203

いきなり襲ってきた恐怖に体がいう事をきかない。狂ったように両膝が笑う。
エクトゥスがデビルたちを誘い込んだ方向から目も眩(くら)む閃光(せんこう)と怒声が入り乱れる。……
エクトゥスは神に仕える者として最も尊い献身の行為を行い、俺を窮地から救おうとしている。
森から閃光と怒声が消えた。

⇩ 49 へ

204

ロード・ブリティッシュの城が見えてきた。天まで届きそうな塔が立ち、領土では活気溢(あふ)れる商いが行われている。
「そう。ロード・ブリティッシュの財宝はあの城の中にあるのよ。また弱気が出てきたの？」
「いや……」
「虎穴に入らずんば虎児をなんとかよ。さあ、ロード・ブリティッシュに会いに行きましょ」
ゼノビルの度胸の良さにまた感心してしまう。

⇩ 65 へ

205

みんなまだ若そうだ。中でも首領格の少女は十五歳前後であろう。見つめる俺を冷たく見下ろす少女は、俺を黒い怪物の方へ連れて行くように部下に命じた。

⇩ 230 へ

206

俺は信じてもらえないかもしれないが、『天界の扉』を通じてこの地にやって来た事実を語った。ナンシーはその扉が今も起こる謎の現象の一つではないか、と推測する。
「学者からは相手にされてないけど、あなたの『天界の扉』についてよく似た話をしているじいさんがホテル・カリフォルニアにいるわ」
「駄目！　行っちゃあ。そしたらまたあなた、前にいた世界へ……」

●懸命になって彼女を抱き締め、納得させる……………⇩217へ
●ナンシーの姿も見ずに、去って行く……………⇩45へ

207

俺は正直に身の上話をした。そして、神々の国が一体どこにあるのかを老女に尋ねてみた。今までの俺の波乱に富んだ日々が老女の心を打ったのか、元乳母(うば)は話が終わると、別人のように俺を遇してくれた。
「モルギアさん、どうなんですか、本当に、神々の国はこの世に存在するんですか!?」
必死になって問う俺に、老女は、
「扉があるとは以前からこの耳に入っていたが、詳しい事はよくわからない。しかし……おまえさんに一つだけ誓える自信があるのなら、ある出来事を教えてやってもいい」
「おう、なんでも言う事をきこうじゃないか」
「気に入ったよ。マチルダ様、こちらへ……」
モルギアはマチルダをそばに呼んで、意味ありげに笑った。

⇩84へ

208

ナンシーだ。男も女も皆立ち上がり、狂ったように手を叩く。ナンシーも何かを大きな声で歌っている。これはやはり神々の国に至る儀式なのだろう。右手を高く掲げ、拳(こぶし)を

振っている姿はまるで『世界の扉』が現われる際、人々が興奮している姿と瓜二つではないか。

⇩140へ

209

他の連中はちりぢりに逃げ去ろうとするが、沼地に足をとられ、パニックと化す……。少女の手を取り、沼から出ようとするが、追っ手の刀が振りかかる。短剣で必死にこれをかわすが、追っ手の一人が放つ矢が次々と飛来する。いつまでもかわすのは不可能だった。少女の背中に一本突きささり、悲しい悲鳴が上がる……。俺は彼女を救いだせなかった。そして俺の命さえも……。

DEAD END

210

世界が黄色く渦巻いていた――。

しばらくたつといくらか視野がくっきりとしてくる。砂塵が辺りに渦巻いていたためか。一面砂丘が広がり、遠くの世界を二分している。強風が雲を押しやり、次々に新しい雲が流れて行く。白から紫へと雲の色が変化していく。雲の流れて行く方向へと俺自身も流されて行く。自分のいる場所が一体どこなのか、果たしてここが神々の国なのか。俺の叫びに答えてくれる者は誰もいなかった。どれだけ歩いただろうか、砂に足をとられながら歩き続けると砂丘がなだらかになり潮の香りが鼻についた。海だ。砂丘と空と海と……。これ以外世界にはなかった。

⇩62へ

211

テルミドーラ寺院へと歩いて行く。行きはエクトゥスと一緒だったが、今は自分一人となってしまった。エクトゥスの遺品が麻袋の中でカチャカチャともの悲しく鳴っている。

何度も泣きそうになるのを堪え、ただひたすら歩いて行く。とある村に辿りついた時、黒い喪服を着た村人たちが長い行列を作り、葬儀を行っている。

「誰の葬儀なんですか？」

「ああ、この村の村長さんじゃよ。おめえさんもお別れの挨拶をしてくだされ」

広い墓地にはすでに人が入れる分の穴が掘ってあり、故人の生前の地位を偲ばせる豪壮な埋葬品が山と積まれていた。

⇩15へ

212

左のカードを選んだ俺は、フォルクスがじっとカードを透視しているのをかたずを飲んで見守る。やがてフォルクスはカードから目を離し、

「おぬしは『天界の扉』をくぐり、この世に真の幸福をもたらさなければならぬ」と告げる。

「その『天界の扉』は一体どこにあるんですか？」

「東へ行け。ずっと東へ……」

そう言うと老婆はふうっと深く息を吐くと椅子に座ったまま眠り込む。
「ばあちゃんはすぐ寝ちゃうんだから。これで当分起きないな」
少年がこぼす。
東へ行けば、『天界の扉』を探し求めているジグムントじいちゃんに会えるかもしれない。ようし、東へ行ってみよう。東へ……。

⇩ 256 へ

213

「おや？　カルル、あれはなんの音だ？」
「おれには何も聞こえやしないよ」
「いや、確かに聞こえる。嫌な音だ。百万匹のクマンバチが一どきに襲ってきたような」
「エクトゥスは目が見えない代わりに神様が常人の五十倍の聴覚を授けてくださった。だから俺には何も聞こえないよ……いや…な、何かそう言えば……うん？　ああ、あれは!?」
エクトゥスの嫌な予感は的中した。百万匹のクマンバチの音はデビル（小悪魔）たちだったのだ！　やつらは一匹の時は悪さをしないが、大群になった時は凄(すさ)まじい勢いで人間や家畜を襲うのだ。
「リュンエリエ、チュエ、アン、ン、エンケッゲッッグ」



デビルの奇声が発せられると、俺たち目掛けて襲いかかってくる。尻に付いた黒い毒針で俺を刺そうとするが、俺は麻袋を振り回しデビルどもを撃退する。デビルといっても小柄な連中なので一対一ならさほど怖くはないのだが、次から次へと襲いかかってくるデビルたちに俺は悲鳴をあげて林の中に逃げ込んでいく。

⇩ 72 へ

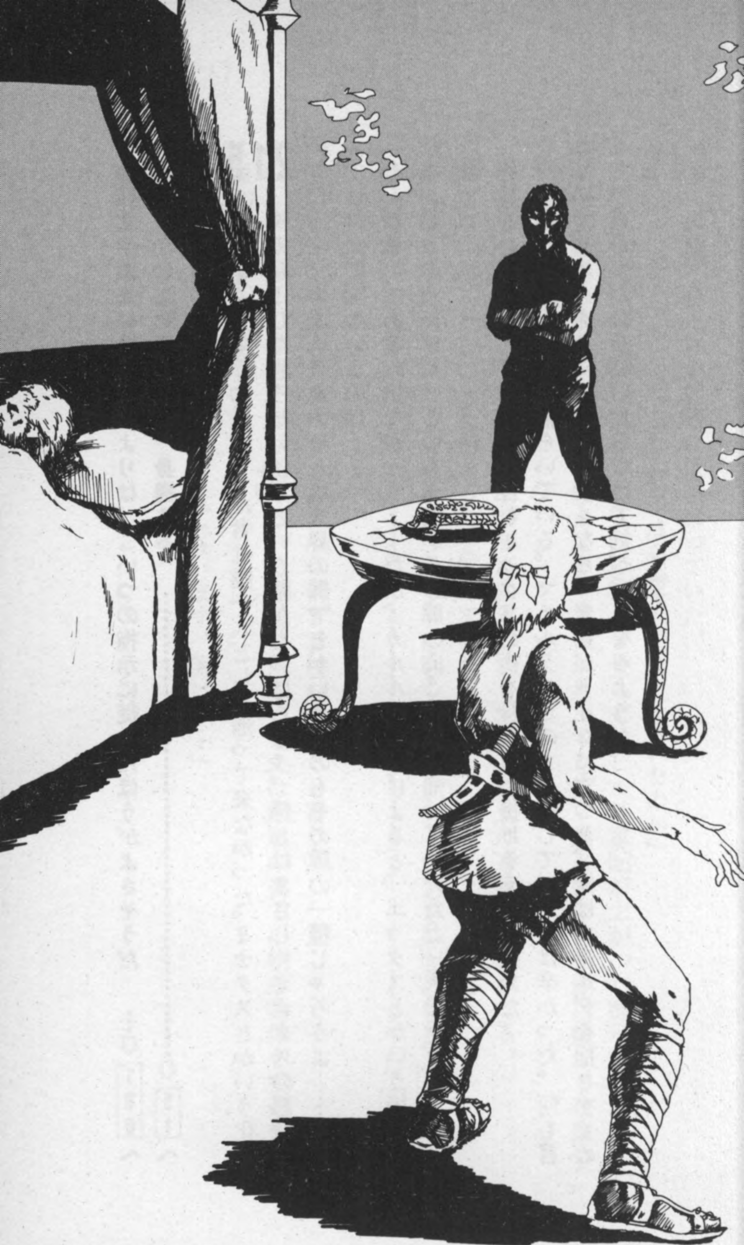
214

助かった……あいも変わらぬどじぶりに苦笑いしながら次の仕事に取りかかる。

部屋に人がいなかったのがせめてもの救いだった。俺は領主が宿泊していそうな部屋を一つ一つ探していく。

〝ロイヤル・ルーム〟と札のかかった部屋がある。中から大きないびきが聞こえてくるが、どうやらこの部屋が俺の仕事場のようだ。ドアの鍵をこじあけようとしたがどういうわけか鍵がかかっていない。というよりも壊れている。あまりにも簡単に侵入できたのがかえって不安だったが、領主が寝ているベッドの横にあるテーブルの上の小箱が目に入ると、そんな不安も吹き飛ぶ。小箱の中にはダイヤモンド、ルビー、サファイヤがぎっしり詰まっているはずだ。そしてベッドのあたりに無造作に置かれた大きな鞄(かばん)の中には札束が詰まっているに違いない。久しぶりに全身の毛が震え立つ。

と、その時だ。テーブルの脇に人影が……。むこうも俺をじっと見ている。そこで俺は……。



●領主や家来に騒がれるよりは、こいつの指示に従ったほうがよさそうだ……⇩190へ

●刃がかけた短刀を抜き、身構える……⇩51へ

215

「昔から扉の向こうへ行った者は誰一人として帰って来なかった。ミナクスとかいう化け物の起こした恐ろしい仕業(しわざ)という話がもっぱらじゃ。扉とはまさしくミナクスの悪魔の入り口……。おまえさんのいう『天界の扉』とかいうものもその扉の一種じゃろうよ……」

「では神々の国というのは……」

「そんなもの、あるわけなかろう……だが、カルル殿。噂によると、エックスとかいう街に住むクレリック・アントスという人物がその扉の向こうから帰って来たただ一人の生き証人という話」

俺はクレリック・アントスの住むエックスの街を探しに出掛ける支度を始めた。

緑の瞳が湖水のように揺らいでいる。マチルダをこのまま残していくのは辛かった。何も言わないマチルダを急に抱きしめたくなる。老婆がトイレに立つと、俺はマチルダを抱きすくめ、くちづけを交わした。いとおしさで気が遠くなるようだ。

⇩96へ

216

黒焦げの死体が甲板に散らばっていた。
「馬鹿なやつらよ。ゼノビルは必勝不敗なのを忘れたのか」
反乱軍の死体が甲板に集められている。どうやらゼノビルに軍配が上がった様子だ。
「不穏な動きくらい、スパイを使えばすぐ情報が入ってくる。誰もいない部屋目掛けて攻撃しても勝つわけがないだろう」
甲板をうろうろしていた俺はゼノビルに見つかり、吊るし上げを食うはめになる。
「カルル。あんたこの反乱があるのを知っていたの？」

● **「知るわけがないじゃないか」**……⇩ 177へ
● **「ああ、知っていたよ」**……⇩ 85へ

217

ナンシーはホテル・カリフォルニアまで付いて行くと言う。
ナンシーの案内で俺は老人のいる部屋に入る。老人は部屋の奥で小柄な身体を安楽椅子に埋め、こちらを見ていた。
「御老人、私はカルルと申す者でございます。実は……」
「わかっておる『天界の扉』じゃろう」

「知っていらっしゃるのですか!?」
部屋の隅っこから動こうともしないこの不思議な老人を、おれは「隅の老人」と勝手に名づけた。
「今世界で巻き起こっている不思議な現象も、この『天界の扉』がもたらしたものじゃ。カルルとやら。こんな詩を知っておるか？」

獅子が大暗空で勝利の咆哮を成した時
大魔王モンデインの唸りは止みぬ。
至福千年王国が続くやも
人心三たび狐盗の態に陥る時
天空に死の塵風が乱立す。
モンデインの悪心ミナクスに移り
下界は時と空間の錯綜に陥る。
西暦二一一二年ミナクスは
地上に腐醜と狂気を対峙させ
哮笑す。

ミナクスを討たぬ限り
地上は永久に大暗夜となりぬ。

「カルルよ。『天界の扉』とは時空をねじまげるある恐ろしい力の事じゃよ。そしてその扉をどこまでも追い求めようとする者は皆非業の最期を遂げた。過去のエイリアンがこの地上に復活したのも皆このせいじゃ。だが、この扉を自由に操る者、ミナクスというバケモノを退治した者こそ真の至福千年王国の主になれるという」
「扉を通じて何回でも行ってみせます。御老人、それで、今度はいつどこで扉が現れるんでしょう!?」
突如、大音響がして「隅の老人」が崩れ落ちた。エイリアンか!?

⇩ 83 へ

218

ケイサツという建物はホテルからさほど遠くない場所にあった。石の柱でできている入り口の付近には濃紺の服に濃紺の帽子を被った男が二人立ち、あたりを見回っている。ここはどうやら護衛兵たちの詰め所のようだ。堂々とそこから入りこんだ俺の周りに同じ濃紺服の中年ばばあが詰めより、詰問してくる。

俺はヒステリー声を無視し、ナンシーのいそうな部屋をかたっぱしから覗いて歩く。

⇩ 276 へ

219

「ここンテクケッジェ星にミナクスの怒りが振り掛かったのはつい最近の事。破壊の嵐が吹き荒れて地上はまだ熱を持ち、住めないでいる。地球もいずれそうなるじゃろう」

宮殿に案内された俺はそうクレリック・アントスに言われるのだった。アントスはこの地で宰相として人々に慕われていた。

「カルルよ、時を疾走る男よ。汝がミナクスを倒さぬ時、地球はもはやわがンテクケッジェ星と同じ運命を辿るのじゃ。ミナクスは今、地球の南端におる」

「南端？　それは……」

「南極じゃ。ミナクスの安静な眠りが時空の歪みを巻き起こしている。彼女の夢の中に現世の歪みが現出するのじゃ。地軸の南極の冷粛な地においてミナクスは眠り続け、悪夢を地上に巻き起こしている」

突然城が激しく揺れ、天から壊れていく……。

「おのれ！　ミナクスがまた……。カルルよ、ここは危険じゃ」

「アントス様！　ミナクスの弱点は!?」



大石が無慈悲にアントス宰相の体に降り掛かってくる。肉の潰れる音がして……。

⇩263へ

220

ところが、老オーギュストの領地から旅に出た俺のよく知る土地は、せいぜいその周辺だけだ。まして『道化の町』などという町は聞いた事すらない。まずはその町が一体どこにあるのかを尋ね歩かなければならなかった。

⇩91へ

221

「善人ぶりやがって!!」

いきなり拳が唸りをあげて飛んで来る。そのまま吹き飛ばされて気を失う。どのくらい経っただろうか、体中が鉛の風呂につかっているみたいだ。アメリアが必死に抱きかかえ、俺の名を呼んでいる。

地下鉄がスピードを上げているんだか下げているんだかわからなくなってきた。夢か。いや、いつかこれと同じような体験をしたような……いつかこんな経験をするとわかっていたような……。胸が苦しい。働きすぎか？　いやいや、さぼってばかりいるからな。となるとこの地下鉄が狂っているのか？　マリファナはここのところやっていないし、ＬＳＤとも違う。暗い地下道が果てしなく続く。前の車両が徐々に黒い闇の彼方に吸いこまれて行く。地下核実験のせ

いか？　俺自身の体も吸いこまれていくようだ。
「カルル……」
誰かが叫んだような気がする。遠くから人の声が湧いてくる。

⇩ 25 へ

222

「た、助けて！」
恥も外聞もなく、わめき、哀願する。
「戦いを放棄した男の最期は…死あるのみ」
「ひ、ひえっ！」
目の前に幾つもの剣先が迫る。外界がいきなり赤く見える。電流が走ったようなショックが体中を伝わる。
死ぬ時って案外あっけなく訪れるもんだ。
だんだん気が遠くなる。

DEAD END

223

俺は礼もそこそこにオリスカニーの家から再び旅に出て行った。
「カルル……。あんたどうしても『天界の扉』を見つけに行くのかい？」
「ああ、エスメラルダ。もう一度ここに戻って来られたらまた会おう」

悲しそうな目をしてエステラルダは頷いた。

⇩260へ

224

「よかった。あなた、大丈夫？」

「ああ、なんとかね」

恐怖が今になって全身に回って来た。体が小刻みに震えてならない。

「勇敢なのは立派だと思うわ。だけど勇敢だけじゃ、この世は生きて行けないものよ」

エスメラルダは俺の手を取り、オリスカニーの元へと再び案内して行く。

⇩113へ

225

旅の仕度を急いで整えるとジグムントの後を追って飛び出す。ここから一番近い町までならつい最近会得した「速歩浮遊の術」で十七キロを二十分で行けるだろう。村人たちに息をきらしながら、ジグムント老に似たエルフを見なかったか尋ねてまわる。

「街道を東へ向かったエルフがいたな」

「それらしきエルフの老人が西へ向かって行ったよ」

●街道を東へ向かう ……⇩95へ

●街道を西へ向かう ……⇩167へ

226

「テルミヌスさん！　覚えていますか？」
ミイラのような瞳が、大きく見開いた。
「そうですよ、老オーギュスト侯のお供で諸国へと旅立って行ったあのカルルです」
「ああ、生きとったか……。この乱世に、よくぞまあ……、わしはもうてっきり、おぬしはこの世にはいぬものと思っておったぞ」
「……。私はこの通りですが……。テルミヌスさん。……悲しい事を言わなければなりません」
「なんじゃ」
「オーギュスト侯はもうこの世の人では……」
「そうか……。仕方がないことじゃ。バルロンらにとって食われることなく、天寿をまっとうできたのだから」
「テルミヌスさん、なんですか、バルロンとは」
「……ツルカメツルカメ」
「城はそのバルロンたちにやられたのですね。テルミヌスさん！」
「隠しても無駄じゃろう。そうじゃ、バルロンをはじめとする悪魔の大群じゃよ。イナゴの大群が通った跡のようじゃった。襲った後には何も残らない。ここに逃げ込むのが精一杯じゃったよ」

⇩ 99 へ

227

長い旅が続く。かれこれ四カ月は彷徨(さまよ)い歩いただろうか。目指すリンダという街に辿(たど)りついた。

建物は一度も見た事のないような大きさを誇り、途切れることなく人々が行き交う。ボルクスなる人物について尋ね歩くがここでも人々は首を横に振るばかりだ。困り果てて寺院の石段に腰を下ろしていると、ボロをまとった子供が俺の袖を引っ張る。

⇩ 152 へ

228

ある日、ゼノビルが怒り狂って調理場にやって来た。

「誰だい!? このじゃがいもをむいたのは」

「お、俺だよ」

「この、ろくでなし!」

少女はいきなり手に持っていたコインを投げつける。床に散らばるコイン……。

「皮も満足にむけないで!」

「す、すいません」

少女が去ると、俺はすかさずコインを拾い集めてポケットに入れてしまう。

⇩ 52 へ

229

「俺は絶対に彼女を救うぞ」

●僧侶であることも忘れ、心に誓う…………⇩71へ
●泥棒であることも忘れ、心に誓う…………⇩174へ
●戦士の心に誓う…………⇩153へ
●魔法使いの俺は、強く心に誓う…………⇩153へ

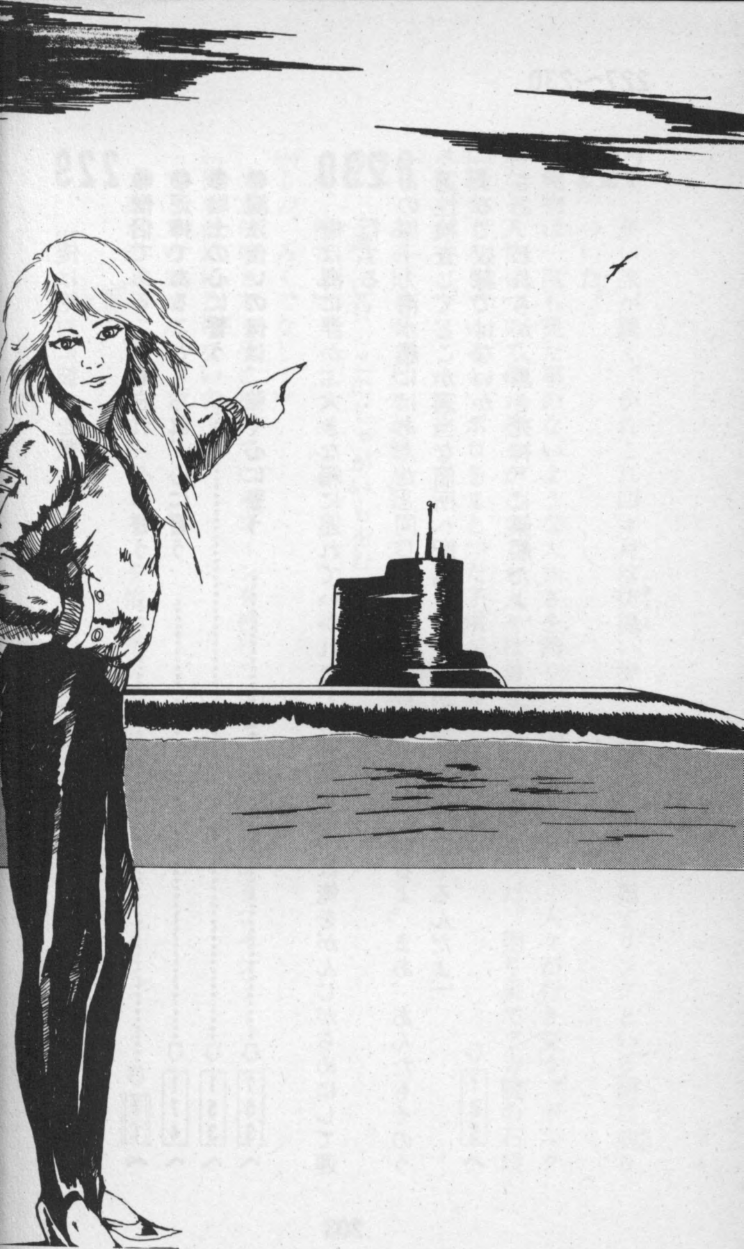
230

俺は海に浮かぶ大きな箱に連れていかれた。用心深い連中は俺をがんじがらめにして連行する。

「あの原子力潜水艦にはあんたと同じようなやつらがたくさんいるよ。まあ、あんたもそのうち適性検査してどこか適当な箇所へ配属してやるから。一生懸命やるんだよ」

まるで奴隷ではないか。

「さあ、われらが〈黒き死神〉に乗船だよ」



ゼノビルという少女が率いる奇妙な海賊集団に俺は連れられていく……。

⇩ 94 へ

231

俺の密告は小さな女王を怒り狂わせるのに十分だった。
「直ちに非常召集をかけるのよ！」

⇩ 43 へ

232

氷の柱を魔統剣でめった突きにする。
「出て来い！　ミナクス！」
氷の扉を次々開けていくが、中には誰もいない。そして不吉なミナクスの声だけが響く。
「フフハハフファハウハウハウア!!　おまえは次の部屋で私と会うよ。会えばおまえは死にたくなるほど後悔するだろうよ。フフサウサフファハウァサウオウハハウァ!!」
次の扉を蹴とばした。五人の女が氷のベッドの上で寝ている。

⇩ 270 へ

233

ロケットで脱出。なんとか難を逃れた俺は、厳寒の南極に不時着した。

宇宙服は耐寒用にできているので寒さはさほど気にはならない。いきなり白いカウイフエチェルヤスが牙を剝き出し襲い掛かって来るのにまず度肝を抜かれる。火炎銃で即席のバーベキューにしてやるが、あちこちからモンスターどもが襲い掛かってくる。二百匹以上は殺しただろうか、火炎銃の銃身が熱でアメのように垂れてくる。魔統剣を抜き、次から次へと襲って来る化物たちを殺していく。

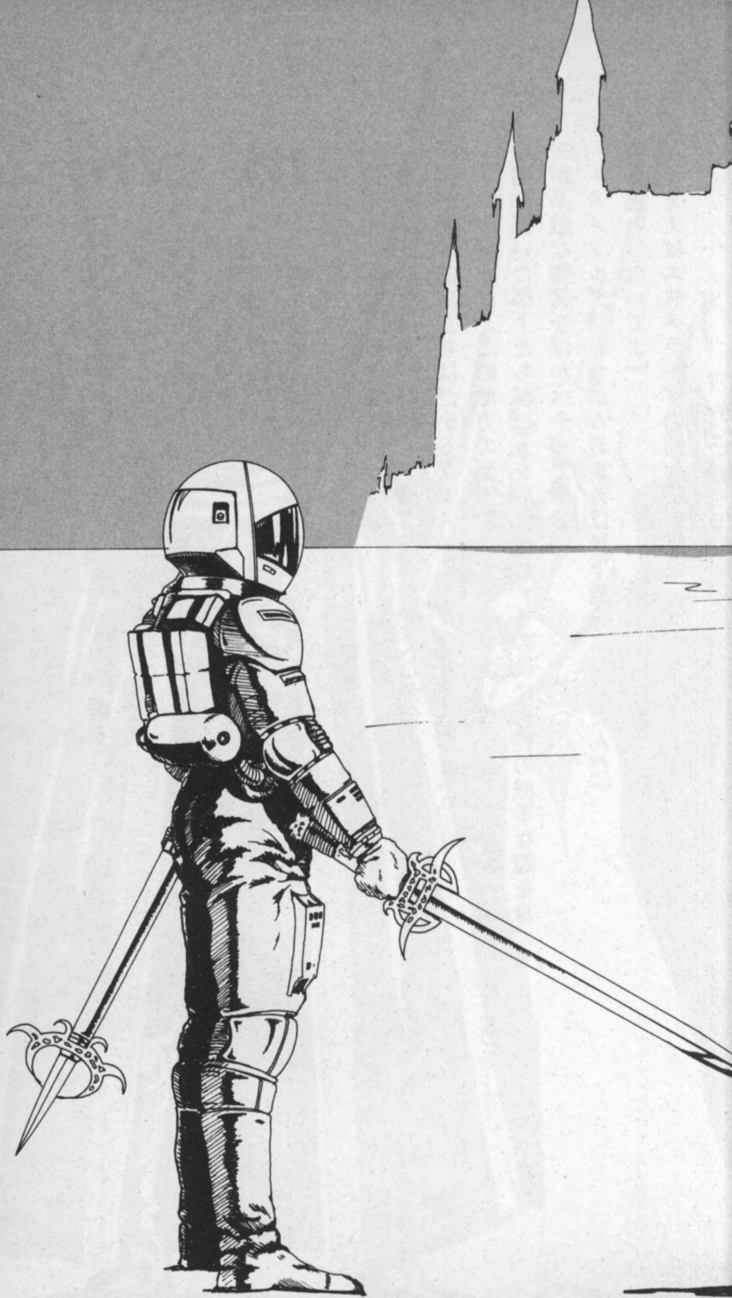
「ツンベアルエイチュリオチュチュレケ!!」

全身に毛が生えたイセウリオルイが俺の肩に食いついてくる。こいつは氷河期に生息していた獣ではないか。

ミナクスの悪夢はさらに古代に遡り、こんな獣まで呼んできてしまったのだ。

肉がちぎれそうだ。思わず悲鳴を上げそうになるが、剣でめった突きして取り除く。

⇩ 179 へ



234

「カルル！　君こそ私が長い間、探し続けてきた男だ。ＩＤブレスをやろう！」
「教授、アントスのいる惑星にいくには？」
「明日、巡回宇宙ロケット・スペースキャスト号が発射される。それに乗れ」

⇩ 269 へ

235

二人は店の外へ出る。
と、何か金属の触れ合う音がしてくる。この音は……。そうだ、身にまとう鎧と剣と盾が触れ合う音。
「待て！　エスメラルダ！」
完全武装した兵士が五名、そして彼らを従えた金色の鎧に身を包んだ若い騎士が一人。その騎士が俺の前に立ちはだかる。エスメラルダは俺の耳もとで、
「アルディーア。この地方の豪族の一人息子。あいつ、わたしを城へ連れて行こうと……」
剣を抜いた部下たちが二人を取り囲む。その後に金色の派手な鎧を身にまとったアルディーアが不敵な微笑を浮かべやって来る。
「エスメラルダ。いつからおまえは年下趣味になったんだ」
「勘違いしないでよ」
「おまえはエスメラルダの何なのだ？」



殺気だった部下たちが俺の周りを取り囲み、剣先を向ける。緊張のため俺の喉(のど)はカラカラで声も出ない。

●俺は覚悟を決め、エスメラルダを守るべく、魔統剣を抜く……⇩ 16 へ

●敵意を持っていない事を知ってもらうためにエスメラルダのそばから離れる……⇩ 271 へ

●俺は覚悟を決め、アルディーアと一対一の決闘を申し込む……⇩ 9 へ

236

しかし、俺は道化の町へ行き老オーギュストの果たせなかった『天界の扉』の謎を突きとめてみたい。それが老オーギュストに対する俺の果たせなかった恩返しになると思うからだ。

⇩ 39 へ

237

老婆は食い入るように水晶玉を見つめていたが、やがて口を開き、

「おぬしは近いうちにこの扉の向こうへ行き、神々と出会うじゃろう」と告げた。

⇩ 128 へ

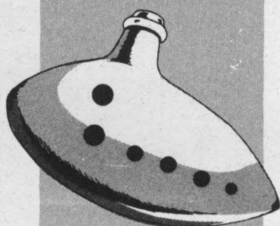
238

いきなり右方向の空からデビルが二匹襲ってきた。反射的に麻袋でデビルたちをはたき落とす。地面を割ってまたもやデビルが襲ってくる。
「セイル、ドエウマエ？　jf8ネアナリ・テ！」
小柄な悪魔どもだが、次々に襲いかかってくるので刺し傷だらけとなる。

⇩ 104へ

239

不安そうなエルマに向かい安心するように俺は小さく頷く。エルマはにっこりと微笑み、小さな胸の所にしまってあったピンク色の素焼きを手渡す。
「これをあげる」
「なんだい？」



オカリナ

「オカリナ。御守りの代わりなの」
そのオカリナはまだエルマの体温を宿してほの温かかった。目の前には遠くの山々が水飴のように歪み、木々が海藻のようにゆらゆらと揺れている。
「これがひょっとすると神々の国へと通ずる扉なのだろうか？」
不安そうに俺の手を握り締めるエルマの頬にキスすると、俺は空間の歪む方へと進んで行く。

⇩ 261 へ

240

「今、なんと言った」
「『天界の扉』とは、一体何を指すのか知りたいんです」
「天界の扉……」
「知っているんですね！」
「やめておけ。『天界の扉』を求めた者は、皆ろくな目に遭っておらん」
「なんとしても知りたいんです。命ある限り『天界の扉』を探し求めて歩く覚悟でいるんです」
「まだおまえは若い。無駄な情熱を燃やすよりも生命を大事にするんじゃな」
「おとうさん、カルルって勇気があるんだから。ね、カルル」
エスメラルダがブラウンの瞳で悪戯っぽくウインクする。
「親愛なる人のためにも『天界の扉』とは何なのかを知らなければならないんです」



「……」
「お願いします！　オリスカニーさん！」
「おとうさん、この人はわたしを助けてくれた恩人なのよ。『天界の扉』とは何なのか教えてあげたっていいじゃない！」
沈黙を決めこんでいた老人は仕方なさそうに口を開いた。
「主人思いのおまえさんに負けた……。よかろう、教えてやろう」
⇩10へ

241

老人は部屋の奥で小柄な体を安楽椅子に埋め、こちらを見ていた。部屋の隅っこから動こうともしないこの不思議な老人を、俺は「隅の老人」と勝手に名付けた。
⇩97へ

242

「あなたがまさか話しに聞いていたカルルだったとは……。これも何かの縁……」
「君は本当に」
「そう、ゼノビルJr。でも、ゼノビルって呼んで。昔、私のお母さんはあなたの後を追って『天界の扉』に飛び込んでいった。けれど肝心のあなたには巡り会えず、私の父と出会い恋に落ちそして……」
「君が生まれたってわけか」

「お母さんからあなたの事はよく聞かされていたわ。勇気のある、純粋で」
「もういい。君は今この大海で、一体何をしているんだ?」
「見ればわかるでしょ。略奪者よ。この地球で生きていくにはそれ以外」
「恥を知れ」
「馬鹿な人。もうすぐこの地球もミナクスによって再び黒夜の時代に入るのよ。生物は皆暗い冬眠に入り、活動する者はミナクスによって狂わされていく……」
「ミナクスとは一体何物なんだ?」
「時間を自由に操る暗黒の女王。魔王モンデインの弟子だったと言われる……」
ゼノビルは汚れたコインをはじきながらまるで夢を見ているかのように語る。
「そのコインはこの世界のかい?」
「いいえ。私のお守りよ。よかったら何枚かあげようか?」
「略奪者から施しは受けたくない」
俺はつっぱねた。
「強がり言うもんじゃないわ。」
ゼノビルは俺の手にコインを握らせる。

⇩ 156 へ

243

「ちきしょう。やつらだ、〈黒き死神〉だ！」

いきなり轟音がして艦内は地震のように激しく揺れた。

「あいつらめ！」

そう言うとジョーは外に飛び出していった。俺も脚がふらつくが、彼の後を必死で追う。

空母エレメンテは火災に包まれ、人々は甲板に逃げ、〈黒き死神〉の来襲に備えていた。後方から突然海が盛り上がり、黒い物体が浮び上がった。〈黒き死神〉というやつだ。中から小型の動く箱が次々と飛び出てこちらに向かってやってくる。中には灰色に鈍く光る服を着た連中が火を噴く武器を構え襲って来る。船上はさながら地獄と化した。あちこちで悲鳴が聞こえ男たちが焼け死んでいく。黒焦げになった体から煙をあげながら。

⇩ 176 へ

244

俺は正直に身の上話をした。そして、神々の国が果たしてどこにあるのかを老女に尋ねてみた。老婆はあいにく俺の職業がお好きじゃないようだった。世間から白い目で見られるのには慣れっこなので別に気にはしなかったが……。

「モルギアさん、どうなんですか、本当に、神々の国はこの世に存在するんですか!?」

必死になって問う俺に、老女は、

243～244

「扉があるとは以前からこの耳に入っていたが、詳しい事はよくわからんわ。しかし、…」
「あんたはこの辺りに伝わる伝説で、こういうのをご存じかな」
そういうとモルギアは低く垂れ込める声で不気味な詩を語った。

獅子が大暗空で勝利の咆哮を成した時
大魔王モンデインの唸りは止みぬ。
至福千年王国が続くやも
人心三たび狐盗の態に陥る時
天空に死の塵風が乱立す。
モンデインの悪心ミナクスに移り
下界は時と空間の錯綜に陥る。
西暦二一一二年ミナクスは
地上に腐醜と狂気を対峙させ
・・
哮笑す。
ミナクスを討たぬ限り
地上は永久に大暗夜となりぬ。

「昔から扉の向こうへ行った者は誰一人として帰って来なかった。ミナクスとかいう化け物の起こした恐ろしい仕業（しわざ）という話がもっぱらじゃ。扉とはまさしくミナクスの悪魔の入り口……。おまえさんの言う『天界の扉』とかいうものもその扉の一種じゃろうよ……」
「では神々の国というのは……」
「あるわけなかろう」
モルギアの話にしばらく返す言葉が見つからなかった。
「嘆くな、カルル殿。噂によると、エックスとかいう街に住むクレリック・アントスという人物がその扉の向こうから帰って来たただ一人の生き証人という話」
俺はクレリック・アントスの住むエックスの街まで今直ぐ出掛ける支度を始めた。

⇩ 96 へ

245

「王の中の王」それがロード・ブリティッシュの尊称らしかったが、俺はあえて水晶占い師ヒキターンスを選んだ。
老オーギュストが生前にロード・ブリティッシュの偉大な業績を讃えていたが、あまりにも偉大な人物に頼るのも面白くない。俺はとにかく将軍なのだ。今はまだ名ばかりだけれど、いつかはロード・ブリティッシュ以上の力を持つドワーフの中のドワーフになってみせよう。

だが今の段階ではまだ自分が何をしたらよいか皆目見当がつかない。だからここだけは水晶占いでみてもらい、これからの自分の、いや領民の指針とするのだ。『天界の扉』についても知っているかもしれない。

⇩ 188へ

246

すみかだった洞窟を出てから一週間が過ぎた。生まれて初めて見る外界は全てが新鮮に映る。街道にある小村で食事をとっていると、
「隣村でエルフのじいさんに俺の金運を占ってもらったぜ。驚いた事に、もうすぐ金が目の前に勝手に降って湧くじゃろう、とか言っていたが、ほら、ここに来る途中で金貨四十一枚、落ちているのに巡り合ったぜ」
「いくらか分けろや」
「ふ、ふざけんない！」
そんな話をしているホビットたちが隣にいた。
――ジグムント老に違いない！　隣村に飛んで行く。

⇩ 259へ

247

二人の会話に俺はハラハラし通しだ。ゼノビルは宝物殿に入り込み、財宝をかっさらう気でいる。その魂胆にロード・ブリティッシュが気づいたとしたら……。脂ぎったロード・ブリティッシュが目を光らせ、いきなり大笑いした。

「ウワッハアアハアハハ」

俺たちの狙いがもうばれてしまったのか。周りの護衛兵士が俺たちを取り押さえに来るような気がした。

「ゼノビルとか申したな」

「はい」

「そなた、正直に申せ」

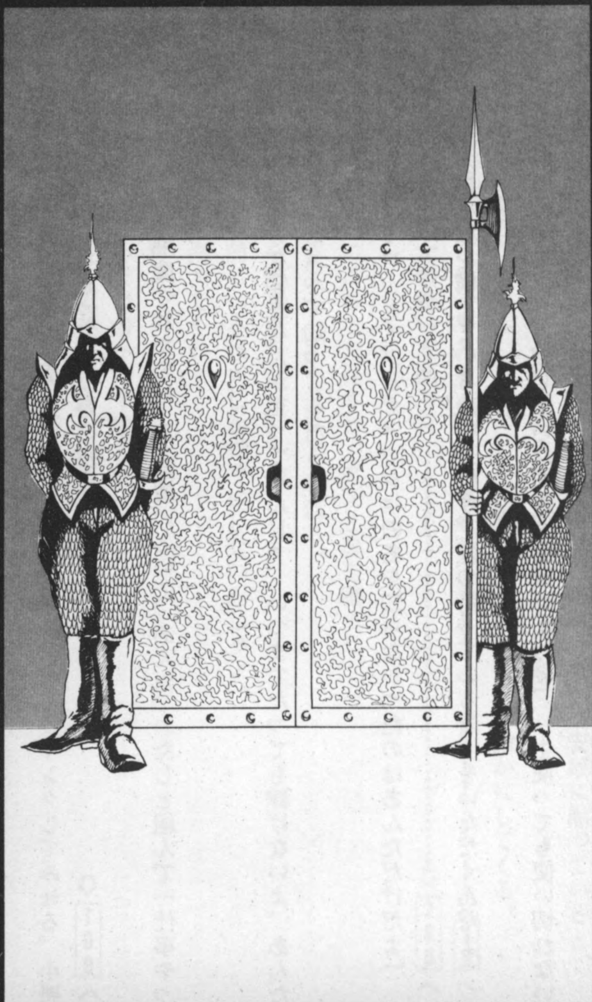
「……？」

俺はこの場からどうやって逃げ出そうか必死に考える。

「そなた、このわしの財宝が、見たいのじゃろう？」

「は…い…」

「そうじゃろう、そうじゃろう。なにしろ世界中のありとあらゆる財宝がしまってあるんじゃからな。そしてそれを見せられるのはわししかおらん。好奇心旺盛な娘なら一目見てみたいと思うのも当然と言えば当然。よしよし、見せてやろう。本当に最初から正直に申せばいいもの



を」

俺たちは宝物殿へと護衛兵士により案内される。ゼノビルは軽くウインクしてみせる。小悪魔は先程の緊張など何とも思っていないのだろうか。

⇩ 100 へ

248

「わたしの商売を邪魔されたのはこの際置いといて、あんた、わたしと組んで一仕事やってみない？」

「俺と……？」

「今夜のようなちっぽけな領主なんか狙ってたんじゃ、いつまでたっても稼げないよ。あんた、ロード・ブリィティッシュって知ってるだろう」

「いいや」

「泥棒稼業している奴でロード・ブリティッシュの名を知らなかったのはあんただけだよ」

「誰なんだい」

「海の向こうで大きな城を構えている凄い王様さ。奴の持っている財宝をいただくんだよ」

「二人でかい？」

「そう。度胸のいい相方をずっと捜していたんだ。財宝は山わけ、一生使っても使い切れないけれど」

ゼノビルはそう言うと悪戯（いたずら）そうな視線でこちらを見つめる。俺が不安げに黙っていると、
「あんた、まだ若いんだから、なんだってやれるはずでしょ。ね」
耳もとでそっと囁（ささ）くのだ。汗ばんだゼノビルの胸元から甘い香りが微かにしてくる。
●「わかった、やるよ、やってみるよ」と返事をしてしまう……⇩76へ
●残念な気もするが彼女の誘いを断る……⇩280へ

249

老婆は上目づかいにこちらを見ると、フンと鼻を鳴らし、
「何を見て欲しいんじゃ」とそっけなく尋ねる。
「俺のじいちゃんの行方を知りたい」
「フフン。あたしは目の前にいる当人しか相手にしないんじゃよ」
「じゃあ、おれの将来を占ってくれ」
「あたしに幾らよこす？」
「占いの料金は決まっていないのかい？」
「ああ、気は心。さあ、おまえさん、幾ら払うかい？」
……領主とはいえ、懐（ふところ）には金貨三十枚しか持たない貧乏騎士だ。

●しかしここでは、誠意を示す事が何よりも大事だ。**俺はなけなしの金貨三十枚を支払うと老婆に告げる**……………………………………⇩268へ

●これから何かあるといけないから半分は残して、**残り十五枚を支払う。**これがせめてもの誠意だ……………………………………⇩56へ

●果たしてこの老婆は正確な教えを与えてくれるだろうか。**不安なのでとりあえず金貨十枚を支払っておく**……………………………………⇩112へ

250

薄暗い小屋の中には、明らかに人間やエルフと思われる者たちが手足を縛られて横たわっているではないか。彼らは皆洗面器に盛られた飯をガツとまるで犬のように食っている。何カ月も洗ったことのない体からは異様な臭気が漂っている。どれもこれも一枚の布しかまとっていない。

「しまった。牧場にもう一人つないだままだった。カルル、しばらくこいつらを見張っていてくれ」

ギルクリストが外へ出て行った。臭気で俺も長くはいられそうもない。……⇩171へ

251

「カルル！　早く逃げなさい！」とゼノビルが小刀を抜き、兵士たちと戦いながら叫び続ける。

「何言ってるんだよ！　儲けは山分けだろ！」

捕まれば死は免れないだろうが、ゼノビルだけ置いて逃げる気はしなかった。一人で逃げるくらいなら……。

彼女がとうとう兵士たちに取り押さえられてしまった。俺は意味のない叫びを上げながらゼノビルの元へ走り寄ろうとするが、遮る兵士たちが邪魔だ。気がつくと後ろから腕も足も兵士たちに押さえられてしまい、びくとも動かない。

「ロード・ブリティッシュ様の財宝を狙うとはこの罰当たりが!!」

「ゼノビル」

「カルル！」

どうにもならない自分がたまらなくいらだたしい。このまま二人は死ぬのか……!?

腹の底から叫び声が上がる。

気が遠くなって行く……。目の前で何かが光る……。その中に二人消える事ができたら……。

いや、俺はもう。光の中に吸い込まれているのか!?

⇩ 163 へ

252

「あの獲物は私のものだ……。先に手をつけた者に優先権があるのだ。おとなしくおまえは手を引け」

どうやらこの人物も領主の宝を奪いに忍びこんだようだ。しかし妙に声が細い、しかも妙なアクセントだ。

「嫌だ」

俺は強気にでた。一世一代の大仕事だ。

「あの獲物は私のものだ……。先に手をつけた者に優先権があるのだ。おとなしくおまえは手を引け」

再び決まり文句を繰り返す。

●獲物は自分のものだと言い張る……………………⇩ **18**へ

●獲物を諦めてしまう……………………………⇩ **92**へ

253

「ところでおぬし、これが解けるか？」

「隅の老人」は低く呟き、ある問いを俺に向けた。

諸行常に刑而下にあるも

その姿を外界に見せず

無限に割り続けても
無限に積み続けても
決して姿を変えぬものの名は……？
●謎が解けたら答えを英語で綴る。それぞれのアルファベットが何番めかを教え、それらの数を合計する。解けた数のナンバーへ進む
●答えられない場合…………………………⇩178へ

254

チグサデギュ山の氷穴は強風に吹かれながら透明の氷の山肌をさらしていた。
「ミナクス！　とうとうおまえを探し当てたぞ。思えば、おまえが作り出した時空の歪みが多くの人々を巻き込み、巻き込まれた人は皆命を落としていった。おまえを今倒さなければ地球が再び正常な時を取り戻す事はできない」
魔統剣を抜き、氷の山を昇って行く。武器といえばこの剣だけだ。
⇩193へ

255

マスクを取った顔は汗で光っていた。体格はよかったが顔は皆童顔だ。十五歳前後だろうか。こちらをじっと見つめる連中に俺も負けずに睨み返してやる。一人一人の顔に視線を移していくと、どこかで見覚えのある顔にぶつかった。それは女の顔だ。ああ……。そう

だ、年はまだ彼女ほどいってはいないが、あれは……。あの顔は……。だがここに彼女がいるはずがない、他人の空似か。俺は迷いながらそっと呟いた。

⇩137へ

256

どれだけ歩き続けただろうか。大錦蛇の革で作られた丈夫な靴もその間三足駄目にした。道はだんだん山々に近づき、目に染み込むような白い雪があたりを覆いだす。

⇩32へ

257

道は徐々に細くなっていく。山に入るが道はいつの間にか野と区別がつかなくなっている。上空がだんだん狭くなってくる。木々から時折怪鳥が飛び立ち、肝(きも)を潰(つぶ)す。

「何て世界だ」

――東へ向かったのは間違っていたのだろうか。ふと後悔の念にかられる。

その時だ。目前の林が突然動きだしたではないか。獣か、はたまた人を食うジャイアントなのか。

「だ、誰だ!?」

声を発すると木々の動きはしばらくやんだがまだ油断できない。いきなり後ろで木々が動きだす。



「……!?」
恐怖心が襲って来る。木々が徐々に大きく揺れ、向こうから何者かが姿を見せる。

⇩ 196 へ

258

今、俺の横には静かな寝息をたててナンシーが眠っている。
あの日、「隅の老人」と出会い、俺はナンシーと一緒になる事を勧められた。『天界の扉』の向こうへ再び旅立つには自分の力量ではもう限界だった。若すぎる俺にそれを教えてくれたのがあの「隅の老人」だった。二十一になった俺には二人の子供がいる。二人ともナンシーによく似た女の子だ。
エイリアンやモンスターが出没する日が続くが、俺は束の間の平和を味わっている。神々の国を探し求め、さ迷い歩いた頃の事を懐しみながら——。

END

259

途中の道で行商人が古びた武具を売っている。魔法にまだ自信のない俺はその場にしゃがみこみ、あれこれ品定めをする。
「坊主、これがいいぞ。魔統剣、シルクロードからはるばる運ばれた緑鉱石でできた強固な刀じゃ。これ以上硬い刀はこの世にはないぞ。騙(だま)されたと思って一振り買っていけ」

何かの役に立つだろうと魔統剣を買った。これは俺の魔術に対する保険だ。道を進んで行くと、長い行列に遭遇する。これは捜していたジグムント老が占いをみているのではないだろうか。先頭まで走る。

ところがジグムント老人ではなく、白髪を腰まで伸ばした老占い師だ。

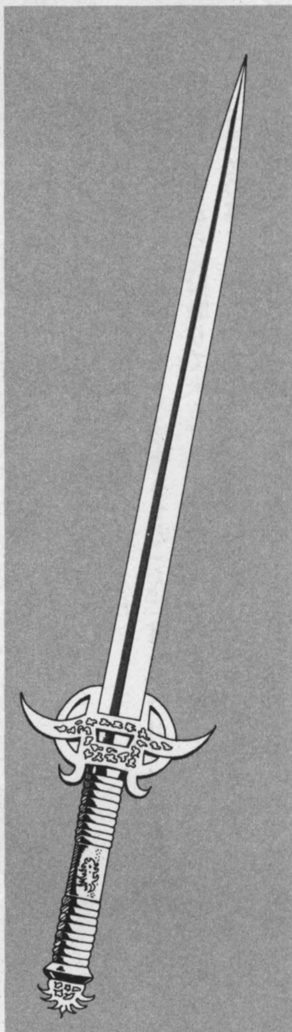
「小僧！　駄目だ、ちゃんと順番通り並ばなければ！」

「すみません……」

頭をかきながら列の後ろへつく。

ジグムント老人の行く先を占ってもらおうか。

⇩ 188 へ



260

二日でその地には着いた。扉の出現はこの地方でも広く知られているらしく、多くの人々が現れるのを待ち続けている。

「神々の国は美女と酒が腐るほどあるって言うがのう……」

「そこに行けば永遠に生き続けられるって聞いているわ」

欲望にかられた人々（といってもこの俺もその一人に違いないが）が渦を巻いている。待ち続けて四週間、空から光が降りて来る。まるでオーロラのような……。われ先にと光の幕に飛び込んで行くが、空天高く舞い上がり、消えてしまう。しばらくすると赤い雨が降り注ぐ。これは……血だ。その後からちぎれた手足が音をたて地面に降ってくる。恐怖のあまり地面をはいずり回る人々。俺は覚悟を決めて光の中に突入する。

⇩ 163へ

261

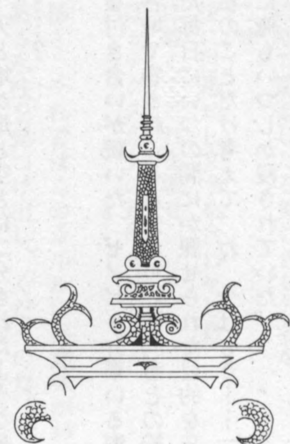
「おにいちゃん」

「エルマ、しばらくあちら側に行ってみる。どうしても調べたい事があるんだ」

「……」

「危険は覚悟の上だ。また戻って来るから……」

「う、うん」



エルマの目を見ているとまた決心が鈍る。覚悟を決め、歪んだ空間へと足を進めていく。体が引きちぎれるかもしれない。そんな恐怖心が襲って来るのを堪え、ぐっと一歩前へ飛び出していく。さすがに両目は固く閉じたままだ。軽いめまいがする。体が宙を浮遊しているような気がする。一瞬気が遠くなるが徐々に両目を開けると……。目の前には一面青々とした畑が広がっている。天と地が畑と空とに二分されたような景色だ。

——ここは……？

⇩29へ

262

奇妙な付き合いが続いた。ゼノビルJr率いる海賊部隊はこの町でしばらく静養していたが、各地で巻き起こる過去からの訪問者との紛争はなく平穏な日々が続いた。俺自身この安穏とした毎日にいつの間にか課せられた目的を忘れかけていた。

「カルル、私のことだけ考えて。ね、今はもう……」

甘い囁きに俺もいつしか浸されていた。

⇩126へ

263

「アントス様！　しっかり」

「あいつは魔物じゃ。どこを突いてもどこを切っても打ち負かすことはできん」

「それじゃ、どうすればミナクスを葬ることができるんですか」

「こんな言い伝えが……こ、この地に残っておる……。そ、それはこんな詩じゃ……」

天界を飛びし勇者よ
汝、その地で邂逅(かいこう)したる美しき女の名を
思い起こせ
名の最後に付帯せし文字を合わせし数
北北西に数えてこれを壊せ
しからばミナクス永久の封印を成し得ん

「アントス様！　それではこのカルルには意味がわかりません！」
「北北西にある氷柱を見つけ出し、くだくのだ。でなければ、ミナクスは倒せん。」
「ああ……。危ない、早くここから逃げないと！」
イザベルが俺をせかす。
「柱を見つけたら、柱を打ちくだけ、カルル。」
大石が降りかかり、辺りは一面煙に覆われる。アントス宰相の生命の糸が切れ、辺りは炎が充満してきた。急いでロケットに戻り、脱出しなければ……。

⇩ 233へ

264

気がつくと俺は薄暗い部屋にいた。いや、部屋というよりもここは牢獄と言った方がいいだろう。鋼鉄のドアには鍵がかけられ、背の倍以上の高さにある小さな窓には鉄格子がはめこまれている。窓から月明かりがさしているところをみると、今は夜なのだろう。俺は果たしてここで処刑されてしまうのだろうか……。いい知れぬ恐怖が襲って来る。そんな時、窓の方から小さな声が聞こえてくる。女の声だ。

「あんた、捕まっちゃったのね」

「……あんた女？……さっきのは女だったのか⁉」

「どう、わたしと組んで仕事をやらないこと？　そしたらここから出してやってもいいわよ」

「あんたと仕事？」

「そう、泥棒稼業。いい度胸してそうだからね。ちょうど今相方を捜していたところだったのよ」

●「わかった、あんたの仕事、手伝うよ。早くここから俺を……」……⇩ 155 へ

●「せっかくだけど遠慮しておくよ」……⇩ 35 へ

265

海賊に連れて行かれた先は大きな船室だった。分厚いドアを開け、中に連れられていく。

中にいたのはあの少女だった。

「ようこそ。私はゼノビル。あなたと少し話があって……」

「君は今この大海で一体何をしているんだ？」

「見ればわかるでしょ。略奪者よ。この地球で生きていくにはそれ以外」

「恥を知れ」

「馬鹿な人。もうすぐこの地球もミナクスによって再び暗黒の時代に入るのよ。生物は皆暗い冬眠に入り、活動する者はミナクスによって狂わされていく。時間を自由に操る暗黒の女王。魔王モンデインの弟子だったと言われる」

ゼノビルは汚れたコインを宙にはじきながら

「そのコインはこの世界のかい？」

「いいえ。私のお守りよ。よかったら何枚かあげようか？」

「略奪者から施しは受けたくない」

「強がり言うもんじゃないわ」

ゼノビルは俺の手にコインを握らせる。


156へ

266

「名前は？」

「マチルダ（MATILDA）……」

「両親は？」

「死んじゃったわ……。デビルに襲われて……」

「そうだったのか……」

「マチルチル城って知っている？」

「いいや、そのお城にいたの？」

「王女だったんだけど、落ちぶれて奴隷になってしまうところだったの……」

「王女!?　そうだったの。苦労してきたんだね」

「ううん……今まで苦労してこなかったからこれも神様がわたしにお与えくださったものだと思うの……そしてあなたがわたしを助けてくれた事も……」

頬が赤く染まるのが自分でもわかった。

⇩ 117 へ

267

「そうか、だったら勝手にしろ」

そう言い残すとロバを引き、去って行く。途方に暮れた俺はとにかく歩いてみることにした。砂浜から奥に入ると森が見える。その中に足を踏み入れると細い道がある。道を進んで

行くと山肌の洞窟が目に入る。

⇩58へ

268

老婆はコックリと頷(うなず)くと水晶玉をゆっくりとなで始める。老婆の右手が徐々に速く水晶玉をなでて行くと、

「オオオ……。僧侶が見える。僧侶がおぬしを呼んでいる」とつぶやく。

⇩63へ

269

「カルル！　ここにいたのね！」

ゼノビルが立っていた。

「お願いだ、俺はどうしても行かなければ……」

「どうしても？」

「ああ、ミナクスを倒す。『天界の扉』を通ればきっと神々の国に辿(たど)り着けると思う。ミナクスさえ倒せば、きっと本当の至福千年王国に行けると思う」

「重症ね、あなたの夢想病は」

「俺もそう思う」

「止めないわ」

「ゼノビル。それとも、俺と一緒に行ってくれるか？」
「駄目、私には沢山の仲間がいるもの。私がいなくなったら……」
ゼノビルは悲しそうな瞳をした。
「私のお母さんは好きな人の後を追って『天界の扉』にまた身を投げた。そしてバラバラになって死んだわ。残されたパパがみじめだった」
「そうだったのか。二度目にゼノビルが扉を通れなかったのはきっと君のパパが好きだったからだよ」
「もういいわ！ 行きなさい」
「それではオニール教授、そしてゼノビル」

⇩ 200 へ

270

「こ、これは……!?」
「ワハフフアフアフホホホホホ!! カルル、驚いたかい？ どうだい、後悔しただろう？」
「嘘だ、嘘だああああ!!」
「ヲヲホホホホホ!! これが私の分身、これが私の姿さ。ありがとうよ、今までの数々の優しい遇し」

「イザベル……　マチルダ……　ナンシー……　ゼノビル……そして俺の脳裏に焼きついているあの子は……遠い昔出会ったような記憶がある、アメリアじゃないか」
今まで俺に好意を示してきたり、中には恋人として俺と……。信じられない。あの娘たちが皆ミナクスの分身だったなんて!!。
「カルルよ、私の安らかな眠りを破ってくれたお礼をしないとねえ」
五人の女が起き出した。彼女たちがミナクスの分身だという事実が、俺にはまだ信じられない。俺の体めがけて飛び掛かってくる。皆、俺の首を締めてくる。恐ろしく強い力で……。ウウッ!!　このままでは締め殺されてしまう。
しかし、このまま彼女たちの手で殺されても悔いはないような気になってくる。気が遠くなってきた……。
イケナイ　コノママデハ　セカイガ　オレノユメガ　オワッテシマウ……。
魔統剣を抜き、彼女たちに切りつける。
「オホホフフフハハウアハウアフ!!　おまえに殺せるかい、この私を!?」
ミナクスは不死身だっていうのか……五人に分身したミナクスは天に向かい無数に乱立した氷柱に姿をくらましていく。暗い空に突き出るように鋭角の氷柱が、敵意を剝き出しにして俺の行く手を遮る。凍え死ぬほど雪が荒れ狂う。





このままじゃ、凍死してしまうぞ。
なんとかミナクスを倒す方法を見つけなければ…。

⇩288へ

271

エスメラルダには小声で、「後で必ず助けに行くよ」と言う。アルディーアには、ひたすら哀願する。

「俺はこの町に初めてやって来た者で、名はカルルと申します。別に彼女、いや、エスメラルダ様とはなんの関係もございません。はい」

アルディーアは俺をまるでハエかゴキブリでも見るかのような顔をして、

「ほほう。この町には初めてか……。なら通行税は払ってあるんじゃろうな」と問う。

「い、いえ。まだです。どうかお許しください。はい」

「おまえはまだ若いようだが、痩せても枯れても男だろう」

「は、はい、はい！」

「おまえは男たる気高き誇りもないようじゃな」

「いいえ。はい、は　はい」

「そういう男は生きていても用はなさない。ごくつぶしなんだよ。なあ」

「お、お　許しください」

「人にそう哀願を垂れるじゃない。何故、剣を取り、立ち向かおうとしない？」
「は、はい。お、お許し……、いや、は、はい」
「死ぬのがせめての名誉だ。なあ、そうは思わんか？」
「は、はい。え!? 死、死ぬ!?」
「おまえに名誉を与えてやろう。この場でな」
部下たち剣を抜く。嫌だ!! こんな場所で死にたくない！

⇩ 222 へ

272

「信じてもらえるかどうか……。神々の国って知っているかい？」
「いいえ」
「俺はその地を訪ねに……」
「そういえば神々の国はどうだかわからないけれどあなたにとって何か役にたつかもしれない人がいるわ」

⇩ 13 へ

273

「お泊まりですか？」
ここは宿なのだろうか。男が渡す鍵を持ち、しばらく佇(たたず)む。

⇩ 6 へ

274

キャディラックと名乗る怪物は目指す街に到着した。

「じゃあね、カルル。きっと来てよ」

ナンシーは片目をつぶってみせた。何かの挨拶なのだろうか、俺も片目をつぶってみせるが慣れないのでどうもぎこちない。ナンシーはまた笑った。

⇩ 110 へ

275

乗客を乗せずに小型ロケットが轟音をたてて宇宙空間に飛び出していく。宇宙空間は神の意志によって作られた最高の装飾品のように星がきらめき、光が渦を巻いていた。ひょっとしたらこれが、この宇宙空間が神々の国なのかもしれない。

⇩ 283 へ

276

部屋からナンシーが出て来るところだった。赤ら顔の中年男が、

「次は必ずしっぽを摑んでやるからな。このあばずれめ！」

と怒鳴っている。

「ナンシー……」

俺の姿が目に入った彼女は嬌声を上げて飛びついてくる。

「馬鹿者！　ここをどこだと思ってやがる！」

先程の赤ら顔が怒り狂っている。

俺とナンシーは手を取りあい、ケイサツを後にした。

「ナンシー。君は一体何をやったんだい？」

「そうね、カルル。あなたには本当の事話すわ……」

⇩ 160 へ

277

しばらく歩いていると、後ろから大きな唸り音が聞こえてくる。鉄でできたばかでかい箱だ。

「ハーイ！　ヒッチハイクの坊や、乗っけてやるわよ」

ブロンドの長い髪を風になびかせ、女が四角い箱の中から声を掛ける。髪を女のように伸ばした男たちが口笛を鳴らしている。箱が止まり、中からブロンドの女が出て来た。

「あら、まだ若いじゃん。隣町に行くんだけどよかったら乗って行く？」

「この怪物にかい？」

「プッ、怪物って、何言ってるの。キャディラックのこと最近じゃカイブツって呼ぶのが流行なの？」

「それともこれは最近出没するっていうエイリアンのこと⁉」

「……？　変な奴」



陽気なブロンドは腹と脚を極端なまでに露出しているので、俺は視線をどこに向けたらいいか戸惑った。これがひょっとすると神々の国へと通ずる乗り物なのかもしれない。俺は言われたままこの四角いモンスターの中に入った。

⇩48へ

278

※所持品について

●指輪だけ持っている ⇩289へ

●ロザリオと指輪を持っている ⇩42へ

279

ゼノビルのくれたコインにはどうやら時間停止術があったようだ。彼女に感謝し、このすきに氷壁を抜け、ミナクスの居場所に殴り込む。

⇩101へ

280

「組んで仕事をするのがいやなのかい？」

「ああ。悪いけど」

「強情だねえ。わたしと組んでやれば……」

「駄目だよ。俺はまだ一人前じゃないから、あんたの足でまといに……」

「そんな心配いいから」
「駄目だよ！」
「……わかった」
ゼノビルはあきらめた顔をして去っていった。
「カルル、でもね、運命からは逃れられないのよ」

⇩ 186へ

281

道を尋ねながらようやくホテル・カリフォルニアに到着した。空腹でめまいがしている。
ナンシーの名をだすと、男がテーブルまで案内してくれた。
「カルル！ よかった。早く早く。ステーキはどう？ ここのは最高よ」
出てきたレア・ステーキとかいう肉はやけに火が通してあり、あまりうまくない。いつも食っていたウスギンバラの生肉の方が百倍うまい。

⇩ 175へ

282

そこにいきなりマシンガンの嵐だ。
「おまえら、よくも私に恥をかかせてくれたわね」
ゼノビル自らマシンガンを反乱兵たちに浴びせている。
黒焦げの死体があちこちに散らばる。

反乱軍は完全に鎮圧されてしまった。俺は改めてゼノビルの凄まじい独裁者ぶりに圧倒されたが、彼女は通報した俺に以前よりも信頼感を抱いてしまったようである。

⇩162へ

283

まもなくしてンテクケッジェ星に到着する。破壊された建物がいたる所に置き去りにされている。



地上では高温のために生物は住めず、地下に生活している。姿はドワーフのようなずんぐりとした体格で、顔は地球に住む人種とはさほど違いはなかった。
アントスのいる城に近づいたが、たちまち殺気だった護衛兵たちに取り囲まれる。
「不審者はこれ以上中へ入れないんだ！　さっさと帰れ！」
「俺は地球からアントス様の元へある事を尋ねに来たカルルと申す者、決して怪しい者では……」
「ミナクスの化身かもしれん。槍で突いてみろ！」
この地の人々も相当重症のミナクス恐怖症にかかっていた。とりあえずここは身を引き、路上で思案に暮れてしまう。

⇩ 75 へ

●●284

「おまえは魔法が使えるのかい？」という占い師の問いに俺は答えた。

「こうみえても**俺は魔法使いさ**」……………… ⇩ 122 へ

「俺は戦士だ。魔力なんて持っていないよ」……………… ⇩ 249 へ

285

オカリナは素朴なしかも陽気な音色をたてただけだった。場違いなその音色が悲しかった。俺はたちまちバルロンの鋭い嘴に体ごとくわえられ、氷壁に叩きつけられる。ここまで来てながらまさか、南極が俺の死に場所になるとは……。

DEAD END

286

火を噴く武器を手に取ってみたが使い方がよくわからない。もたもたしていると、四方八方から猛火が襲ってくる。気がつくと残っているのは俺一人ではないか。回り一面がオレンジ色に染まり、俺の体に火が乗り移ってくる。

⇩ 46へ

287

老人の話によると、扉はこの街の南東に位置するハスイチュルン山の頂きにしばしば発生するという事だった。待つこと二日、ついに扉が出現した。

また俺は無駄な事をやろうとしているのではないか……。そんな思いがふとよぎるが、覚悟を決め、目も眩む光の渦にまた俺は体を投げ入れた——。

⇩ 278へ

288

ミナクス打倒の鍵は北北西の氷柱をくだくことだとアントスは言い残した。だがそれは一体何本めなのか……。アントス宰相の最期に残した謎の詩を思い出してみる。

天界を飛びし勇者よ
汝、その地で邂逅(かいこう)したる美しき女の名を
思い起こせ
名の最後に付帯せし文字を合わせし数
北北西に数えてこれを壊せ
しからばミナクス永久の封印を成し得ん

俺が邂逅(かいこう)した女たち、巡り合った女たち……。時を越えて、知った女たち……。誰だ？

●ミナクスを打倒するには、北北西の氷柱をくだく以外に方法はない。さて何番目の氷柱なのか？　その数の番号へ進むこと

●わからないときは……………………⇩114へ

289

青い世界が目の前にあった。『天界の扉』の向こうは青い世界だったのか？
いや、この音は波の音。俺はいつの間にか大海に漂っている……。神々の地とは単なる海原の事だったのか。俺の隣にいた古老もいない。波に身を任せながら失望感と不安感に襲わ

れる。遠浅のためにあまり泳ぎに自信のない俺でもどうにか砂浜まで泳ぎきれた。息を荒げて、大の字になっていると、
「若いの、どうした？」と、声が聞こえる。
起き上がると、ロバを引いた老人がいた。白い髭(ひげ)が胸まで伸び、皺(しわ)だらけの顔が年輪を表している。粗末な布一枚をまとった格好は今まで見たことがない。どうやらここは俺の知らない土地のようだ。神々の座とはほぼ遠い場所に来てしまったようだ。
「あの……、ここは神々の座とかいう所ではないでしょうか」
「何言っておる。溺れて頭がおかしくなっちまったか」
やはりここは地球のどこかに違いないが、今まで俺のいた時代とは明らかに違う
「おまえ、今仕事してるのか？」
「いや……」
「だったら俺と一緒に来い。手下を探していたところだ」

⇩ 58 へ

290

「カルル、ところで君は『天界の扉』を知っているかい？」
「天界のトビラ……？」
「そうさ、あらゆる種族の生きとし生ける者が永遠の平和と幸福に包まれて暮らせる至福千年

王国……。この世の争いも猜疑心も嫉妬も憎悪も皆昇華し、永遠の生命を宿すというその地へ通ずる『天界の扉』……」
「それは一体どこにあるの？」
「さあ、残念ながら誰にもわからない。いや、過去にその扉を探しに苦業の旅に出た者もいたようだが……」
「で、どうだったの？」
「まだ戻っては来ない。ある者ははるか彼方の地で死に、白骨となりケスルチビギュヌス川に流れつき、またある者ははるか一千里の山中で死にたえ、冬虫夏草の肥やしになっていったという……」
エクトゥスの不気味な話が途絶える。

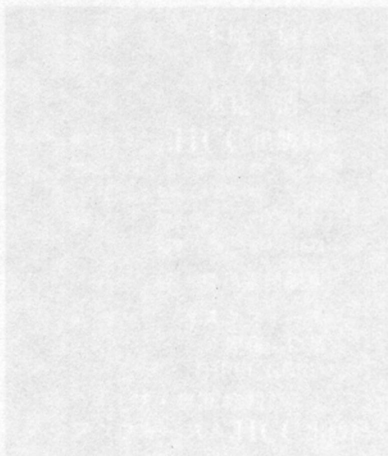
⇩ 213へ

291

「オレハ、コノヤマノリョウシ。ナマエハ、ゲルトルード。アナタサマハ？」
「カルル……」
「カルルサマ、イママデノゴブレイ、オユルシクダサイ。」
「いいんだよ。それよりも宿はこの辺にないだろうか？」
「アリマス。オレノドウクツデモイイノダケド、カルルサマニハチョット……。ココイラデイ

チバンサカエテイルマチ、バラデインニオツレシマショウ」
二人はバラデインに向かい歩いて行く。頭はそれほど良くないようだが、ゲルトルードは猟師としてバラデインの街に毛皮を売りに行っているようだった。





⇩ 7 へ



アドベンチャーノベルス

ウルティマII

ULTIMA II

発 行 1986年11月1日初版
定 価 680円

著 者――本橋 信宏
原 案――L. ブリティッシュ
発行人――蓮見 清一
発行所――JICC出版局
〒102 東京都千代田区麴町5-5-5
〔振替〕―東京7-170829(株)ジック
〔電話〕――営業部・03 (234) 4621
編集部 03 (234) 3688
印刷所――慶昌堂印刷㈱
編 集――タスクフォース
イラスト――佐藤 仁彦
ブックデザイン―THREE CORD

〔禁・無断転載〕
©タスクフォース&JICC出版局

"ULTIMA" is a trademark of Richard Garriott.

乱丁、落丁本はご面倒ですが、小社営業部宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

■お願い

本書についての電話によるお問い合わせは、ご遠慮下さい。

ISBN4-88063-220-1

アドベンチャーノベルス・シリーズ



フィクションにゲームの手法を加え、ストーリー展開にあなたが一役買える、そんな新しいエンターテイメントがアドベンチャーノベルス。この本の中でなら、主人公になりきっての冒険も、また、映画監督を気取ってのストーリー作りも楽しむことが出来ます。

どんなスリリングな冒険に遭遇できるか？

どんな面白いエピソードに寄り道するか？

どんな難解な謎に挑むか？

すべては、あなたの判断とひらめき、それに、たくさんのイマジネーションとほんの少しのラッキー次第です。

アドベンチャーノベルス・シリーズ自信のラインナップ、どうか存分にお楽しみ下さい。

JICC出版局



アドベンチャーノベルス・シリーズ



絶賛発売中

ウルティマI

新書判
定価680円

ダークサイドを支配する邪神モンデインを倒し、世界の秘密を解いていく旅が始まる。

破天荒な主人公の成長、多種多彩なキャラクターとの出会い、広大なマップの至る所で繰り広げられる多様なイベント………ロール・プレイング感覚満載で、ユニークな、あのウルティマの世界が、今、ここに広がる。

Adventure Novels "UltimaI"
Character and Story Base Licenser
©Lord British／Origin Sistems inc.



アドベンチャーノベルス・シリーズ



1930年代初頭、新聞記者のはしくれとしてメキシコを訪れた私は、とある田舎町で思いもかけない大事件に出あった。ピラミッド、灼けつく太陽、殺人そして女……。アステカの遺跡にまつわる謎と冒険に巻き込まれた私は、多くの困難に立ち向かわねばならなかった。陰謀うずまくメキシコのジャングルで私が見たものは？　そして遺跡の謎とは？

ASTEKA アステカ

パソコンゲームのスリルと楽しさに
小説の面白さを加えた、
新しいエンターテイメント

絶賛発売中

新書判
定価680円

ザ・スクリーマー THE SCREAMER



199X年、三度目の大戦が終わった。焦土と化した東京に舞い戻った俺は、戦友の死をきっかけにモンスター狩りを生業とすることになった。発狂したコンピューターが造りだしたモンスターを相手に戦う命知らずたちを人は〝スクリーマー〟と呼ぶ。力のみが支配する世紀末。ＢＩＡＳ（バイアス）にはびこるモンスターたちを相手に、俺の戦いは始まった。



アドベンチャーノベルス・シリーズ



「俺の名はモズ、モズ・シバット。とんだドジを踏んじまって、宇宙マフィアのボス・グリンプの手に落ち、伝説の最終兵器『帝王の涙』を探す旅に出るハメとなってしまった」

さて、モズの行く手には………

『帝王の涙』の争奪と謎の解明に向かうモズの演ずるスペースオペラ、モズと個性豊かなキャラクターとの道行きで繰り広げられるスラップスティックコメディを同時に楽しめる一冊。

TEARS OF EMPEROR
帝王の涙

パソコンゲームのスリルと楽しさに
小説の面白さを加えた、
新しいエンターテイメント

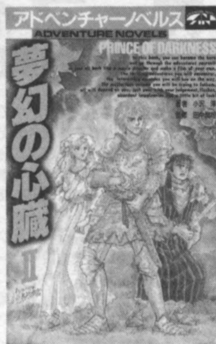
絶賛発売中

新書判
定価680円

夢幻の心臓II
PRINCE OF DARKNESS

「夢幻の心臓の戦士、エルダー・アインの地を暗黒の手より解放するため、ここに現わる」

アドベンチャーノベルシリーズのヒロイックファンタジーの一作目。光の神よりエルダー・アインに召された夢幻の心臓の戦士が、暗黒の皇子を倒すべく、また自己の失われた過去を取り戻すために、人間界・エルフ界・魔神界を旅する。ひろがるファンタジックワールド、登場する様々なキャラクター、ストーリーに乗って展開されるロールプレイング感覚を十分楽しめる一冊。





アドベンチャーノベルス・シリーズ



事件の幕を開けた正体不明のミサイルは、世界五大都市へ核ミサイルをプレゼントする予告だった——贈り主はハワード、元・米陸軍の核戦略専門のマッド・サイエンテイスト。タイム・リミットは48時間——。阻止計画を完遂するため、事件の核心を秘めた南海の孤島トリニア島に特殊部隊が渡った……。

形勢不利な敵地の真只中で、作戦行動を展開するアドベンチャー。

SF アニメパソコンゲームとして人気を博したスクウェア制作・発売ソフトのアドベンチャーノベルス化!!

WILL
ウィル

パソコンゲームのスリルと楽しさに
小説の面白さを加えた、
新しいエンターテイメント

絶賛発売中

新書判
定価680円

カーマイン
CARMINE



西暦2008年、地球人類はかつてない程の混乱に直面していた。内惑星資源の分配と、分子生物学の軍事利用の制限に関する連邦会議がジュネーブで開かれた。翌月、某国の統合参謀本部から陸軍第23特殊部隊に極秘の内に出動命令が下った。作戦のコードネーム『カーマイン』、作戦内容極秘……。命令を受けアーマード・ファイティング・ウォーカーで特殊研究施設・カーディナルに乗り込んだ俺を待ち受けるものは!?

数々のトラップをかわし、人間型歩行兵器・ドールと戦う、SFハードアクションアドベンチャー。

マイクロキャビン新作パソコンゲームのアドベンチャーノベルス化!!

JICC出版局 〒102 東京都千代田区麹町5-5-5 TEL.03-234-4621

JICC

“アドベンチャーノベルス”シリーズ

アステカ（既刊）
ザ・スクリーマー（既刊）
帝王の涙（既刊）
夢幻の心臓 II（既刊）
ウィル（既刊）
カーマイン（既刊）
ウルティマ I（既刊）
ウルティマ II（本書）
ウルティマ III（近刊）
ウルティマ IV（近刊）

These days, this world goes mad! I was in New York city, or at least I believed so.
Now I'm in a strange land trapped within time.
And many weird things and monsters attack me!
Realizing Minucks, apprentice of Evil Lord Mondine, devised these things, I set forth to destroy Minucks, through the time and the space.
But, what a terrible end! How could I imagine it, and Minucks is mad with joy!

Ultima II

最近、世の中狂ってる。現にニューヨークにいたはずの俺も奇妙な世界にタイムスリップ。俺の周囲で起こる不可解な事件、襲いかかる怪物…。やがて俺は地球を混乱に陥れているのは、千年の昔に滅ぼされた大魔王モンディンの弟子、ミナクスであることを知り、時空を超えミナクス打倒に立ち向かったのだった。ミナクスを狂喜させる意外な結末が待ち受けていようとは知る由もなく……。

JICC出版局

ISBN4-88063-220-1 C0276 ¥680E 定価680円